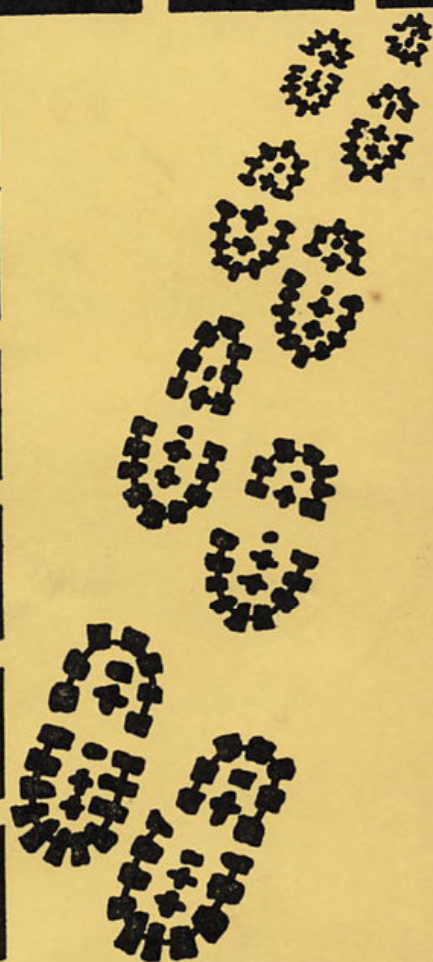
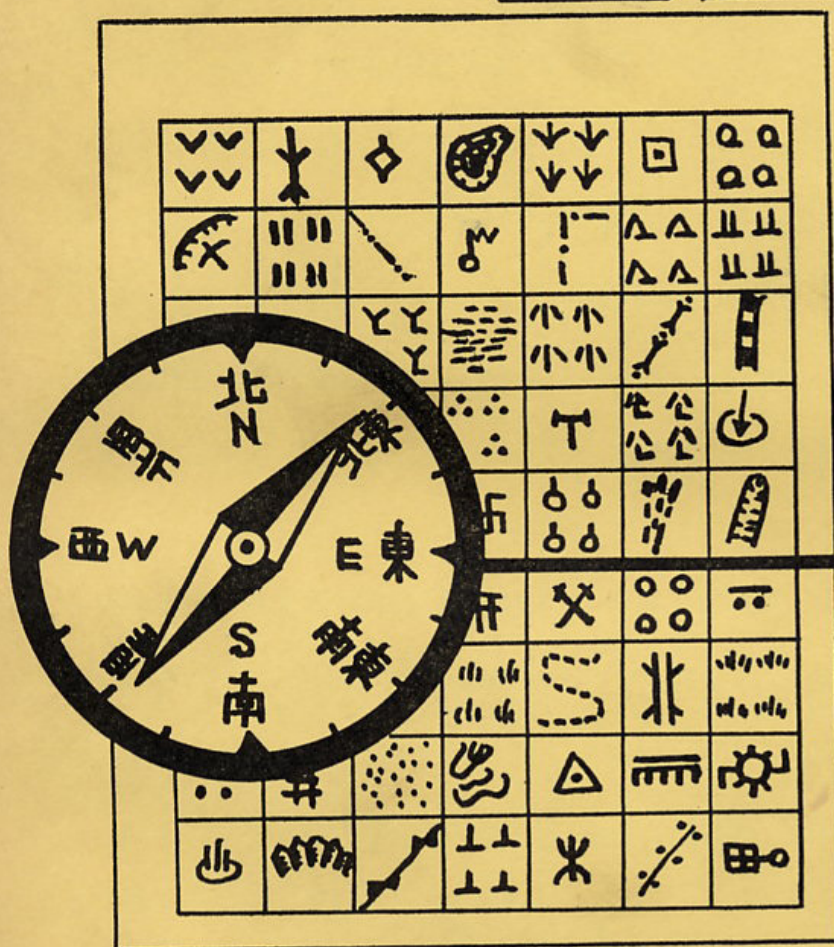


# 白海 '69



群馬大学工学部  
ワンダーフォーゲル部

6号



## 巻 頭 言

部 長 高 橋 徹 夫

部誌「皇海」6号をここに発行する。

本号は 1968 年 12 月より 1969 年 12 月までの工学部GWV部員の行動記録である。

1969 年度は新入部員欠如のままスタートしたりし、残念ながらやや活気がなかったように思われるが、何にしても各員事故もなく行動できて幸いであった。

1969 年度を皮切りにクラブとしての活動地域を奥只見山域に求めてみたが、これからこの地域の計画的、総合的踏査をじっくり行ってみる必要があるだろう。

群大工学部ワンダーフォーゲル部が新たな段階に入る方向としては、数知れぬ大学WVの存在する現在、GWVはGWVなりの特色を出すよう方針を定める事ではないだろうか。

地域的に、渡良瀬源流域、利根源流域、只見源流域及び山域……比較的手近な地域に踏み入って余り有る、すばらしい舞台が横たわっているだけに、徹底的に踏査して見るのも特性を出す一つの手段かもしれない。

夏期、秋期に集中しがちだった行動を春期（残雪期）及び初冬（新雪期）にも行動出来るだけの技術、体力、装備の拡充も、これからの一つの課題である。

大自然の彷徨に果てしなくと、愛情を感じて、ひたすら、単純素朴に歩き回る人間の寄り集りの筈のワンダーフォーゲル部……「渡り鳥」が飛ばなくては、話にならぬ。



# 目 次

巻 頭 言	部長 高 橋 徹 夫	1
目 次		2
合 宿		
春 合 宿		1
新 人 合 宿		1
袈裟丸隊		2
庚 申 隊		2
夏 合 宿		
丸山・朝日隊		3
荒沢・平ヶ岳隊		10
夏合宿の天気		13
"    感想		15
"		17
教育夏合宿便乗		18
分散ワンデルグ		
上信越方面		
鳴 神 山		19・20
袈裟丸山		21
谷 川 岳		22
"		22
"		23
平 標 山		24
白 毛 門 山		25
白毛門―巻機山		26
"		27
巻機―割引沢		28
白毛門―清水峠		29
白毛門・朝日・蓬峠		29
尾        瀬		30
金 精 山		31
田代帝釈―奥鬼怒		32



女 峰 山	35
四 阿 山	36
苗 場 山	38
上州武尊山	39
利根源流偵察	40
尾瀬OB山行	41
アルプス方面	
北アルプス	43
"	44
南アルプス縦走	46
南アルプス	48
南八ヶ岳縦走	51
そ の 他	
甲 武 信 岳	52
飯 豊 連 峰	53
佐      渡	56
佐 渡 旅 行	56
出羽三山・鳥海・佐渡	61
九 州 旅 行	63
南紀州春の旅	67
北海道旅行	68
羅 臼 岳	70
大峰山神童寺谷	70
白馬岳一朝日岳	71
毛 勝 三 山	73
加 越 連 山	74
鉢 伏 山	75
法 恩 寺 山	76
ス キ ー	
平標スキーツアー	76
蓬峠スキー	77
野沢温泉スキー	78
尾瀬スキー	79



苗場	79
鳥海山スキー	81
至仏スキー	83
尾瀬スキーツアー	84
浅間山スキー登山	85
志賀高原スキー	85
住所録	
部員	87
O B	88



## 春 合 宿 (八丈島)

3月7日～13日

高橋(CL), 齊藤, 川野, 河野, 大橋, 大沼, 鳥居, 浅見, 渡辺, 荻野, 根本(食料), 吉野, 北詰, 滝野, 五十嵐

7 日 20:00港——

8 日 ——(7:00)八重根港

13 日 底 土 湾

この合宿は、最初から天気が悪く海がしけ全体的に雨模様が多かった。これは、ちょうど台風なみの熱帯性低気圧が来た影響である。強者ぞろいの部員の内約半数までが船に酔ってしまった。8日の正午近くになって八丈国際観光ホテルのすぐ近くの南原というところにテントを張る。その日は、そこで休憩。9, 10, 11, 12日とそろって天気が悪く沈澱状態。それでも雨の中を底土湾まで、八丈を横断した者もいた。予定では八丈富士登山、島の南東部の半週等があったが、どれもできずに残念である。その代り、島の北西部を一回りし、空港や植物園にも寄って来た。この計画では、食料計画がずさんであり、魚の現地調達がかんばしかなかった。又器具の点検が良くなかった。それでも東京から南へ 290km のこの八丈島、空は青く、海も青く、白く、実にいい所ですな。

## 5 月 連 休 合 宿 (袈裟丸隊)

5 月 2 ～ 5 日

須藤, 堀江, 大橋, 大沼, 宮川, 五十嵐, 草場(医)

2 日 桐生(17:24)——(18:37)沢入——(19:55)小学校□

3 日 □(5:25)——林道終点(6:28)——(7:45)寝釈迦(8:00)——(8:30)昼飯(8:55)——(9:20)賽ノ川原(9:40)——(10:40)小丸——袈裟丸小屋(11:15)——(12:10)前袈裟(12:38)——(13:00)後袈裟——(13:20)鞍部□

4 日 □(5:15)——(5:25)旗主山(5:55)——(6:40)見晴(7:05)——(8:10)法師——(9:00)六林班(19:30)——(9:30)——(10:30)鋸山(11:00)——(12:10)皇海(13:00)——(14:00)国境平□

5 日 □——桐生

2 日 ○

月が真円なる静かな夜だった。小学校の先生に断って、ここをT, Sとする。



3 日 ○

朝、非常に調子よく出発、天気は上々、昨夜見た月も、今朝見る月もととてもすばらしい。少々暑いくらいの天気、路傍にはつつじ、山吹が咲き乱れている。新緑が水々しい処女の胸部を思い出させる。賽の河原からの~~魔~~望はすばらしい。袈裟丸には雪はほとんど見られない。前袈裟の登りは急な上、笹が多いため苦戦。計画より大分速いのもっと足を伸ばすつもりであったが、後袈裟の頂上で雷が鳴り出し、雨も少し降って来た。後袈裟と奥袈裟のコルで少し様子を見ようとしたが、みんな昨夜の睡眠不足で疲れているのでここをT、Sとした。ヤセ~~尾~~根の上で雷が鳴り出したので前へ進むべきか、テントを張る所を捜すべきか、迷った。夏山へ行くことの多い我々は雷に対する処置をもっとよく勉強すべきだと思った。

4 日 ○

3時起床。朝焼けが美しい。坊主岳に教育学部の宇多川さんの置手紙があった。三角点は2つあったが奥袈裟がどこだか良く分らなかった。道は途切れていて時々間違った。天気はすばらしい。しかし木が沢山あってよく見えない。木に登って、まわりを眺めると富士山、苗場、日光白根、男体、燧、平、至仏等がまだ白い体を見せている。道は狭く、キスが時々ひっかかって歩きにくい。法師から六林班までは雪がかなりあり、六林班近くでは笹が多くかなり苦戦。ここで全く道を失う。しかし少し歩くと道印を見つけてホットする。鋸からは国境平が良く見える。又鋸の北面は急で雪がベッタリついている。皇海の登りは長く、かなり疲れる。皇海山頂で50分も休む。北面は雪がかなりある。快調にとばす。1時間で国境平に着く。1班が着いていた。第2班は大分遅れて来た。夜ファイアーを囲み全員が無事着いた事を喜ぶ。

## 5月連休合宿（庚申隊）

5月3、4、5日

吉野（CL）、浅見、荻野、北詰、滝野、鳥居、中島恒、山口オ、鎌田、山田

3 日 桐生~~~~原向——銀山平——□

4 日 □——庚申山~~山~~——~~庚申山~~——オロ山——庚申山——鋸山——皇海山——国境平

5 日 □——ニゴリ沢——間藤~~~~桐生

3 日 ①→●

さすが連休である。登山者の多いのにビックリする。原向から次々にゾロゾロと出発。我らは最後からゆっくり出発。一の鳥居手前で雷雨にやられ苦戦。ようやく小降りになったところで山荘下に着く。

4 日 ○

山荘でのものすごい人数に又ビックリ。ここで水を補給して出発。庚申山でザックを置き、オロ山を目差す。所々に動物の糞がいっぱい落ちている。ヤブこぎの末オロ山頂に着く。ここで標式を打ち付ける。鋸山では五十嵐の置手紙があり、2時間も前に出たことを知る。アセルがピッチは伸びず、皇海の下りでは雪のため苦戦。国境平には二隊のテントらしき物が見える。結局我々がラストであったが、オロ山ピストンで4時間程かかったのだから仕方がない。夜ファイヤーの後、テントでミーティングをする。

## 夏合宿報告書・丸山・朝日隊

7月20日～31日

参加人員	2年	山田	3年CL	高橋	4年	中島
	気象	海老原	SL	斉藤		堀江
	医	鎌田	会計	川野	院2	草場
	器具	下川	写真	河野		
	食料	宮下		根本		

山口(昌) トランシーバー記録 浅見

### コース

桐生——栃木——下今市——会津田島——檜枝岐——小立岩——小沢山——稲子山——坪入山——高幽山——丸山岳——銀山湖——小出——桐生

### コースタイムと感想

20日 ①→②→③→④

桐生(6.30)——(7.15)栃木(7.40)——下今市(8.32—9.11)——(9.35 鬼怒川温泉9.55)——(12.20 会津田島 12.40)——(15.20 小立岩 16.20)——登山口(17.00)□

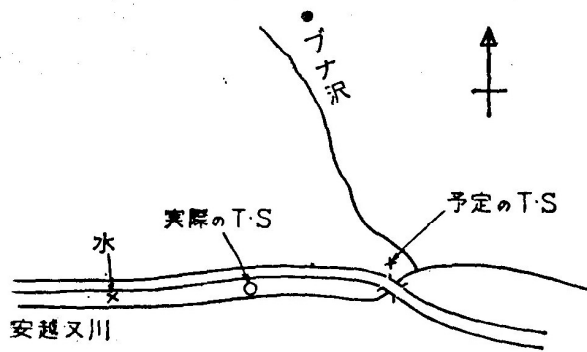
出発の時は天気が良く、この合宿中ずっと好天気にも恵まれると思ったが、会津田島から檜枝岐への途中の山口の少し手前で小雨が降ってきた。山口へ着いてから、雷雨に見舞われた。最初はたいしたことはなかったが、次第に強くどしゃ降りになり、そうこうしているうちに小立岩に着いた。ここでも雨は止まなかったの、雨の衰えるのを待った。3時50分に止んだが、天気図と平ヶ岳隊との交信のため4時15分まで休憩。4時20分にここ小立岩を出発し、登山口に5時に着いたが、そこをそれて約10分したところに着き、平らな所を見つけて草を刈り、T.S.にした。テントを張り食事の用意を始める。6時30分に黙禱をし食べ始め、7時30分にすべて完了。

水場に近いということで予定のT.S.を変えたが、来てみると、登り口のすぐそばの予定地をT.S.にした方が朝も楽であったらと思う。またこの合宿に対して部員が皆トレーニング不足のようであり、バスに5.6時間も乗っていたせいもあり疲れているようである。しかもバスは



満員でむし暑く不快指数も高かった。雷雨ではあったが、止んだ後は涼しく非常に気持ちがいい。

8時就寝、明日3時起床



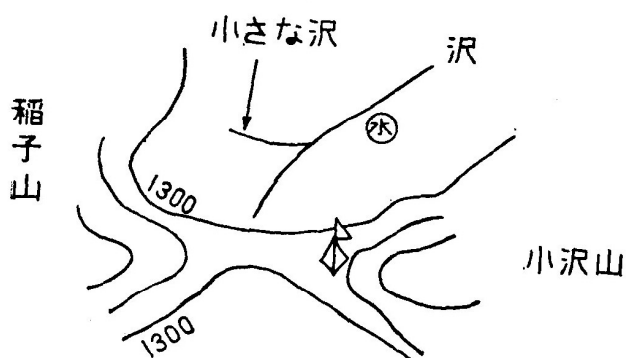
21日 ◎時々●

起床3.30・□ 5.30——(三本10.30)ナ峠 10.40  
——12.40小沢山12.50——稲子山との最低鞍部の  
少し手前□13.45

3時起床の予定が30分遅れて3時30分起床。誰  
でも良いから起きたら必ず全員を起こすものであ  
る。5:00に食事を完了。5:30に出発し、途中35

分、5分くらいの割で1ピッチとして5ピッチ。9:00に1300mh. くらいの所へ着く。交信と天  
気図のため30分まで休憩。1400mh. くらいまでは道らしきものがついていて、3本~~ナ~~峠を過  
ぎて峠と小沢山との中間部あたりで昼飯。11:20~11:50まで休憩。12:40に小沢山に着いたが、  
頂上は広いのに展望がきかずあまり眺められなかった。しかし気持は大変良かった。ここは小休  
止をただけで通過。13:45 稲子山との鞍部に着く、次の水場と、時間、それにこの鞍部の状態  
(やせもせず広くもない。又、やぶと笹ばかりであるがテントを張れるような所がある。)を考慮  
し、ここを T. S に決める。2時からテントを張り、食事の用意を始め水汲みに行く。20分でテ  
ントを張り終える。水汲みに行った人達がなかなか帰らないので心配していたが、2時間かかっ  
てやっと来た。丁度食事の用意も整っていたのですぐにメシにする。4:30に食事を終え、明日の  
朝食の用意をして3人で水汲みに行く。今度は40分くらいで割りと早く帰って来た。

明日は3時起床。今日は山に入って第1日目であるので皆疲れたようで良く寝ている。就寝6  
時。



水場 T. S から下り5分  
上り15分最低鞍部か  
ら〃3.4分 〃10分

◎最初の水汲みの時は沢の上流  
の方へ行ってしまい水を汲む  
時間がふえてしまった。2回  
目に行った組の時は水も豊富  
で早く戻って来た。

○小沢山の頂きは笹や小木もなく大きな木だけでテントを張れる所がある。

22 日 ①

起床 3.00・□——8.20 稲子山肩 8.35——9.15 稲子山頂 9.55——10.25 稲子山肩 10.30——  
5.20

12.25 1447mhのピーク12.35——14.30 1496mhのピーク——17.30 坪入山頂の50m下位 18.00  
——坪入田代19.20(20.30)□

4:30に食事終了。テントをたたみ、後はパッキングと水汲み(4:45～5:10)。5:20に出発し6:45～7:00まで1400mhくらいで休憩。最低鞍部はやせていてT.Sにするような所はない。水場はすぐ近く。この稲子山への登りは急で、しかもやぶこぎなので見ただけでも疲れてしまいそうである。稲子の肩へ着き15分休憩。7:00からここまで3ピッチ。9:00に交信し、頂上へ着くまで待ってもらい、9:15三角点に到着。交信を再開する。平隊は兎岳の出前1時間くらいの所で休憩、苦戦している様子。隊員の状態は全員無事。皆元気でやっているらしい。交信を終わり、ここでメシ、パン。ジュースも水もすぐに飲んでしまい、残りはパンばかりであった。行手の坪入山が良く見える。頂きは狭い。かすんではいるが上空は良く晴れていて展望がきく。暑いので飲む水がそばから汗となり、シャツに水をかけているようなものである。パテないように水を加減して飲むが、水も少なくなってきた。9:55三角点を出発し、やぶの中をもぐって肩へ10:25に着く。10:30に出発し、3ピッチ約1時間20分所に沼地(やぶの中にあり、地が湿っている。開けた所ではない。)がある。1447mhのピークへ12:25に着ききゅうり、パンを食う。少し休みまた出発。歩き始めて50分位して13:10に1447mhの次のピークを少し過ぎた所で木に導標のように赤ペンキがついていたが、2・3 あっただけで間もなく消えてしまった。4ピッチで1447mhのピークから1466mhの肩へ14:30に着く。ここらあたりは割とだらだらと登ったり下ったりしてゆるやかである。ここから坪入山頂まで険しくつらい登りである。16:00に山頂より200m位下のやぶの中で送信したが交信不可能。持ち水も水場も無いので、目的地である坪入山の北の田代まで、どんなことをしてまで行くことにして頑張る。山頂より50m位下の所で17:30になってしまった。ここで1人がパテてしまい、18:00まで休憩、付添いの川野君、救援の斉藤両君を残して残全員T.Sへ向かう。山頂までは大変急なため、北東側ヘトラバースして必死でヤブをこぎ、19:20 やっとの思いでT.Sに着いた。小休止、テントを張り食事の用意をする。残っていた3人もどうにかこちらに向かっている様子なので手分けして木に登ってT.Sの位置を知らせたり、ライトをつけ大声でどなるようにして、又3人も暗い中をよく頑張ってようやく20:30T.Sに無事到着。すぐに砂糖湯を飲ませたりレモンを食わせたりして回復に全力を尽くした。水汲みに行った連中もなかなか戻らず心配であったが、食事もすぐできる状態で待っているうちに、ライトと声を出しながら戻って来た。これで全員そろいすぐ食事。結局20時頃になってしまい、明日の予定の縦走距離も長いし、時間が遅くなってしまったために全員で明日は沈澱と決定、明日の予定行動として、近くのもう一つの田代へ行くことにした。

23:30 就寝

23 日 ●◎→●

今日は沈澱なので起床は遅く 7:30頃。9:00 平隊と交信し、彼らは藤原山の手前2時間くらい

の所すぐにでも平ヶ岳に着けるような勢いである。我隊はメシを炊いたが、水汲みが未だ帰らずおあずけである。少しして戻って来て朝食を食べ、再びテントにもぐり込む。11時に再度交信しようという約束を忘れて非常にすまない。12時も過ぎ14時頃になってようやくパンを食べた。16時には電波が通じなかった。これは彼らが坪入のかげに隠れてしまったためだろうと思う。昼間わずかながらこの田代を探索し、モウセンゴケ、ミズバショウ、ワタスゲ、イワナシ、コイワカガミ、コバイケイソウ、シャクナゲがあった。雨あるいは曇で相変わらず天気がぐずついているため、テントの中がぬれてきた。これにはポンチョを敷いてカバーすることにする。17:45に夕食。これはおかずが少々足りなかったがうまい。今までヤブが凄く、進行が遅れているため、小雨ならば出発の予定であり、起床 2:30 出発 4:30 である。もう一つの田代へは、ヤブもぬれていて行かなかった。明日は晴ればなあと思いながら就寝。

24 日 ●→◎・① 沈澱

2:30 起床。テントを撤収し、朝食を食べようとするが、雨が降ってきて、すぐにキスリング等にビニールやフライをかけ、食事をする。小雨になるや、又強く降って来たりして、雨の中のヤブコギは体が冷え、夏として危険なので、出発をとりやめ、きょうも骨休め。再びテントを張りなおし、しばらくしているうちに雨がやんだ。9:00に送信開始。しかし不可能だった。きょうはお昼までの時間が長く、12:30にパンとラーメンを食べた。14:30頃からもう一つの田代へ行ってみた。ここは、モウセンゴケ、コバイケイソウ、ワタスゲ、イワナシ、コイワカガミ、ミヤマキンポウゲに似た花、ツツジの類が見られた。又、モウセンゴケには花もみられた。稜線へ出てみると、今まで通って来た小沢山、稲子山やこれから行く高幽山、丸山岳、朝日岳さえもはっきりと見え、まるで一日で朝日まで行けるのではないかとさえ思われる程空気が澄み、晴れわたっていた。16時交信不可能。我々は草の上に横になってゆっくりと時間を過ごしたり、テントやシュラフ、フライなどぬれたものをかわかししたりした。16:00 夕食の仕度を始め、1時間半ですべて終了。この2日を総じて、沈澱というものは体を休めるにはいいが、あとで考えるに、時間のたつのが早く、もったいないくらいである。思い出してみても、疲れて草原にやってきて、そこで思い切り休養できることは大変気持ちのいいものである。

明日は2時起床4:30出発の予定、

18:00に床についたが寝たのは19時20時頃だった。

25 日 ○→◎

起床 2.00・□ 4.35 — 坪入山頂 <sup>8.35</sup> (5.55) 1212mh のピーク — 10.35 1538mh との鞍部 10.45 — 13.20 1538mh 13.40 — 15.15 高幽山肩手前 15.55 — 高幽山肩 16.50 — 高幽山 17.45 三角点東下□

2時起床。4時に朝食をすませ、斉藤、高橋両君で水汲みに行き 4:25 に戻る。今朝は雲海と星空が素晴らしく朝日の出るのを待っていたが、出ないうちに 4:35 出発。坪入の山頂へ1ピッチ



6.45

で着く。中腹までは木が生茂っていたが、途中から笹が多くなった。山頂を出発する。最初の小さな鞍部で5分位立って休み。鞍部は非常にやせていて、ある程度ではあるが踏み跡がついていて、ワンピッチ約1時間強の楽なペースである。南面がガレている細長い頂きに田代と池塘がある。ここから少しばかりゆるやかで 8:35 に 1712mh のピークに着く。休憩して天気図作成と交信。平隊は現在平ヶ岳にいて、全員元気。AM 6:00 に中島さんと五十嵐君が鷹の巣へ下りたとのこと。1時間して 9:35 出発。約1時間で道らしき跡をたどって 1538 mh との鞍部、それから1ピッチして 1538 mh のピークの途中ピッチごとに休み、アメ、氷ザトウ、レモンなどで力をつけ体を休めた。13:40 に出発して、60m程下ると踏跡は消えた。高幽の肩の登り 300m の登り始めの所にテントを張ったような所があり2張くらいなら何とか張れそうである。また、標識もあり水場も東北の方にある。15:15~16:30 肩の少し手前で休憩。その間交信気象通報の時間となり、長くなってしまった。平隊はすごいヤブのため、1886.8mh との鞍部にテントを張ることに決定したとのこと。我々は高幽山まで。さて、出発して、まだ草の出たばかりの斜面を20分程して、高幽山三角点の東下へ着く。小さな雪溪のわきをT.Sとする。雪と conc ミルクでかき氷をして食べる。これが大変うまい。また先程の同君がバテてしまった。彼どうかしたのかも知らないが、休養すれば大丈夫なのだから、どうもしていないらしい。2年生数人が水汲みに行ったが、水が無いので帰って来た。沢がかれて水が無かったらしい。ごくろうさんだが水が無いとは残念である。19:35 に夕食。ここの草原にも、前と同じような植物の他に、サクラソウ、ニッコウキスゲ、ツリガネツツジが見られた。今日も予定の草原に行けずに残念。明日は丸山の田代まで行きたいものである。

就寝 20:20 明日は 2:30 起床予定

26 日 ◎→①

起床 2.30・△6.10——8.55 草原 9.50——1617mh 10.15 のピーク 10.35——12.50 1765mh のピーク 13.20——1723mh 14.15 との鞍部——15.05 1723mh ピーク 15.25——15.55 1723mh の次の鞍部 16.25——~~1677mh~~ <sup>1650 1697</sup> の手前の鞍部□

今日は水が無いので雪をとかして朝食を作ったため出発が遅れてしまった。水は、次の草原まで行ってそこで取ることにした。今日は丸山岳までの予定だが行けそうにもないようだ。高幽の三角点で「群大ワンゲル、ファイト」を連呼してから出発。三角点を5分位行った所にかかなり大きな池塘が5つあった。頂上の方は草木が腰くらいで歩きやすいが、下るとすぐに木の丈が高くなりヤブにはいる。高さは2m位だが椎のような木の枝がこみ入っていて、昨日の目的地である草原へ3約時間もかかって8:55に到着。水汲みに行き1回目の昼食にする。9:15交信不可能。今日はヤブがひどい。気象係は天気図を書き、他の人達はパンを食って休んでいる。9:38に水汲みが戻る。水場は西入沢の源、田代から下り10分の所。さて、9:50に出発。20分位して大きな池ともいべき池塘に出くわしたので20分休憩。顔洗ったり手ぬぐいを洗ったりしたのち出発。 12:50



に 1765mh のピークに着く。13:20 に出る。木に登って方向を定めながら進み、1723mh との鞍部に 14:15 に出る。ここで10分小休止して 1723mh ピークに向かう。この鞍部からコース上の山々がすべて良く見える。沢の下にある雪溪も見えた。15:05 に 1723mh のピーク。20分休憩して第3回目のメシ。もう目的地まですぐである。その次のピークで16:15 から交信開始。彼ら平隊はヤブで苦戦のため沈殿の模様。明日、恋岐沢へ下り沢づたいに銀山平まで行くことに変更とのこと。このコースを先輩の草場さんに尋く。前に一度このコースを見たことがあり、大丈夫らしいとの返事。沢へ下りても送信するが、通じなかった場合は沢へ下りたものとみなすと双方で了解。16:25 から 25 分歩いて 1697mh の手前鞍部に幕営することに決定。19:30 から、朝日岳まで行くかについて 3, 4, 院 2 年生 9 人で相談。

1. アタック隊を出す
2. 全員行ける所まで行く
3. 全員あきらめる

の3案が出たが、合宿という団体生活ということから第2案になった。2年生には良く話して了解。理科大の資料からしても、朝日への往復に 3, 4 日かかってしまうので、日程のゆとりがない。

明日は4時起床予定。各テントに解散して就寝。

27日 ◎ガス・時々①

4時に起きたが雨と雷のため5時まで待期。

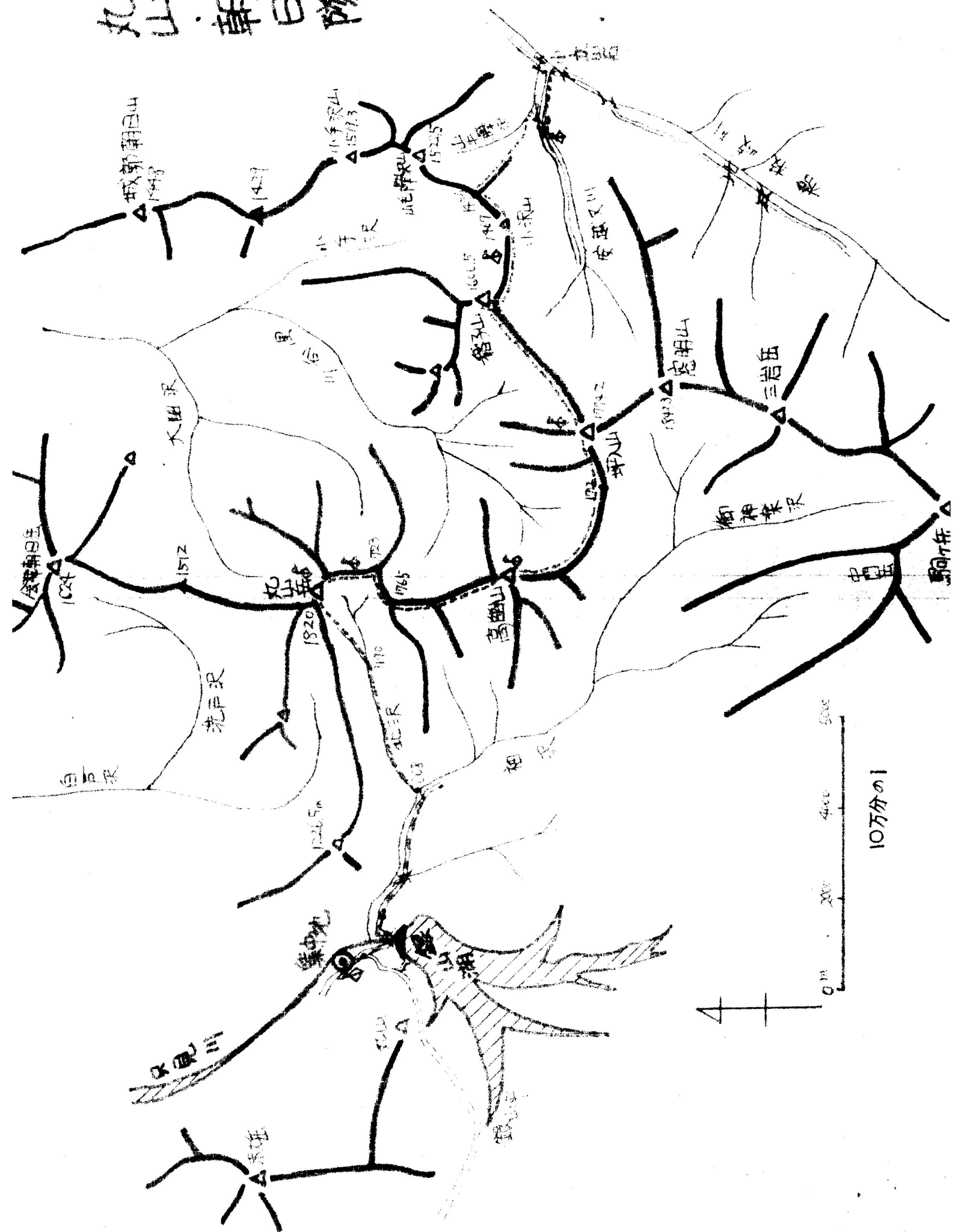
起床 5.00・□8.25——9.00 1697mh 9.30——丸山岳 10.45 との鞍部——12.25 丸山岳山頂手前草原 □

朝、雨とガスがたちこめて、視界があまりきかない。昼食はコッヘル4つで炊き、朝はナベのを食べる。天気が良くないため、テントはまだたたまない。8:25にガスの中を出発。1697mh のピークで9:00通信開始。彼らはこれから恋岐沢へ下りるとのこと。早ければ29日、遅くて30日に銀山平へ、沢下りに注意してくれと送信して終わりにする。このピークを下りて来る時、進路を西よりにとってしまい。方向を全く逆になってしまった。そこでもとに戻り木に登ってガスの晴れ間にかいま見て方向を定めた。10:25 に歩き始め 10:45 鞍部通過。11:00から10分休憩して進行。11:15~12:15丸山のすぐ下20分くらいのヤブの中で昼食とする。丸山のすぐ手前のピークに12:55 着。北側の沢に雪溪が有り、そこから水が豊富に流れ出ている。ここで、体を横たえたり、洗ったり、雪溪から雪を取って来て、先輩のさし入れのゆであずきとまぜて、氷あずきにして食べ、また氷ジュースなども作って飲み、ゆっくりと時を過ごす。

16:15 テントを張り、夕食の準備をする。16:00 には交信不可能。多分沢へ下ったのだろう。明日の予定は、銀山平へ行ける所まで。起床は2時

28日 ガスと◎ 沈殿

10万分の1





2時起床。ガスのため沈殿と決定。メシはすぐに作ったが7時に食べることにして再びテントへもぐり込む。昼近くまで各自黙想やらトランプやらですごす。12時頃水汲みに行く。皆寝てばかりいるので昼はラーメン一個。交信は不可能。夕食をすませ、17:30に T. S より10分程の丸山岳三角点で「群大ワングル・ファイト」と連呼し氣勢を上げる。18:00に戻り、空を見上げれば、雲がものすごいスピードで流れているばかり。まれに晴れ間が見えると、おどりあがらんばかりである。

19:00 就寝

29日 ガス

起床2:30・△5:00——沢出合 8:10——北沢中間点10:45——11:25 滝 13:10——14:20 林道——  
※14:30——銀山平定着地 15:20

小さな沢の出会が2つあり、1つは6:35に他は7:00に通過した。40.50分歩いて休憩のピッチである。9:15～9:55の間昼食。天気図作成、送信をしたが受信不可能。途中数段の大滝があり、これを巻くのに登り1時間5分、下り35分もの大巻きであった。ここは非常に急であり、すこし足をすべらせようものなら下へ数10mも落ちてしまうのではないと思われる。13:25にも滝があったが、この辺は人がはいっているとみえて、巻き道がケルンで示されていた。途中で雨が強く降ってきて、上下からの水の攻撃にあう。沢が増水しないうちに材道へ出ようと早く進んだ。林道へ出た時は思わずホッとためいきをつく。入山以来「道」というものには全く疎遠であった。チーズが非常にうまかった。林道からは、普段歩く時と同じくらいのハイペースで、5km程の道のりを50分で歩いてしまった。定着地には平隊、定着隊がすでに来ており、出迎えられる。今日1日は全身水にぬれたが、気持ち良かった。

明日は休養日でゆっくり寝られる。

30日 ①

6時起床。8時半に吉野、高橋両リーダーが「未丈岳偵察。12時に、斉藤、堀江、中島、草場さんらが丸山へ偵察に行く。我々はテント地にいたり、ダムの方へ行ったりした。12:30 未丈偵察隊が戻り、行けることを確認。夕食を作り待っていると丸山偵察隊が帰る。しかし、急きょ天気予報の天気不順荒模様の知らせで明日の登山を中止することになり、夜、参加隊員全員の無事を祝してコンパ(19:00～21:20)色々楽しく、花火も輝き、目の色も輝くうちに終了。

明日は乗船組とバス組の2班に分散して桐生解散。特に続けて山へ行く者は例外として扱った。

31日

6:00 起床

9:00 T. S 出発

10:00 定期船出発

10:45 銀山平着

10:50 銀山平出発バス

12:55 小出着

17:00 桐生着

1 日

装備点検, 反省会のため 12:00 部室集合。

地図 (檜枝岐, 小林)

## 荒 沢 平 ケ 岳 隊

7月20日～7月30日

隊員 山口(修), 長谷, 太田, 滝野, 鳥居, 大橋, 宮川, 北詰, 吉野

五十嵐, 中島(恒)

コースタイム. 天気

7月20日 ☉→①→●→①

桐生~~~~小出(11:00)——三溪荘前□

7月21日 ☉

□(5:05)——1262 ピーク(7:15)——(12:42)荒沢岳(13:15)——灰の又登り(15:30)□

7月22日 ①

□(5:40)——(6:35)灰の又山(6:47)——(10:43)兎岳(11:00)——(11:40)大水上(11:50)——  
□(12:00)

7月23日 ●→●→●

□(5:40)——大水上(5:50)——(8:15)1709ピーク(8:30)——(11:35)藤原(12:08)——(15:55)

7月24日 ☉

□(7:50)——(9:15)劔ヶ倉(9:30)——(11:30)平ヶ岳——□(11:40)

7月25日 ○——①——☉

□(6:30)——(6:55)姫の池(7:20)——(7:30)雪溪(9:15)——(11:15)1886.8ピーク(11:35)——  
(16:20)1600m鞍部(16:25)——□(16:40)

7月26日 ☉——●——☉

起床(3:30)天候悪く9:00まで待期 沈殿と決定

7月27日 ●——☉——●

□(9:20)——(11:00)本流(11:10)——(16:30)大倉山からの沢との出合点□

7月28日 ①——☉——①

□(6:30)——(12:00)道らしきもの——小屋(16:20)——橋□(17:40)



7月27日 ①——●

□(8:10)——集中地(13:40)□

7月30日 ①——◎

7月20日

小出からの銀山平行きのバスは本数が少いので大きな団体の場合は連絡をしておけば臨時増発してくれる。小出をでたバスが曲りくねった道を登りつめた所が枝折峠で越後駒の登山口になっている。枝折峠から降りきった所が銀山平だ。銀山平の釣人の宿である三溪荘前で下車して T. Sとする。明日からの行動はこの三溪荘の裏手の荒沢岳の登りから始まる。

7月21日

荒沢岳の登りはきびしい特に1263のピークからの荒沢岳の鎖場は重い荷物を背負っているので相当な体力を要しその上頂上がどこやらわからず全員バテぎみだった。23分7分ペースで進み景色はガスでよくは見えなかったが霧の間を通して時々下の方に雪渓が見えた。結局晴れたよりもガスの方が体力的にはたすかったようだ。T. Sは灰の又の登山口の雪渓跡にすることにした。水場は西側へ3分程下った所である。

7月22日

灰の又下部は道が以前はつけられていたようだがところどころ消えかかっている。頂上直下の登りはヤブも消えて快適であった。ここにも道から少し外れた所に池塘のある T. S 適地がある。灰の又から兎へは背程のクマ笹で道が消えかかっているが稜線上を忠実に辿れば大丈夫だ。途中灰の又を下った所に雪渓があり T. S 適地、兎岳頂上直下にも雪渓があり大水上の雪渓跡に T. S をとり水は隣の沢の雪渓より得る。平ヶ岳が目の前に横たわり明日中にも行けそうだった。

7月23日

藤原手前1707ピークまではヤブも薄く道も手でヤブをかきわけずに歩ける程良くついてしたがそれをすぎると稜線が太くなったので踏跡はいくつにも分かれておりどれを行っても同じようだが稜線の東端に行くのが一番楽そうだった。藤原の頂上では雷の危険があるため頂上を T. S とすることを断念して先へ進む藤原からは瘦尾根で雨と雷に行先をはばまれ全身ずぶぬれになってしまった。雷が強く鳴り始めたので30分程谷へ避難した。雷がおちついたのでとにかく T. S となる場所まで行くことにする。雨に打たれて寒いのでなるべく休まずただ、黙々とヤブを進む劔ヶ倉手前1:30程の所でヤブの中の大きな木の下にテントが二張やっとな張れる空地を見つけてそこに T. S とする。水は大水上から1人4ℓずつ持って来たので1日1ℓ翌日1ℓ残りを2ℓ炊事に使う。朝はミルクとパンで時間と水を節約する。

7月24日

一晚中雨が降り続いたので行動が起こせるかどうか心配であったが出発の準備だけをして様子を見ることにした。



8時頃になって雨が止んで明かるくなって来たので出発と決定する。

実際そこに沈殿していても飲料水が得られそうもなかった。冷たい着物を無理に着て五十嵐君に先頭をかわってもらって劔ヶ倉をめざして出発する。ヤブはかなりひどい。ここでも尾根の左側を歩くようにすればよい。劔ヶ倉まではすぐに着いたが劔ヶ倉から平ヶ岳までは楽だと思っていたのに意外とヤブがひどかった。

雷が遠くで鳴っているので平ヶ岳頂上直下少し下った所を T. S とする。尾瀬方面はガスがかかっていたが谷川方面は良く見えた。そのうち全体がガスにまかれ夜になってからガスが晴れ至仏、燧岳、越後三山が夕闇にボーウとかすんでいた。合宿もこれからが大変だと思いと喜こんでばかりおれなかった。

7月25日

6:00に五十嵐君と中島さんを送り出し尾根を目ざして平ヶ岳を下った。尾根の取り付きは雪溪と池塘のあるすばらしい所である。しかしヤブに突込むとものすごかった。石楠花の根や倒木に足をとられてやたらとひっくり返る。1886.8のピークをきわめた時は本当にうれしかった。その三角点は苔むして青くなっていた。その三角点から東側へ下ればよかったのだが西へかたよった方向に行ってしまうと気がついた時は荒沢岳が目の前に見える程西側へ寄ってしまった。

2時間程根曲り竹の密生林をトラバースして本来の尾根に出る。その尾根のヤブもすごかった。ほとんど前に進んでいないと思う程進み方は遅くなり進めば方向がわからなくなる。ガスが出てきたらどうしようもなくなるのではないか。全員疲れてしまってやっと T. S を見つける。

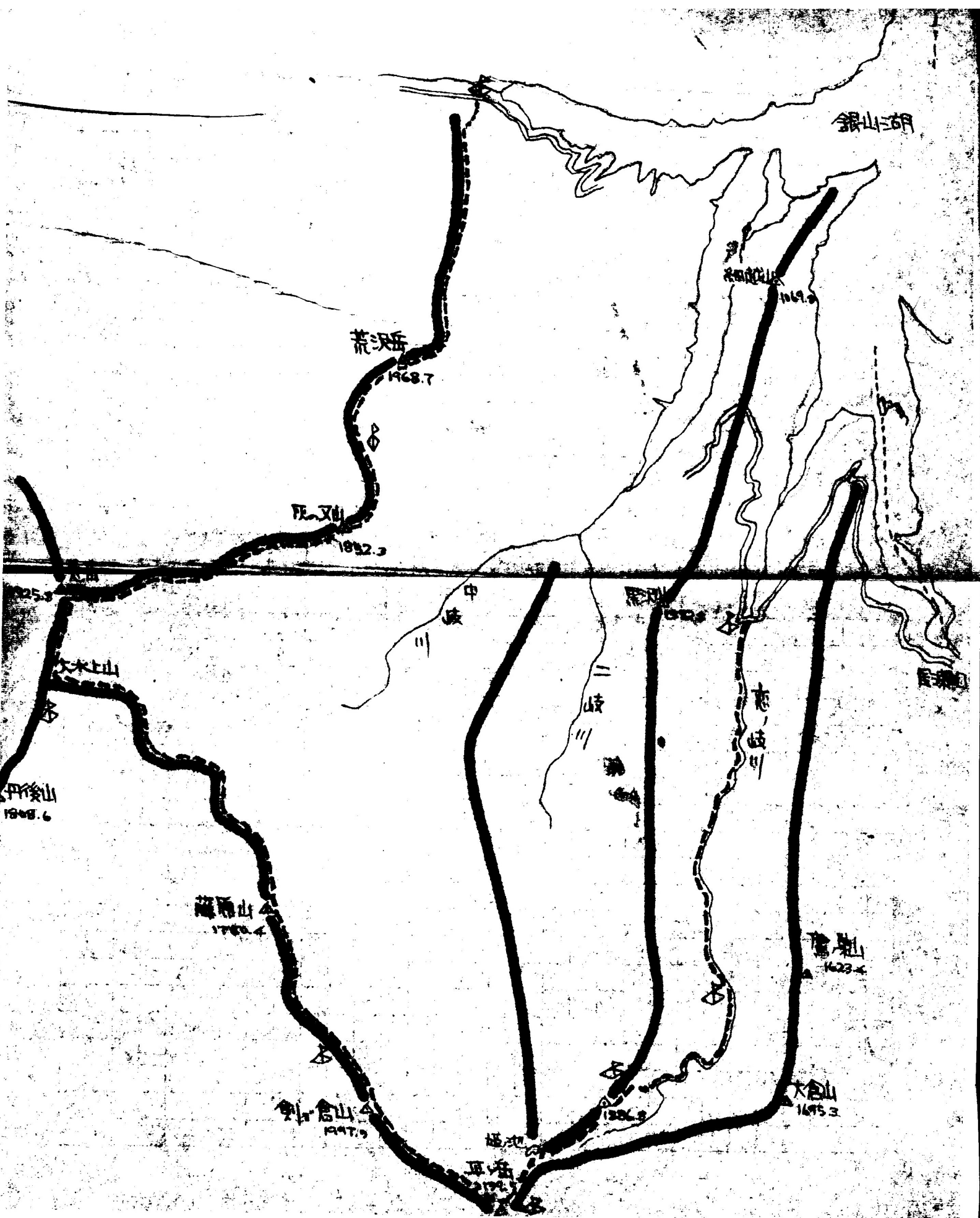
7月26日

空が暗くいまにも泣き出しそうなのと、ガスで方向を見失う恐れがあるので様子を見ることにした。そのうち雨が降り出し沈殿とする昼頃から曇りとなる。明日からの行動について相談しこのままこの尾根を下れば水場と T. S がどこにあるのかわからずヤブもひどく恋の岐沢へ降りられればそれが一番いいという結論に達した。

7月27日

9時に朝日隊と交信がつきガスで方向がわからないため多少の危険は感じながら恋の岐沢を下ることとした。ヤブを少しこいで小さな沢へ入る。ヤブの下を背を丸めてやっと歩ける程の小さな沢である。降りてゆくにつれていくつかの沢が加わり滝も現われ1時間半位降りてゆくとパットヤブが開けちょっと大きな沢に出た。それが恋の岐沢であった。はじめは問題なさそうに思えたその沢が下るに従って滝がいくつも表れてその度ヤブを巻くか、岩壁を伝って降りた。岩魚が足の間を黒い線を引くように通りぬける。4時頃になって雨に打れながらガレの上に T S を見つける。豪雨があると沢まで流されそうであるが大雨の降らないことと明日こそは人里に出ることを祈ってテントにもぐる。

7月28日





朝なので沢へ入るのがちょっと冷たかったが地図で見ると比較的沢の等高線がゆるやかなので滝は少いと予想していたのであるが、現実には大きな滝がぞくぞく現れその度ごとに高巻きしたり岩壁を伝ったりしなければならず思うように進めなかった。12:00 に道らしきものに出合ったがすぐに消えてしまってまた沢に入った。地図にある道は今は消えてなくなっている。その道とは別に小屋からの道を高巻していたら偶然にも見つけ、その道をかけるようにして下り一時間程で林道が恋の岐沢にかかっている橋に着いた。知らない沢は登るのは良いとしても決して下ってはいけないと言われているがほかに逃げ道がなかった為しかなかった。2日間かけて半身水びたしになりながら下ったのであるが最高15m位の滝でどうにか下れたのは幸いであった。

7月29日

8時 T. S を出発尾瀬口発 11:50 に乗る予定であったがうまくトラックに便乗尾瀬口発奥只見発電所行きの始発に間に合う。11:50 ダムに着き集中の食料を持って定着地へ着く。テントを張ってしばらくすると定着隊が着き、しばらくたって「群大ワンゲルファイト」の声と~~歌~~に朝日丸山隊が到着した。全員そろった。疲れてはいるが全員そろった。

7月30日

沈殿して未丈の登山口を調べにゆく意外と良い道がある登山口まで集中地から1:30位だ。偵察が終ってからはのんびりと過ごす。

強力な前線が近づくというニュースで未丈登山をあきらめささやかなコンパを開き無事合宿が終った事を喜び合った。

## 夏合宿の天気

7月19日～8月1日

7月19日 ①

気圧配置は土用入りにふさわしく盛夏型である。しかし日本海の前線が下るため山は変りやすいだろう。昼、晴れていたが夕方くもってくる。明日の合宿が気がかりである。

7月20日 ①→●

早くも山の天気は不安定となる。前線のため上部に冷い気団があり、雲が出やすくなる。夕方雷雨となった。合宿地は本日まで3、4日雷雨がなかったとのこと。

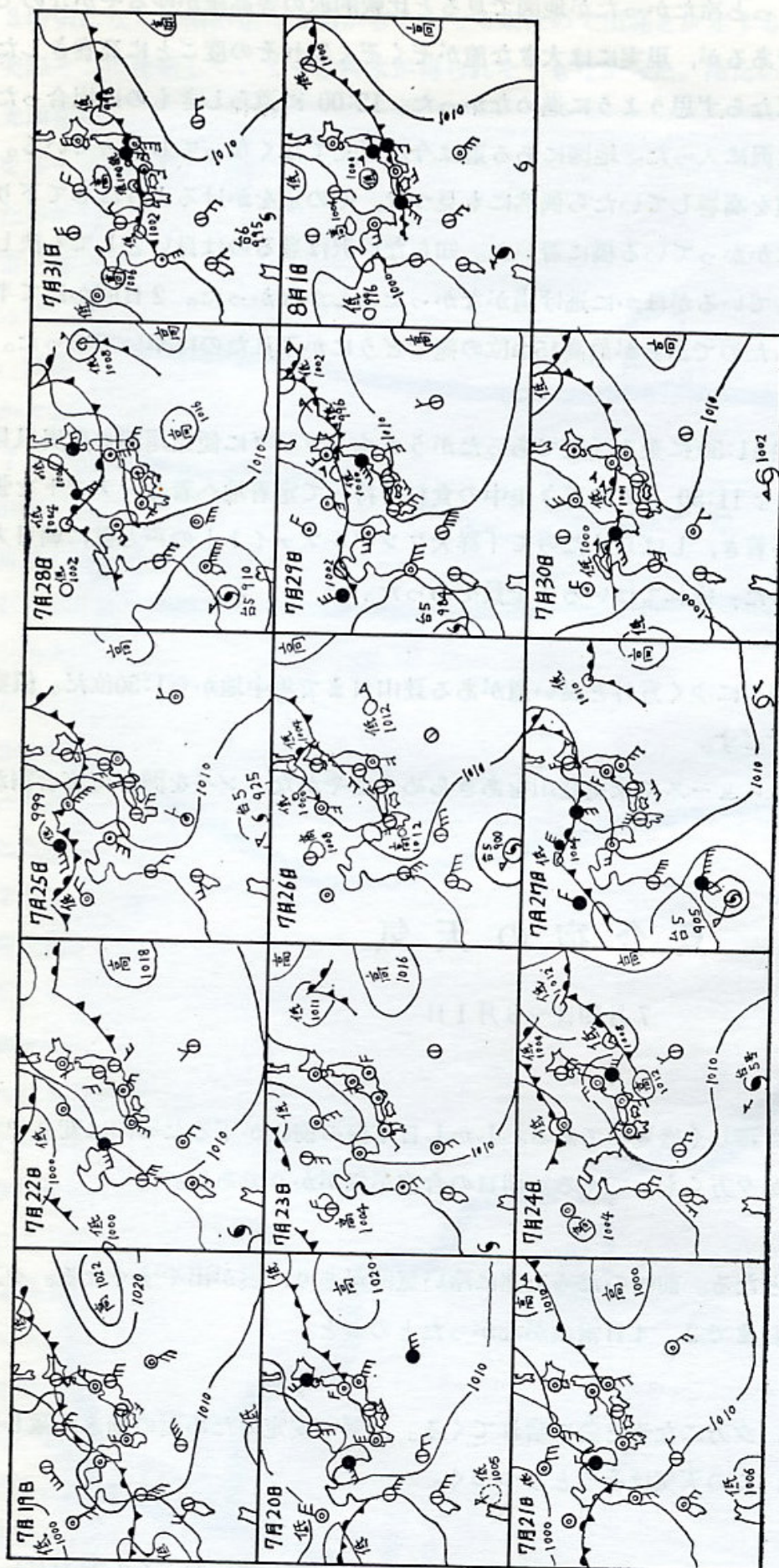
7月21日 ②→○

朝、天気悪くガスがわき、夕方になると急に晴れてくる。上層不安定のため雲の動きが激しい。明日も今日ぐらいの天気、この天気はそうとうつづく。

7月22日 ○

昨日の雲りは上層の気圧の谷によるものと思う。今日は天気が安定していた。しかし雲がわき、





# 夏合宿における天気図

記号 ① ② ● ③

晴 曇 雨 熱低

台5 900 台風5号 900 mb



天気図は高気圧が弱まることを示していた。下界は30度をこす暑さ。

7月23日    ◎——●

高気圧は弱く、山に晴れをもたらさない。上空の寒気がひどいらしく雷雨に見まわれ、一時ヒナンするしまつであった。天気図からはわからないが、これは内陸（パーターの真上）に地形性の低気圧ができたためと思われ、夜も降るみこみ、しかし天気はもちなおす見込み。

7月24日    ◎→①

天気図を見ると小さな低気圧が本州付近にある。これが昨日の雨をもたらしたわけである。ここ一兩日天気は不安定だろう。しかし夕方晴れてきて、人工衛星まで見えるほどになった。

7月25日    ○→◎

午前中きれいに晴れたが、上層の寒気のため午後はきれいに雲る。ややガスが多い。天気図には合宿中初めて台風が顔を出した。

7月26日    ●時々◎

ガス多く天気になる見込みがない。高気圧は弱く前線の動き方一つで大雨にもなるだろう。

7月27日    ●時々◎

高気圧が弱いため前線が北日本に停滞し、なかなか天気はよくなるだろう。ガス多し。

7月28日    ◎

やはり山の天気は悪く雲の動きは速い。台風はもはや心配がなくなった。ただ前線の雨が心配である。

7月29日    ◎→●

以前として前線が停滞している。天気は不安定で時々パラつくが、夕方ものすごい雨となる。とうぶん天気は悪い見込み。

7月30日    ①時々●

雲の動きが速く、暗雲が流れる。日中晴たが夕方はいくもる。前線は南下し、その上を小さな低気圧がづぎづぎと通り、大雨が東北にあった。これは南から湿った空気が入っているためである。

7月30日    ●→◎

朝から大雨となる。バスの窓からものすごさがつたわってくる。天気図で我々の真上に前線があるのがわかる。高気圧が合宿初めよりかなり弱まったことがわかる。ここ当分雨が降り易いだろう。

## 夏合宿の反省と感想

(S 44) 草 場 彰

GWV恒例の夏合宿が一ケの事故もなく、無事終了した事をまず喜ぶたいと思う。

2年生が、7月になって初めて工学部に来られたという不測の事態があったにもかかわらず、7月中に夏合宿が実施できたのは3年生諸君の努力に外ならないと思う。細い事柄の反省は種々あるだろうが、ここでは全体的な反省を記したい。4年生について言うと、全体として3年生に任せすぎていたのではないか。これは日常のクラブ活動に於いても、言える事である。色々と用事もあろうが各パーティに1～2名の4年生がいて欲しい。特に平ヶ岳隊の場合、途中でなんとか都合をつけてバトンタッチして最後まで4年生が、参加できなかったのだろうか。約10名もいる4年生が1人位なんとかなったのではないかと思う。そしてヤブこぎの時はトップに告げてくれると良い。トップはヤブこぎに専心できるから。又定着地へ来てくれた4年生はひとつも山へ登れず残念であったろうが、団体、GWVとしてのまとまりをなす上で非常に良い手本を見せてくれたと思う。何事にも縁の下力持が必要である。当然の事とはいえ、心より感謝したい。4年生は以上の事を考慮に入れても40点。せめて準備の時位全員顔を見せて欲しい。後輩が合宿として10日以上も山へ入るのに全く心配しないでいられるのか。『気をつけて行って来い』とぐらい言っても良いと思う。これは決して差入れをねだっているわけではない。次に3年生。今合宿を実施したのは3年生であると言ってもよい程3年生は良くやった。しかしその団結は多少ものたりなく思う。立案準備の、段階から全員の協力が必要である。これは1部の3年生を除き、2年生のころからの個人山行の不足から来る自信喪失、興味、好奇心の欠如に起因すると思われる。この点では今年は60点位しかつけられない。しかし山に入ってからリーダー以下3年生の活動は、朝日・丸山隊を見た限り90点をこえると思う。だがWVとしての活動は山中にのみあるのではなく日常生活の中にも大いにある事を忘れず普段の活動をしっかりやってもらいたい。2年生について言えば、工学部WVへ来てから日が浅く、その雰囲気や良さを良く知らずまだ山にも充分慣れていないという事を考えれば90点はつけられると思う。3年生の指導で各係は良くガンバってくれた。しかしこれから100点を目ざすには次の事に気を付けねばなるまい。つまり山での生活は物質的には不自由な生活であるから自分1人良ければ良いという考えを捨てて、乏しい物を全員で分け合うという余裕を持つこと。トランシーバーの交信中又天気図の製作中に食事という事が何度かあったが交信者及天気図係の食料が他の人と同じになる様気をつかった人が何人いたか良く反省してほしい。共に重い荷が肩にくだり、汗が目にしみこみつつもヤブをこぎ、雨の冷たさに唇をかんだ仲間の事すら考えられぬ様では困る。最後に自分の反省を少し。トレーニング不足の老体にむち打って参加しましたが、4年生にとっては目の上のタンコブであり、3年生にとってはうるさい老ボレであり、2年生にとってはセワのやける荷物であったろうと思います。各学年の人達に守られてどうやら無事合宿が終えられた事を感謝します。どうも先に書いた各学年への苦言がそのまま自分にもあてはまりそうで心苦しい次第であります。さらにもう一つ忘れてならないのは先輩からの差入れです。顔もろくに知らない現役に多額の差入れをしてくれるという事は団体GWVとしての発展を期待している人達が少なからずいるという事の証明であろうと考



えます。各部員がこれらの事を考えて充分なる自覚を持ち、自分のためのそして全員のための団体GWVを作る様努力していく上で今年の夏合宿をどう生かすか、それによって成功か失敗かが決まると思います。GWVの取組む山域が数年計画の所であればその計画が立った時からずっと合宿です。今年の合宿が終った時から来年の合宿が始まっています。今すぐ昭和45年の夏合宿について案を練って行く事が大切であろうと思います。それによっていやそうする事が今年の夏合宿を成功させる第一歩であろうと思います。

## 夏合宿感想・平ヶ岳隊

中 島 恒 弥

学生時代最後の夏合宿というものを終えてみて、かなり多くの事を感じた。ワングル部は、ハイキング部でもないし山岳部でもない！なぜ、よりもよって重い荷物をかつぎ、交通の不便な、道なき道を通り山なんかへはいるのだろうか……それとも征服するためか、そこに人の踏跡を残すためか、未知のものを解明するためか、ただ単なる冒険か、いや、自分を鍛えるためであり、また、山（自然）が好きだからである。

尾根を歩いていた時、急に雷とともに雨が降り出した。キスリングをほっぽり出し、雨具だけを持って下へ避難した。雨の場合、身をできるだけ濡らさないという事と（これは後で風に吹かれるとかなり寒くなる）、雷の被害を少なくするため、尾根からはずれて、できるならばみんなばらばらとなり、横に一行にならぶと良いのではないか（雷は直線的に縦に地面を走るようである。）

集団の中には必ず、差はどうであろうと、体力的に or 精神的に弱い者がいる。リーダーは、今回はこの者だと思ったら、その人に必ず注目すべし。その者にあわせて行動すれば、他の者は案外黙ってついてくるものである。また、疲れた時、本人にはあまり知らせない方がよい。さりげなく休息をとり、あまりその者に心理的負担をかけるな。歩く時、俺はいつも自分が一番重い荷物をかついでいるんだと自分に言いきかせている。他人より多く持っているという誇りもあるし、また誰と荷物を交換しても軽くなるという安心感があり、いつまでも元気でいられる。しかし、人によっては、俺だけがなんでこんな重い荷物を持たなければならないのか、と考える者もいる。食事的にはいくら水を飲んでも良いが、今日は疲れそうと思ったら、歩行中はできるだけ水をひかえた方が後で楽になる。

食事はゆっくりといっぱい食わすべし。山にはいっていると、品物が無いからかえってガツガツ食うものである。食事の時、あまりメシが無いとなると、人より早く食って自分だけ満腹しようという気が起こるものである。しかし一日に消化（特に吸収が肝腎である）できる量というのは決まっており、それ以上食ったところで、胃の負担となるだけである。腹八分目！

山にはいって合宿とかでトレーニングはすべきでない。トレーニングは安全な所で自分の限界をためせ。合宿ではより安全に着実に余裕をもって進むべし。普段のトレーニングが自分を守る。

何日も山中をさまよい、なんとなく足もとに咲いていた一輪の花を見つけた時、非常に心強く感じる。特にそれがかれんな花なら一層である。一粒の種が遠くから風に運ばれ、風雪に耐え、何年もかかって根を張り茎をもたげ、やっと一輪の花を咲かす。こんなすばらしい生命力が他にあらうか……。

## 教育夏合宿便乗 (清水峠～巻機山)

8月7日～11日 高橋、渡辺

(コースタイム) 8月7日 ◎→●→①

桐生~~~~~~~~水上~~——~~土合~~——~~清水峠 (22, 30)

8月8日 ◎

清水峠 (7:45)——(10:30) J. P (11:00)——(12:45)大鳥帽子岳——檜倉山直前田代△

8月9日 ●

沈殿

8月10日 ●

△(10:05)——(10:50)檜倉山——(13:45)柄沢山(14:15)——(15:30) 米子頭山——(18:25) 巻機小屋△

(記事) 8月7日

南アルプスに出かけた T君は台風7号でバス道やらが寸断されて入山出来ず東海道線金谷駅で一夜を明かし7日の昼過ぎ故郷に舞いもどり桐生駅に途中下車で降り立った所で教育学部の合宿に出るW君に出会う。そこでT君は桐生駅でUターン、足利の生家にも帰らず再び山へ行く。

水上には何時頃着いたろうかわからぬが、そこからバスで土合に出向き清水峠へとめざす。W君はテントを持っているくせに本隊におくれたとの事で理由は朝寝ぼけである。マチガーの倉沢出合を過ぎる頃より空は黒くなり雷雨となった。東電見張所に逃げ込み雨あがりを待つ間、お茶やミソ汁をごちそうになる。雨が小ぶりになったのは日が落ちてからであたりは真暗でヘッドランプを付けて進む。TとWは何度もビパークを言い合ったが何となく登ってしまう。蓬峠と清水峠との分岐の所の小屋で出向えの永井やらが待機してくれていた。飛びはねるようにして清水峠へ向う。清水峠着10:30頃なり。

8月8日

夜中から明け方にかけて風雨はものすごかった。本日は沈殿かと思いきや雨がおさまった頃を見はからい出発する濃霧で何も見えない。F先生盛んに奮闘するものの盛んにバテテおられた。



J.P に達すると、そこに一旦ザックを下ろして朝日岳三角点まで有志数名ピストン。風と雨と濃霧とで余計と体力を消耗するのであろう、パッキングもまだ下手な新人は苦戦なり。

8月9日

風雨とも激しく、あえなく沈殿である。雨が降るの降らぬのって、いやはやグランドシートの上なり下なり小川の如くに水が流れる始末。天気ほんのしばしの小康の折、シュラフの片方をW君に持ってもらいシボル水の出ること出ること。何もかも全員ビショぬれ。

8月10日

そう沈殿ばかりしてはおれぬそうで、本日も又風雨について出発する。本日こそは巻機を越える意気込みで行くそうな、ピッチが上がる。柄沢山をすぎる頃より雨も止み多少おだやかになって来た。米子頭山ではチラリチラリと清水部落方面が見えて来た。巻機山を過ぎて小沢方面までと意気込んでいたもののきょうは巻機小屋泊りで、テッペンから一気に小屋まで飛びおりる。この小屋は全くコキタネー。

8月11日

早起きて又又雨降りである。予備日はすでに使いはたし、集中地平ヶ岳まではまずまず不可能となった沈殿日となった。トランシーバーが故障でなければどんなにか助かったか。T君とW君は工学部からの居候であるため、ここより六日町に下山して集中不可能の旨を連絡するため(8:00)頃雨の中をかけおりる。清水の民宿で電話を借りて用件をすませて雨の上がったバスの不通になってしまった道をシッポシッポと沢口まで急いだ。

## 鳴 神 山

11月9日 ◎ 宮川、他1名

下宿(6:10)——(9:05)鳴神山(9:40)——下宿(11:50)

紅葉を写そうと出かけたが、天気はよくなくてダメだった。当下宿は岡公園の裏手のうえき旅館のすぐ近くにある。同じ下宿の4年生と朝早く行って、午前中に帰ることに話がまとまり出発する。わざわざ水道山の所にある入口に行き、落葉を踏みながら上り下りをくりかえす。先週の山行の時、両カカトが直径1cmぐらい皮がむけたのが治らず苦戦する。山はまわりで猟銃の音がする静かな所である。道は一本道であるが落葉に埋れてわかりづらい所がある。足を引きずりながら急げば鳴神へ3時間である。山頂下には雨やどりのできる家がある。普通にあるいて3時間半~4時間か。山頂附近は汚れているが、足下の方に吾妻山が見える。下りは山頂手前の分岐を右手に行けば10分程で水場があり、さらに10分程で滝に出合う。キャンプ場からはほこりだらけの道を群大めがけてテクル。市内から3時間そこそこに、こんなすばらしい山があるとはすばらしい。なお、往復とも歩くなら、山上を往復したほうが、時間的に、気分的に、肉体的に楽である。



# 鳴 神 山

S. 14. 710~17 海老原 孝 司

16日 桐生天神町——梅田郵便局前——木品□

17日 □——鳴神山——金沢峠——天神橋——宮本町

事情により5月6月と山へ行けなかったので、数日後にひかえた夏合宿にかなりの不安を覚え、急ぎょ感覚を取りもどすために鳴神山への足ならしに出発。確か学校前のバスに乗ったのが、夜の8時を大分まわった頃でそれに平日でもあったせいか勤め帰りの女性客でバスはいっぱい。梅田2丁目の郵便局前でおいて、川沿いの道を鳴神山登山口なるものをめざして夜道をさびしく歩く。正確に言えば、真黒な中をヘッドランプひとつをたよりに、ひとりで歩くのはかなりおっかなかった。最初のうちは、所々に人家もありその灯で何とか良かったのだが、そのうちに、まったくの山林地帯となり、闇また闇。その上さらに驚いたのは、時々道端を飛ぶホタル。これは急に木の中から、闇めがけて飛びあがりふらふらとあたりをさまよっているようで、実にビトダメかと何度ビクついたことやら。ホタルも人家近くの川原で、夕暮れ時に見るものは、風情があるものと言うのだろうが。まったくの真黒の中をさまよう様子は何ともはや、デリカシーの無きことこの上なし。小心の私にしてみれば、地獄で鬼の思い。さてそんな訳で、今にもこのまま家に帰ろうという心を何とか押さえに押さえ。木品という所までやってきた。鳴神山登山口なる標識がある。時間はすでに10時をまわっていたであろう。ここいらで、さらに悪いことにはヘッドランプの明りが、勝手に点滅などを始めた。頼りにしていた右腕を取られたようなものでこうなればこの先いつ消るかも知れないと、使い古した電池とも相談をしなくてはならぬ。そうとなれば話しは簡単。ボッカ訓練と称して持参したテントやらコッフエルなどが役に立つ。さっそく近くの人家の裏庭らしきような場所に陣をとり、食料として持ってきたおジャガを2・3個ゆでてほおぼる。食べた後、グラウンドシートを敷き、シュラフにもぐって、テントを引っかぶる。見あげた夜空に星がきれいであったが、いつこの家の者に見つかってどなられるかと、寝てからも見はりを怠れなかった。しかし、まあ最初は夜中ぶっ通しで鳴神山から吾妻山まで歩き続け、明日の1・2の授業に出ようなどと考えていたのだけれど、やっぱりそんなことはこの僕にはできないなあ。ああいうのはきっと、そこいらのヤボな男どもがやるんだろうとつくづく感じた。

腕時計がないので、目覚し時計を持ってきたのだけれど、5時に合わせておいたベルが鳴る前に、目をさますことができた。それで何とか、この家の住人が外へ出る前にその場をひき払うことができた。やっぱり、ひとりで歩くにしても真暗な所より、いくらでも明るい方がずっと気分が楽である。昨夜の意気消沈も元気に回復、朝飯も食わずに、と言っても、おジャガ以外何も持って来なかったもので、揚々と歩く。滝の所であまりに腹の虫の騒々しいのに気づき、残りのおジ



ャガを再びゆでる。だけどこればかりは、二つ以上口にはいらなかった。鳴神山の素晴しき展望に改めて、桐生の山の良さを感じた。だけどその後は腹の減ったことを感じるのみ。歩いていても、へなへなとその場に、しゃがみ込みかねない。それでも何とか、地図の 638m 金沢峠とかいう所までたどり着いたものの、それからの急登の途中ではからずもダウン。もう動けません。貴族育ちの弱さを痛感しながら、東への下り道をとる。50分なりを経過した後、観音様に到着。すぐさまパンと牛乳を買い求める。それを食べながら、宮本町の我マンションまで歩いて帰って来た。罪悪人の如きうしろめたさを感じながら。

## 袈 裟 丸 山

44. 4月29. 21日

海老原, 長谷, 宇多川(教), 田口(教)

20日

桐生(6:38)——(8:00) 沢入(8:05)——(100:15) 寝釈迦(10:25)——(11:35) 小屋——(11:45) 賽の河原東(12:45)——(13:45) 小丸山——(14:15) 小屋(14:25)——(15:45) 前袈裟丸山口

21日

口(6:55)——(7:40) 後袈裟(8:00)——(8:35) 坊主岳(8:55) 奥袈裟(10:50)——(11:10) 某ピーク(11:30)——(12:05) 法師岳分岐(13:00)——(15:30) 飯場小屋(15:50)——(16:40) 林道(16:55)——(18:30) 原向(19:07)——(19:36) 桐生。

20日 ○

沢入の駅を降り、踏切を渡って学校の先で、指導標に従って右に折れ、林道をしばらく歩く。やがて沢沿いの林道が二分する所で、右に道を取る。寝釈迦を過ぎ、賽の河原手前の小屋までは、2, 3のパーティーと抜きつ抜かれつであった。ここから雪が表われ、この先は行く人もいないようである。スパッツをつけ、尾根道を快調に進む。袈裟丸と二子山を結ぶ稜線に出ると、男体や白根など残雪の日光連峰が一望のものとなる。天気は快晴で、雪の白さが一段と輝く。小丸山を下りきったところに、避難小屋がある。水場は 100m F.と書いてあった。最後の急登を登り切り、前袈裟丸山頂に着く。時間的にやや遅いペースだったので、ここをテントサイドとする。頂上は狭いが、テント一張には十分である。20cm 程の雪を踏み固め、さっそく Hotel kesamaru を建てる。

21日 ○→①→◎

昨夜はかなり寒かった。出発時には、すばらしい雲海が見られた。雲海の中に、ぽっかりと赤城が浮かぶ。彼方には、浅間も望まれ、天気も良い。袈裟丸山群の稜線は、所々、ひざぐらいの雪でもぐる所がある。かなり歩きづらい。夏道を歩くのとは大分違う。樹林帯なので、あまり展

望は良くないが、それでも所々で、日光連山や武尊などを、きれいに見わたせる所がある。雪で道がわからないので、一度ずれた方向に入ってしまったが、すぐにひき返し、お昼に、法師岳分岐に着く。分岐には標識がある。前袈裟を出たのが7時近かったので、5時間余りかかったわけである。そんなにのんびりしたペースではなかったのだから、雪道がいかに時間を食うかわかる。さて標識の示すように、ここから東の尾根に道をとる。最初は急な下りである。雪の上に所々動物の足跡らしきものがある。標高1678mの地点の南東の所まで来るのに、大分長く感じられた。ここら辺で雪も所々となる。あたりは伐採場らしく、切り倒された木がゴロゴロしており、それらを運ぶワイヤーも張られている。ここで小さな道を南に下り、5分位で飯場小屋に着く。水がホースで引いてあった。伐採の仕事をする人が使用する小屋なのであろう。小屋からは細い道がずっと続いている。1425mの標高の尾根の道である。小屋から50分で林道に出る。この林道を餅ヶ瀬を通して、原向まで大急で歩く。歩くというより小走といった感じで、駅まで1時間半、ノンストップで突き進んだ。

## 谷 川 岳

6月28日 長谷, 太田, 山口(修)

桐生(10:27)~~~~新前橋~~~~土合(3:00)——マチガ沢出合(3:45)——憬雪小屋跡(5:25)——谷川岳(6:30)——一ノ倉岳(7:55)——茂倉岳(8:10)——避難小屋(8:15)——矢場ノ頭(9:15)——土樽(11:40)~~~~桐生

平標へ向う予定で出発したのだが、谷川岳はガスがかかっており、風が強く、初めてのコース、平標までは、とても無理であると判断し、茂倉新道を下ることにした。茂倉に着くころは、歩いていても吹きとばされる程風が強くなってしまい、平標に向わなくてよかったようである。避難小屋で風が止むのを待ったが、止みそうもないので、1時間くらいして新道を、のんびりと下ってきた。

## 谷 川 (三国～トマの耳)

10月21日～23日 松田, 中島恒, 他1名

21日

伊勢崎(7:54)~~~~後閑(9:17)——三国峠(10:55)——平標山の家(14:20)△

22日

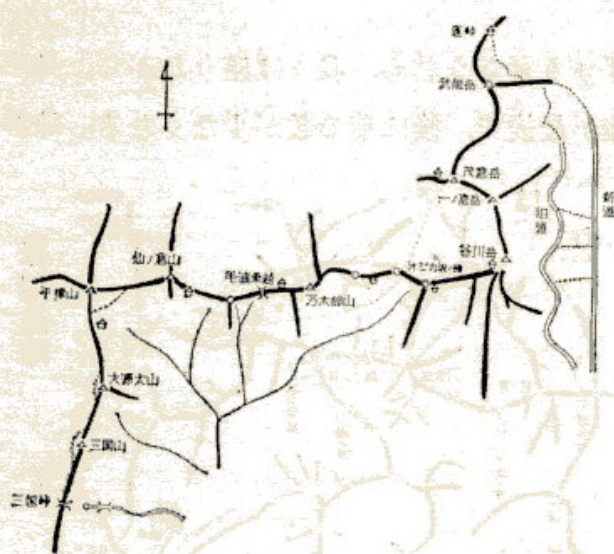
△(6:10)——仙の倉山(7:30)——エビス大点の頭(8:25)——万太郎(10:45)——大障子の頭







山道とは異質な道があった。新道とちがって時間もかかれれば道も悪い。普通なら幽ノ沢付近に新道へ下る道があるから、そこに行くべきだ。家からの差し入れ、トンカツ、レタス、握り飯、白菜の漬け物、すべて最高だ。新雪の岩壁もすばらしい。蓬の登りから雪が現われドロだらけになる。



武能よりガスにまかれる。茂倉の登りは20～30cmの積雪である。△には暗くなってから着く。誰もいない。みんな寒さと空腹でまいりぎみ。水場は水少なく、回り一面 20cm 以上の雪あるのみ。△は大きく20人位宿れるだろう。

11月2日

天気予報が悪く本日夕方より吹雪との事。予定の越路△へは行かず、オジカ沢頭△へ行くことにする。雪は谷川まであり、くさっていてみなドロだらけである。谷川より雪はなくなりオジカ沢頭

には楽に着いた。昨年とちがって今年は戸がはずれていて、みすばらしい小屋となっていた。マナイタグラへ3人して出かけたが、マナイタグラの登りから30～40cmの雪となる。マナイタグラからは万太郎までのコースが手に取るようにわかる。帰り道、登山学校の2人より下の沢で1人滑落した事を聞かされ、伝言を頼まれる。3時頃ガスが強くなる。5時頃2人組が△に入ってきた。総員5名である。ガス、風強し。

11月3日

ガス、風強いが、気温が高めのため予定通り行くことにする。キルディングが2分とたたないうちにビシッビシッとなる。道はぬかりよく滑る。3人ともズボンの上にドロをはいてしまった。万太郎も楽に登り、越路△でバッタリ合った大橋と挨拶し、仙ノ倉も楽勝。天気が悪く寒いので、平標へは行かず、平標△へ向かう。さすが下界は暖かく△からキルディングをみんな脱いでしまう。峠の小屋の中で皆さっぱりと着換をして、バス停へ向う。バスは時刻表とは大部ちがっているし、列車もちがっていた。更に事故があってバスは遅れるし、下界はままたらないものである。連休のためどこの△も混んでいたが、我々3人は幸せだった。

## 谷川岳・平標山

11月2, 3日 大橋

2日 桐生~~~~土合(3:45)——(7:45)谷川岳(8:15)——(9:15)オジカ沢の頭(9:30)——(11:45)万太郎山——(12:15)——越路避難小屋△



3日 △ (8:20)——(9:20)エビス大黒の頭(9:25)——(10:25)仙ノ倉山(10:30)——(11:00)平標山——(11:30)平標小屋 (12:30)——(15:00)三国峠

2日 ○→◎

ハアハア言いながら谷川岳に登る。頂上には思ったよりも雪が少なかった。連休なのでさすがに人が多い。頂上などものすごかった。避難小屋には昼に着いた。早いものとみえ一番に着いた。そのうち女の子が2人やって来た。それからヤローがどしどしやって来て、結局6人用のテントに12人寝る感じとなり、十分に横になれず楽しいやら苦しいやらで一夜を過した。

3日 ◎

朝は早く目が覚めたが、一度小屋を出てしまってもう中に入れてもらえそうもないので、6時過ぎまで寝ていた。今日はガスが巻いていて展望が悪いので急いで平標小屋まで下った。そこでラジウスをつけて 食を取り、今度はゆっくり下った。平標小屋の主人も今日下山して行った。

## 白 毛 門 山

11月29～30日 海老原 酒田(教) 宇多川(教)

11月29日

桐生(5:32)~~~~~(6:14)新前橋(6:15)~~~~~(8:29)土合(8:45)——(8:55)東黒沢(9:20)——(13:15)森林限界△

11月30日 ⊗→●

△(10:30)——(13:30)土合~~~~~桐生

11月29日

28日夜行で出登の予定であったが、都合で29日早朝の出発となる。朝から雲ひとつないいい天気である。土合でおりた客は登山者よりスキーをかついだ者の方が大部多かった。彼らは重いザックの我々を尻目にどんと例の長い階段をのぼって行ってしまう。駅付近は積雪 20~30cm ということであろうか。東黒沢の橋を渡った所で、スパッツをつける。2,3 日前から急に冬らしい気候になり、あっというまにこのあたりも積雪が増えてしまった。ここから尾根道になるわけだが、ちゃんと雪は踏まれている。尾根は積雪 50cm 位である。積雪期のこのコースは今年の元旦に試みた。その時はサブで白毛門までピストンの予定であったが、尾根上部の2m近い雪のため、森林限界まで5時間15分を費してたどり着くのがせいっぱいで、そこで引きかえしている。その時の天気は雪で半ば過ぎたあたりでトップに出てしまい、ラッセルを強いられてかなりの重労働であった。しかし今回は天気は絶好の山日和で、森林限界までは何とか雪も踏まれていたもので、重い荷物にもかかわらず4時間弱で森林限界に着くことができた。ところが何事もそうこっちの思い通りにはいかないらしく、この森林限界で、あろうことにもトップパーティーに追



いついてしまったのである。踏まれた雪の状態からみてどうも、この踏み跡は新しいものであるという予感がしていたのだがそれが当ってしまった。見ればこの4—5人のトップパーティーは一生懸命ラッセルをしているのではないか。荷物といえばサブに少しした位の物であるが、土合を7時に出たとの由、何と6時間以上もかけて、ここまで来たのである。この先は考えものである。我らのパーティーと向うのパーティーとの人数やら荷物やら、時間やら、予報の明日の悪天やらを考え合わせるとどうも今日はこれ以上行けないようである。向うのパーティーも今日はここにテントを張るとのことなので我々もそうすることにする。初めての冬テン使用で勿論雪の中での作業ゆえテントを張るには、何やかやと手間がかかった。午前中はまだ十分な純白の化粧もせずに輝いていた谷川の岩壁も、午後には太陽の陰になり、陽がその稜線に落ちる頃、闇の訪れとともにあたり一体は寒気に囲まれていた。

11月20日    ⊕→●

何ともはや悲劇が再び我々を襲った。悪天候を予報した天気予報がピタリと当ってしまったのである。朝から吹雪。細かい雪が強風とともにテントにあたる音が聞える。ところがさらに驚いたことに、この視界もきかない冷い吹雪の中をついて、ここまで登って来た人間がざっと20人以上はいたであろうから感服するしかない。何もこんな天気の中をわざわざ来なくても良さそうなものさ。土合までの電車賃などと引きかえられたのでは生命の値段も大部安く見られたようである。我ら一行3人はまあ何とか白毛門までなら行けないこともないが、ここは潔良く名誉ある撤退の運びとなる。要するに一度ならずも二度試しては見たが、はかなくも二度とも同じ所までしか来られなく、同じように無念の心にさいなまれ、来た道に戻るしかなかった。かくて栄冠は来年の三度目にもちこまれたのであった。

## 白毛門—巻機山

9月13日～15日    草場、上山

13日    桐生~~~~(22:28)

14日    土合(3:45)——登山口(4:10)——(7:45)白毛門(8:00)——(9:30)笠ヶ岳(9:40)——(10:25)朝日岳(11:25)——(12:25)大鳥帽子(19:00)——檜倉山(14:55)□

15日    □——柄沢山(7:45)——(8:55)米子頭(9:10)——(10:40)巻機下(11:15)——清水部(11:35)落への分岐——(13:00)尾根中間(14:00)——姥沢(16:30)——六日町~~~~桐生

列車も土合も満員、白毛門への急登にもかなりの人。ワンピッチとると夜が明け始める。白毛門でのみはらしはよい。リンゴをかじりゆっくり展望をたのしむ。団体をやりすごし朝日へ。朝日の頂上は野営もできる、かなり広い草原、尾根を上がったりはずしたりしながら進む。途中の草原でうっかり横になったりすると知らぬまにスヤスヤやりだす。それでもどうやら檜倉山につ

きテント。草原の山なり。

ガスった中を出発、さすがにここまできると人も少くなる。しばらくすると巻機からの人達と逢う。みはらしのよいそして時々広い草原のある気持のよい尾根である。巻機の下で昼食とし、水を補給してのんびりする。ガスが群馬側から新潟側にみごとにながれていく。巻機にはさすがに人も多い。ここから清水に下るのをやめて割引をこえて姥沢に下ることにする。この尾根は思ったよりはるかに時間のかかる尾根で、ゆっくりできると思い途中のんびりしたのがまちがいでバスの時間ギリギリにつく。

## 白毛門—巻機山

5月28日～30日

太田、山口昌、長谷、永井(医進)、杉田(医進)

5月28日

桐生——土合(3:20)——1457mピーク(6:35)——白毛門(7:25)——笠ヶ岳(9:00)——朝日岳(11:20) □

29日 □ (6:15)——地藏頭(7:20)——大鳥帽子(7:40)——檜倉山(9:00)——柄沢山(11:45)——米子の頭(13:20)——巻機山(15:35) □

30日 □ (6:00)——牛ヶ岳(6:30)——巻機山頂(7:05)——割引岳(7:30)——塩沢——水上——前橋

28日

土合に着いたところから雨になったが、目的地へ向うことにする。白毛門への登りにかかるころには、雨が降ったり止んだりしていたが、どうにか白毛門へ着くことができた。そんなに苦になる登りではなかったが、少しバテ気味の者もいた。だんだんガスがでてきて目通しがきかないため、笠ヶ岳への道程が非常に長く感じられた。笠ヶ岳を越えるあたりから、又雨が降り始め、いくら歩いても、朝日に着かないように思われた。朝日岳に着いた頃には、雨が激しく、その中でテント場を捜しまわる。結局、熊笹の上にテントを張る。午後になって寒さがきびしくなり、一時的に、ヒョウなどが降ったりして、明日のことが必配になるが早めに寝る。

29日

昨日の天気とはうらはらに、真青に晴れあがった空を見て喜びあがる。朝日岳からの谷川、武尊、日光等の山々はすばらしいものであった。天気も良かったため、快調なペースでぐんぐんとばしていく。残雪も消えさった大鳥帽子の熊笹の道を進んでいく。檜倉あたりから、残雪を踏みながら、のんびりした気持ではあったが、速いペースで進む。柄沢を越えるあたりから、少し疲れがでてきて、巻機が遠いように思われて来た。米子の頭をこえ、巻機への登りを登りつめたあ



たりで、残雪の上を歩いてうるうちに、道がわからなくなり、少し東よりに行ってしまった。ガスがかかってきて、どこが巻機の山頂であるかわからなくなってしまったが、地図と磁石とを頼りに、巻機のすぐ下にでる。ガスがかかっていたため、雪にうまった巻機が、そこからまた100 m以上登らなければならない程、高く思われた。しかし、小屋捜しのため山頂に登っていくと、なんのことはない。すぐ山頂に着いてしまった。広い山頂を東西に歩いてみたが、小屋を見つけ出すことはできなかった。巻機のすぐ下にテントを張る。

30日

山頂にザックをおいて、牛ヶ岳へピストンする。牛ヶ岳から越後三山が大きく目前に見えてきた。割引岳から、やせ屋根を通り、長い時間をかけて、下山していく。

## 巻機山・米子沢・割引沢

8月16日～18日 鳥居、横尾、高橋、草場

8月16日 ○

米子沢出合(6.45)——引返し(7.30)——(8.30)出合(11.00)ヌクビ沢分岐(11.30)——稜線(14.00)——(14.15)割引岳(14.40)——巻機山(14.55)——米子沢出合(15.55)□

8月18日 ○

米子沢出合(7.50)——(10.30)スラブ下部(11.30)——(12.30)巻機山(13.00)——□

8月18日 ○

□——清水部落——桐生

16日

米子沢出合の橋までタクシー。朝食のあと出発。数日前の大雨のため浮石多く危険。約40分歩いた所で、高橋が大きな石を足の上に落とし引返す。高橋は、鳥居氏が付添って六日町へ。横尾、草場は割引沢へはいる。途中、平らな岩の上で30分ばかり昼寝。クヌビ沢の下でも大休止。本谷上部の大滝は、素手では巻く以外にない。巻くのも多少危険な所もある。ホールドとなる木が無いため。上部のヤブは木イチゴがいっぱいであった。下りは一気にかける。鳥居氏の話では、高橋は打撲のみということで、ひとまず安心する。

17日

横尾は体力切れで、清水峠を越えて帰る。鳥居、草場、米子へはいる。2か所高巻けば、あとは快適なスラブ、フリクションをきかせて楽勝！

18日

予定変更でのんびりムード。昼に T. S. を出て清水発のバスで帰る。



## 白毛門—清水峠

9月5日～6日 海老原

9月5日 桐生—新前橋

9月6日 新前橋—(3.00)土合①(3.10)—(6.00)森林限界(6.30)—(7.00)白毛門山  
—(9.40)笠ヶ岳◎(9.40)—(11.15)朝日岳(11.50)—(13.15)清水峠(14.00)—(15.15)  
白樺沢避難小屋(15.35)—(16.15)湯檜曾川(16.20)—土合(18.00)—桐生

6日 最初の計画は大きかったが、なんとまあ結果のみじめなこと。予定は、土合—白毛門—朝日—蓬—茂倉—谷川—土合と、夜行日帰りで歩いちゃおと思っていたが、前夜の徹夜のアソビがたたって、土合に着く頃には目がトロロン。それでも何とか意地を固めて歩き出してはみたものの、ちょっと休んではごろんとそのまま朝寝昼寝を繰り返して、トップを歩いていたつものが、朝日岳に着く頃にはビリのビリ。何とここまで来るのに、3回の長寝をして、休憩時間を合計すると、5時間にもなるというから、我ながら、あいた口がふさがらないというか何と言うか……。

こうまでなれば、最初の大計画なんぞはどこへやら、きょう中に何とか家に帰ろうと一目散。気分がだいぶん楽になると、急に元気がでてきて、清水峠までの下りは駆け足も混じる。ところが、ここでまた一難。急に雲が動き始めたと思うと、ピカッと一発。たちまちの洗礼。峠に着く頃には、どしゃぶりの雨とけたたましい雷鳴。雨が小やみになった合間をみて、いざ出発と、10mも歩かないうちに、再びザーザーゴロゴロの来襲。きょう中に帰ることさえ危ぶまれてきた。それでも、しばらく小屋で難を避けていると、天の女神が私にほほえみ、さっと雨があがった。チャンス到来と、一目散に土台への道をたどる。だけど、どこでどう女神がまちがったのやら、10分も行かぬうちに再び雨、雷。こうなれば、英雄的感傷にひたりながら雨中行進とあいなる。白樺沢の小屋までの道の何と長かったこと。ここまで来てやっと雨もあがり、あとは敗残兵の如くどぼとぼと土合への道を歩く。なんとか最終列車には間に合うことができた。

## 白毛門—朝日—蓬峠

4月29日 内田

(コースタイム) 4月21日 ①

前橋(6:48)~~~~土合(8:35)—(10:20)白毛門見晴台(10:35)—(11:00)白毛門山頂(11:15)  
—笠ヶ岳(11:50)—(12:35)朝日岳(13:10)—清水峠(14:00)—(14:40)七ツ小屋山(14:50)  
—蓬峠(15:30)—(17:15)土樽(17:35)~~~~前橋



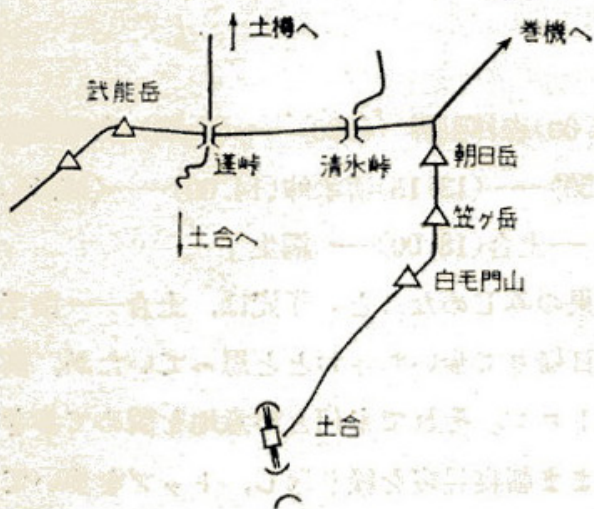
(記事) 昨日赤城山のテッペンからながめたらこっちの方がおいでおいでをしていたので、ふらふらと汽車に乗ったという次第。

天気はいいし谷川岳山頂で昼寝でもしようかなどと思いながらも昨日見た時の朝日岳辺りの白

さが頭にあったためか自然に足が白毛門へ向いていた。逆光に映える美しいコブシの花、残雪をバックに浮き出るその純白さは俺の心に似ている。

例年より残雪量は少ない様で所々夏道もでてゐる。朝日ヶ原はさすが一面の雪原と化しているがやはり全体的に少ない気がする。

ここまで来たら蓬峠まで足を延ばすのは必然だ。清水峠、蓬峠にかけては低いにも拘らず残雪豊富だ。テントでも上げてスキーをしたらいだらう。



## 尾 瀬

4月11日～13日 草場、堀江、上山

### 尾 瀬 周 辺



12日 桐生——沼田——戸倉——大清水——

一之瀬

12日 三平峠——尾瀬沼——

18日 大清水——戸倉

11日 ○

戸倉から一時間ばかり行って、トラックに便乗。大清水から10分か20分行くと、すぐに雪原となる。雪がしまっているため、そのまま歩く。シーズンには、あれだけごったがえす道もすっかり雪にうまり、我々の他は誰の姿も見えない。相変らず、悪口雑音をたたきながら、一之瀬へ。ここからちょっと入ったところにテント。

12日

すっかり晴れ上った尾瀬には、まったく人影もない。あまりにすばらしいので、現実感がない。



冬路をつめて、三平峠へ。ここでスキーをつけ、ガカ声をたてながら、尾瀬沼めがけて突っ込む。尾瀬沼の氷が落ちないことを信じて、それでも沼の上に乗ったり、降りたりしながら大江湿原へ。それにしても良い天気だ。燧へは、燧新道をたどって、ゆっくり行く。木々の間に間に尾瀬沼が見える。頂上は風が強く寒い。相変らず天気は良く、あたりの山はまる見え。下りはいよいよスキーをつける。天気が良すぎるため、雪質が悪く、斜滑降、キックターンの連続。下手なスキーでも歩くよりは早いと見えて、1時間もたつ頃には、すっかり下っていつの間にか、尾瀬沼の上にいた。今度は堂々と尾瀬沼の上を歩く。東電小屋の近くで1時間も昼寝してテントへもどる。ウィスキーを飲んでいい気持ちになり、草場氏と小生でテントの中へもぐり込む。外では堀江氏は何やらブツブツ言いながら、やっていたようだ。

### 13日

ちょっとあたりでスキーをやって帰途につく。大清水で、トラックが止っていたので、あれが乗せてくれるな、なんて冗談を言っていると、やはり後から来て乗せてくれた。天気は今日も快晴で、夏のような暑さ。戸倉で、草場、堀江両氏と別れる。新前橋で小島氏と会う。

## 金 精 山

12月6日～7日 鎌田、山口(昌)

### 6 日

桐生(5:30)~~~~(7:30)東武日光——湯元(9:15)——(12:30)金精道路——(13:30)金精トンネル——(16:00)金精峠

### 7 日

金精峠(11:30)——(13:15)金精山(14:10)——(15:50)金精岳(15:30)——(15:50)金精トンネル(16:00)——(17:30)東武日光~~~~桐生

素晴しくよく晴れて、車窓より見た男体山、女峰山が朝日に輝いて美しかった。中禅寺湖あたりから、ひときわ真白な白根山が見えた。湯元から、金精道路下の道に行く。少し行くと、足跡がなくなり、ヒザ近くまで雪にうずまり、ワカンをつけて歩く。しばらくそのまま苦労しながら行くが、崖を登って道路に出ようと、これも又、苦労して登る。道路は完全に除雪されており、単調なアスファルト道を歩く。金精トンネルに着いたが13時30分と意外に時間がかかってしまった。トンネルの所よりワカンをはいて登るが、標高差100m位の所に、2時間半もかかってしまい、小屋のわきに冬テンを張る。

翌朝、明かるくなって外を見ると雪が降っていて、ガスも出てきたので、出発をためらって、テントの中でラジウスにあたっていた。11時頃になって、金精山だけは行ってこようと決め、用意してピストンに出かけた。金精山の最後の登りより、雪が深くなり、ひざ上20cm位になる。



苦戦の末、金精山頂に着くと、男体、燧，至仏，武尊，白根など，きれいに見え，菅沼もすぐ下に見え，感激する。下りは，ワカンをはかず，靴に雪が入ろうとかまわずに急いで下る。峠よりトンネルの所までは，登りの時，2時間半もかかったとは，虚のように，たった20分で下ってしまった。トンネルより10分程道路を歩くと，道路工事のトラックが止まってくれ，東武日光まで乗せてもらう。

今度の山行で反省することは，最初の計画が，白根山まで行くことになっていたのだが，雪の状態をあまく見過ぎて，一泊では，無理だったこと，その為に金精山までしか行けなかった。

## 田代・帝釈から奥鬼怒へ

10月15日～19日 山口(昌) 長谷 海老原 部員外一名

10月15日 ◎→①

桐生(8:46)~~~~(10:30)鬼怒川温泉(10:50)——(12:20)湯西川温泉(12:45)——(14:10)三河沢橋(14:30)——(14:35)□

16日 ①→◎

□(6:50)——(9:15)日暮峠(9:30)——(10:15)オリドリ小屋(11:15)——(13:05)三本尾根——田代山下鞍部——(15:05)田代山分岐(ガス)——(15:25)太子堂(ガス)△

17日 ○

△(9:35)——(10:30)帝釈山(11:15)——(13:38)台倉高山(14:00)——(14:25)檜枝岐分岐点(14:30)——(14:55)引馬峠□

18日 ○→①→◎

□(7:40)——(8:40)孫兵衛山(8:50)——(10:45)黒岩山分岐——(11:00)黒岩清水(11:50)——(13:00)——鬼怒沼山手前鞍部(13:10)——(13:55)鬼怒沼小屋(15:15)——(16:40)八丁の湯□

19日 ○

□——女夫が刈——鬼怒川温泉~~~~桐生

15日 鬼怒川温泉で電車をおり，バスで湯西川へ，ここから1時間半で三河沢橋に着く。橋の所に田代登山口の指導標がある。三河沢に沿って林道が上流に向かって延びていて，すぐに左手より合流する小さな沢のあたりにテントを張る。水はこの沢のを使う。倒木の陰にナメ茸を見つけたが，絶対的な確信が持っていないため，おしみながら見過ごす。あたりは紅葉がきれいである。道路のすぐそばにテントを張ったので，山林での仕事のオジチャン，オバチャン，アンチャンに至るまでも珍しそうに，我々を見つけながら通り過ぎて行く。夜空の星のきらめきに見とれたことは言うまでもない。

16日 田代山登山口は三河沢より，林道を北方へ7～8分行ったところにある。わかりや



すい指導標がたっている。最初はかなり急な登りである。スギやカラマツの植林地帯をジグザグに登って行く。次第にうす雲が広がろうとしている。8時に尾根道に出る。紅葉が一層鮮かに展開してくる。日暮峠には、いくつかの小さな道標があり。それに従って右に折れる。最初はやや下りぎみだが、すぐに水平な巻き道となる。オルドリ小屋までは楽にワンピッチで行ける。オルドリ小屋からは日光連山が遠方に見える。それと、小屋付近の大規模なカスミ網に驚く、驚きというより怒りを感じる。網にかかった何羽かは、すでに力つきて死んでおりまた何羽かは羽をバタつかせて必死にもがいている。まだ元気な数羽を網からとって空にはなしてやる。

尾根道は倉気はかなりあるが、すべて通りやすいように、切断されていて、割合楽に歩くことができる。時々田代山南面の崖が見える。1時頃三本尾根に着く。木でおおわれていて展望はきかない。来るときに三本尾根を北東にのびる稜線の道が見えた。この頃より見え隠れする田代山頂付近がガスでおおわれてくる。田代山手前の1828mのピークに着く頃には、山頂はほとんどガスに隠れ、時々うすぼんやりと見える山頂付近の木を見ると、山頂はかなり先のように感じる。しかし最後の登りはそんなにたいしたものではない。急ではあるが30分もすれば登りきるだろう。登りきったところで道が二分している。右へ行く道と左へ行く道である。ここは草原ではなく森林地帯である。左の道をとる。ずっと森林地帯の中に道がつけられている。どうやら県境上の道のような。時々森林が切れて、小さな草地に出るがすぐにまた森林の中を進むようになる。25分して、田代山草原の西端に出る。北に方向をかえてやや行くと太子堂入口の看板がたっている。太子堂は、やや奥まった森林の間にひっそりと建っていた。天候がおもわしくないでここを今夜の宿とする。一段落してガスの中を弘法池まで水を汲みに行く。一面のガスで田代の大きさは全く見当がつかない。所々行く手を小さな森林帯でさえぎられるが、かすかな踏み跡をたよりに北東方に進む。なだらかな下り斜面である15分も行った頃一瞬のうちにたちこめていたガスが、まるで幕を切っておとした如く走り去ってしまった。そこに広がったのは、茶色に変色した田代山の草原と水をたたえた弘法池であった。さらに北西方の会津駒の大きな山容が目の中に映る。池の所には大きな看板がたっている。水は無色透明である。三角点を探したがついに見つからなかった。夜中に雨が降ったが堂のおかげで濡れずにすんだ。

17日 前夜の雨は明け方にやんだようだ。朝はかなり風が強かったが、天気は一日中快晴であった。太子堂は少なくとも10人は泊れるであろう。入口の戸が片方ないので寒いことは寒い、誰がつけたか厚手のビニールでその片方がうまくふさげるように張られている。出発前に田





代山の湿原地帯を再びふらついてくる。この大きな広がりには、何とも言えぬ愉快な心を抱かせる。雨が降ったために、昨日は無かった天狗の池に水がたまって青空を映していた。

さて帝釈山までは、1時間とはかからない。そしてそこでは八方の展望を思いのままにすることができる。北から並べれば、会津駒、三岩、窓明、丸山岳、会津朝日、那須茶臼、那須朝日、男鹿、高原、女峰、赤薙、太郎、男体、大小真名子、日光白根、至仏、笠、燧、平、丹後、中の岳、越後駒、そしてこれから越え行くピークの連なり、実に、良く見えるというより言いようがない。三角点の傍らに坐ってしばらくの時間を過ごす。

展望に名残りをもちつつ、台倉高山へと向かう。帝釈の下りは行けども行けども急な下りで下りきったササの鞍部まで15分しかかからないのに大分長い感じがした。この鞍部の西側の沢をおりれば、水が得られるような気配であった。

鞍部から百数十メートルを登り、南西に延びる尾根にはいりそこから台倉高山までの道沿いに、小さな湿原が7~8箇所所散在している。名も無き小さな田代の密かな存在は一層印象を強くする。

台倉山までの道はさして急でもない巻道の連続で案外楽にそのピークに立つことができる。山頂は狭くササが茂っているが、帝釈に劣らず視界は360°に及ぶ。三角点で道は90°曲がり西方に続く。25分程の下りののちなだらかな斜面に出て檜枝岐への分岐点となる。小さな導標がある。そこから再び25分、尾根西側のなだらかな巻道を行くと、引馬峠である。快調なペースでここまで来ることができる。峠といっても、尾根と尾根の切れ目という感じではなく、斜面の一部といった感じだ。この北端に水が流れている。ここにテントを張る。焼け落ちたような小屋の残骸がある。

夜中にテントの外がガサガサと小さくざわめいた。何やら知れぬ小動物の訪れは、無気味なかたまりの訪れと同じであった。

18日 孫兵衛山近くは、だだっ広い感じの倒木地帯である。ガスっている時は、よく踏み跡に注意しなければならない。途中一か所細い水の流れがあった。水は孫兵衛山のどのへんを通っているかよくわからないが、クマザサと倒木の間を曲りくねって続いており、ゆるい登りが終わる頃、右にクビレ田代への道をわける。小さな標識有り、黒岩山への道は、ほとんど大した登り下りもない。黒岩山東側斜面は、倒木地帯で道も近々隠され、注意していないと迷い込みやすい。道は大体平らに続いているので、踏み跡のようなものについて、下っていつてしまうようになったら引きかえすべし、ナタ目やペンキをたどりながら行けば難はない。これを越せば黒岩分岐で導標が乱立している。15分程下れば黒岩清水である。水は豊富だが、あたりはかなり散らかっている。どうやらここいらで気持ちのよい山行は終わりのようだ。鬼怒沼山・日光白根などが良く見える。しばらく行くと小松湿原への分岐と水場有り。

鬼怒沼山手前の鞍部へおりるには、地図上では60mぐらいしかないというのに、実際はかなり



急な下りが、止めどもなく続く。15分ぐらいいも急な下りで、不安を感じる頃やっと鞍部につく。クマザサが茂っていて、東西に沢が切れ落ちている。鬼怒沼山は山頂を通らずに西側を巻いている。知らぬうちに通り過ぎてしまうかも知れない。あたりが明るく開けなだらかな斜面になると、鬼怒沼は近い。まっすぐ道を下って行けば鬼怒沼湿原北端に出る。白根、根名草、燧が姿を見せる。大清水への分岐がある。湿原にはいると左側に小屋がある。タタミ敷きの狭い部屋がある。鬼怒沼で今回初めて人に会おう。湿原の草は茶色く枯れて、その中を木道が細く続いている。暖い日射しを浴びて、しばらくその上に横になって休む。大小の池塘が散在し、原生林がまわりを囲み、静かなたたずまいを感じさせる。

白根根名草によろやく雲がかかる頃、八丁の湯へとおる。急坂を小走りでかけおりて行くにつれて紅葉の明るい色が多く目に映るようになる。八丁の湯は人また人でごった返していた。加仁湯とて同様、かろうじて一番奥の日光温泉あたりが、まだ山のいで湯という感じを残していたが、人はどこも同じようにいっぱいであった。お一人様百円也を払って、内湯と野天風呂のはしごをする。川原の中州にテントを張る。

19日 朝風呂をくりかえし、昼近くにテントをたたんで出発、女夫が淵からバスが出ている。間一髪でまに合う。川治でバスを乗りかえ鬼怒川へ。あとは家路をたどるのみ。

## 女 峰 山

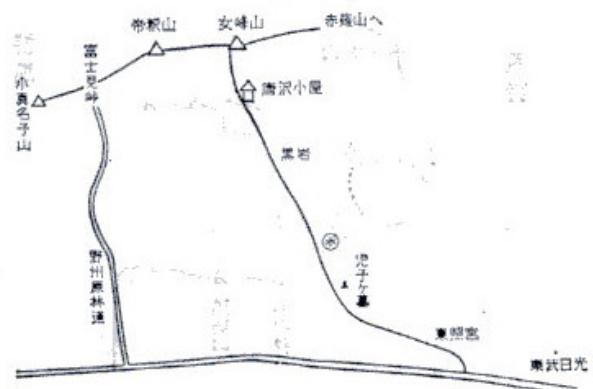
9月6・7日 鎌田・山口(昌)

### 1. コースタイム

6日 桐生(15:45)——東武日光(17:30)——東照宮前(18:00)——児子墓(23:00)——□

7日 □(9:00)——黒岩(9:40)——(11:25)唐沢小屋(13:00)——(13:25)女峰山頂(13:45)——(14:05)帝釈山(14:20)——富士見峠(14:45)——東武日光(19:35)

2. 感想 雷雨のやんだばかりの日光市内を二人で歩きはじめる。東照宮を過ぎてから階段状の道を行く。白糸滝との分岐点で、パンを食って腹ごしらえをする。ここで真暗となりヘッドランプをつける。女峰山頂のほうでは雷が鳴っているようだ。しばらく行くとガスが晴れてきて、星が見え出し、振り返ると日光市内の灯が美しく輝いていた。水場に二人がテントを張っていて、夜中に我々二人が登ってきたので驚いたようであった。水を補給して再び歩く。この頃より二人とも疲れてきて、休むたびに居眠りを始める結局11時頃になって歩くのをあきらめて、ポンチを敷





いて寝た。

7日 我々が出発する時には夜行で来た人達が10名位登って来た。先を急いで登るが、黒岩から雲竜溪谷方面はガスで全然見えない。小屋に着くと雨が降り出す。しばらく休む。女峰山頂でもガスで何も見えない。帝釈から一気に富士見峠に下る。そこより野州原林道に行く。長い林道で途中で暗くなり、7時頃通った車に便乗して東武日光まで乗せてもらう。

## 籠の登—四阿—万座

10月9日～13日 海老原

9日～10日

桐生——小諸(5:30)——(6:30)車坂峠(7:00)——(7:45)水の塔——(12:15)旧鹿沢——鹿沢入口——(14:30)鳥居峠□

11日 ◎

鳥居峠(5:40)——(8:00)的岩(8:20)——(9:10)2040mピーク(9:50)——(11:25)四阿山(11:55)——(11:55)——(15:30)浦倉山(15:40)——(16:20)□

12日 ◎

□(6:30)——(10:05)1800mの鞍部——(11:45)1940mのピーク——(12:35)土鍋山□

13日 ○

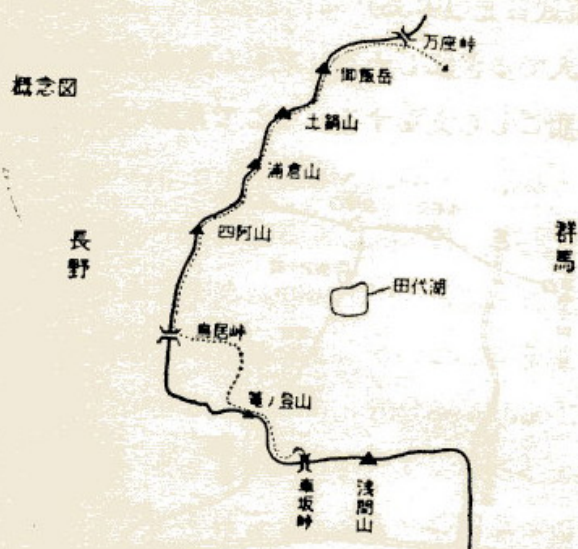
□(5:30)——(6:45)毛無峠——(10:15)御飯岳——(11:25)ゲート(12:40)——(13:50)万座峠——(14:30)上州三原——長野原(16:15)——桐生

10日

小諸には夜中に着き、バスの時間まで間があったので壊古園をふちつく。同じような連中が何

人もいる。バスは7時何分かのはずであったが客が多いせいか、臨時が出て車坂峠へ。バスが高度をあげて行くとほるか下の小諸の方面にすばらしい雲海が広がっていた。

車坂峠でバスを降りると、しみるような寒気にふるいあげさせられた。八ヶ岳、秩父の山なみや、遠くちょこんと目にはいる。籠の登まで、人のあとについたり追いこしたり、四阿山がその大きな据野を広げて、ゆったりとした構に見える。籠の登より北に行く下り道を取り、北西方にまがって、地藏峠からかなり車側の車道に出る。その道を西





へ地蔵峠まで行って、そこから旧鹿沢へ。どこでも真赤な紅葉がすばらしかった。鹿沢入口でバスを乗りつぎ鳥居峠へ。4時頃教養部の合宿隊と合流する。

### 11日

鳥居峠では一軒ある茶店のおやじが親切にしてくれ、水場を教えてくれテントを張ることができた。峠から四阿山へ行くには県境沿いの道を行かねばならなかったのだが、北東に延びる林道をそのまま30分程進んでしまった。そこから左に分かれる林道があったので、そっちへはいり、的岩山と沢一つ隔てた尾根の下を巻くような林道を進んだ。しばらくして沢において正規の道に出る。ゆるい登りが続いている的岩につく。高い石ベイのような奇岩の岩に登ると北ア連山が良く見える。四阿山が近くなるとあたりはすっぱりガスに包まれてきた。山頂には小さな社がある。北側からガスが吹き上げられてくる。長居は無用で、さっそく県境を浦倉山へと向う。最初は東へ少し道がついていたが、県境が北へ直角にまがるあたりから、プツリ切れた。足もとにはササがびっしりと繁っている。所々にペンキの丸印も見つけられ、それに従って進むようになる。浦倉までは、かなり長い行程のように感じた。半ばあきらめた頃やっと狭い山頂に着く。ガスで何も見えない。山頂を示す。小さな標識があった。足もとのササをかき分けると、三角点を見つけ出せた。テント場はここから約30分程下った、やや平らな所にした。一面のクマザサをザックで倒してテントを張る。みんな大分疲れている様子であった。水は各自が持っているものだけで間に合わせた。

### 13日

朝テントのまわりの樹々に霧氷がキラキラ輝いていた。天候は思わしくないが水もないので出発する。県境に沿って、500m程北西へ向う。浦倉山北の2000mの小ピークを過ぎると、あたり一体なだらかな斜面が続いているため、方向を失いやすい。案の定、西に来すぎたと間違いし、東へ500m程進んだ。そこの尾根らしき所を北に進んだが、県境からは約500m東にずれたようだ。そのまま、まっすぐ北に進む。わずか1km程の下り斜面を3時間近くかかって、ようやく、地図上の1822mのやや南東の地点にたどり着いた。谷を隔てた対面には土鍋山が待ちかまえている。峠近くで県境に出る。峠はなだらかなササ原である。きつくはない登りに1時間半かかって、1940mのピークに出る。ここで東へ大きくまがる。北側からガスが吹き上げて来て、稜線近くの樹々では霧氷がカラカラと冷たい音を立てている。なだらかな稜線を倒木を乗り越えて行くと、1999mの土鍋山の草原の斜面に出る。時々ガス流れて、その間に真青な青空が顔を出す。なだらかな草原といい気分は最高、急ぎょ予定変更でここにテントを張る。水は再び各自の残りでまたまに合う。

### 13日

まず昨夜の寒さと言ったらたとえようがなかった。風が吹いて、ガスが吹き飛んでしまったので暖気はすっかり夜空に吸われてしまったようだった。おかげで、夜中に4・5回目をさまし、



とても寝られたものではなく、ただガタガタとふるえていた。朝になっても全く寝た感じがしないで、ぼんやりとした状態、しかしきょうは全くの快晴、上部を白く化粧した北ア鹿島槍の双峰を中心とした山々が長くなり、妙高、黒姫、飯綱、戸隠の山々も視界をさえぎるものなしの展望を味わえた。土鍋山の三角点はとうとう見つからずじまいであったが、ここからは北への急な下りに踏み跡があった。木の根岩屑につかまりながらの下りきった頃丁度御来光であった。東下手に小串硫黄鉱山が見える。2009mのピーク手前から道がついていて五味池への分岐もあった。ここからは東の毛無峠までの下りを一気にかけりる。峠での休憩もそこそこにさっそく御飯岳に向けて出発。山のすぐ西側を立派な自動車道が走っているせいか、道のない県境をヤブをかきわけて進むのは大分抵抗があったが、全員忠実に一路県境を歩く。3時間20分の後、山頂に着く。三角点は西よりのササの中に隠れていた。時々草津方面の山々が大きくみえる。ここからゲートまではまたまた急な斜面で、みえていてもなかなか着かない。ようやく着けは着いたで、観光バスに乗った団体様からは不審な目を向けられ、見せものにでもなっているようであった。ここで教養部合宿隊と別れひとり帰路につく。万座峠でトラックに乗せてもらって上州三原までくる。ここから長野原までバス。

## 苗場山—白砂山 長谷，教育学部

10月10～13 日寺本先生

10月10日

桐生——越後湯沢——祓川(10:10)——和田小屋(11:20)——下の芝(12:50)——中の芝(13:25)——上の芝(13:52)——神楽ヶ峰三角点(14:15)——苗場山□(15:45)

10月11日

□(6:10)——サイの河原(6:23)——偵察(6:45)——天狗の庭(7:35)——赤倉山頂(8:45)——道不明(9:15)——道発見(10:45)——ナラジ山(13:40)——佐武流手前□(15:15)

10月12日

□(6:35)——和山分岐(6:45)——佐武流山頂(8:20)——赤土居山(10:15)——沖の西沢の頭(12:05)——白砂山(15:30)——堂岩山(15:55)——地藏峠□(17:30)

10月10日

祓川のバス停から林道をしばらく進み、やがて道の右側から登山道に入る。たんたんとした樹林帯を進みまもなく和田小屋を通過する。そこからは樹林帯や草原を通りながら、下の芝、中の芝、上の芝を通過していく。上の芝を少し行くともう神楽ヶ峰である。そこから少し行くと雷鳴清水があるそうだが、気づかずに通りすぎてしまった。急な道を登りきるともう苗場山であった。そのころからだんだんとガスがかかって来て、視界が悪くなって来た。テントを張り赤湯旧道を



捜すため偵察に出かける。しかし、赤湯新道はすぐ見つかったのだが、旧道は分らず引き返す。明朝ガスが晴れることを祈る。

10月11日

他のパーティーに道を聞き赤倉山へと向う。昨日捜した方向とは全く違っていた。地図上で自分たちのテント場をはっきり把握していなかったためと思われる。しかしサイの河原へ出てから又道が消え失せていた。サイの河原を南に進めばよかったのであるが、南南西に向ってしまい少し時間をくったが、赤倉への指導標を発見。そこから赤倉までは道もはっきりしていてまちがえることもない。赤倉は木々に囲まれていて展望はよくない。天気も悪くなって来た。そこから背丈以上もある熊笹の中を進む。15分も歩くともう道がはっきりしなくなってしまった。南々西に進むと沢すじへ向っているようなので道捜のため休む。偵察から判断してみると山頂から少し進んだところで西へ向ってしまったらしい。赤布を頼りに道をみつけ出し、ナラジ山へと向う。ナラジ山までの道は荒れているが、ナタ目と赤布を頼りに行けば迷うことはない。ナラジ山の三角点は見つからず、頂上も不明のまま出発する。佐武流の手前、和山への分岐10分位のところをT.S.とする。道から右下に見える小さなT.S.である。6人用2張がせいっぱいである。水はそこから5分も下らずに得られる。

10月12日

佐武流への登りはそんなにきつくはないが、深い笹が部分的にある程度である。登中から美しい霧氷が見られ、信州側は霧氷、越後側は最後の紅葉と非常に対称的ですよばらしいの一言につきる程であった。佐武流からの急な道を下りそれから少し登ると赤土居であるが、山頂はなくやせ尾根を進む。この辺はジャクナゲが多く夏には美しくさき乱れるであろう。沖の西沢の頭へはゆるやかな登りである。沖の西沢の頭はテント張はれるが、水場はない。ここからの下りは倒木が多いだけでそんなにたいしたことはない。笹の中を下るだけである。鞍部から群馬県境までの道はガイドによると倒木が多いとの事であったが、ほとんど急ではあるが楽に向う。群馬、新潟、長野県境では天気もよくなり、見晴もかなりよくなってきた。堂岩山で天気図を最くため30分ばかり休む。あとは下る一方であり走るように地蔵峠に着く。

10月13日

野反湖で県境縦走をめざす教育の連中と分かれ、トラックに便乗して長野原へと向う。

## 上 州 武 尊 山

1月2日 ◎→⊗ 鳥居、鳩原、小島、内田

コースタイム

雲越氏宅(7:30)——奈倉の頭(10:00)——見晴し(12:30)——沖武山頂(13:15)——(14:00)避難



小屋(15:00)——奈倉の頭(15:30)——(16:30)雲越氏宅(17:10)——(15:35)久保(17:40)水上  
〔解散〕

前日山口部落の雲越さんの家に世話になり、元旦の夜を静かに杯を傾けながら味わった。積雪状況は雪を楽しみに来た我々には正に適量だ。見晴しから沖武へは完全にラッセルアルバイトとなった。苦闘というよりラッセルを楽しんでいるといった方がよい。山頂は吹雪模様で長居はしなかったが帰路新雪にうずもれた樹林の中チラチラ舞い落る小雪の中を歩いていると、いいしれぬ趣が感ぜられる。

## 利根源流偵察

11月1～4日 高橋西口

11月1日 ◎

桐生(12:45)——水上——須田貝ダム——矢木沢ダム——(10分)——T. S

初めはこの山行は丹後沢 or 深沢かを逆行して新潟六日町へ至る計画であったが、日数的に無理となった為、1970年度実施のための偵察山行に切りかえる。

水上よりバスで須田貝ダム終点で降りる。本来ならばそこから遠々三時間位の歩きであろうが、時間も遅く乗用車を止めて便乗させて頂く。矢木沢ダム4:30頃着く、夕食の仕たくを始める頃はあたりはもう暗い。

11月2日 ①

舟で逆登って行けばどんなにか楽でかつ速いだろう。あまりに道がくねくねと曲って遠々と続く。広い林道は東千ヶ倉沢出合で終る。この林道を終ると工事のあとかたづけの済まぬかようなガラ場を過ぎ、トラバース気味に道はついており荷が大きな場合などは苦戦するかも知れない。1ピッチ程で少々小ぎれいなヌラブを見せている名もない沢に出合うが、ここから割沢へは今までのように湖の端をトラバースしてはならない。ヤブこぎを強いられる苦しみ待ちうけている。割沢へはここから小鞍部めがけて登り越すのであるが我々はこれを知らず予定外時間を費した。割沢から赤倉沢出合、水長沢出合へと道はトラバース気味ながらもそれ程悪くはない。水長沢手前のシシの突然の出現は声も出せぬ驚きのコマであった。水長沢よりは幾度も渡渉を余義なくさせられる。11月の沢の水の冷たいこと冷いこと、やはり沢登りの季節は過ぎていた。T. S を6時に出て、シッケイガマリン、井戸沢手前で午後4:00。適当な場所を見つけてツェルトを張る。尺音がやけに耳につく。

11月3日 ◎

予定通り 5:00 A. M に目をさましたものの、小雨が降ったりやんだりの暗黒たれ込める空模様。9時頃前進を断念。T. S 近くで高い場所から細くきれいな水を落していたF 6を、西口氏



の指導よろしく登りヤブこぎをして、小穂口山(1526m)をきわめる。ここからはめざす予定であった丹後山や丈水上山へと逆登っている。幾本もの沢が手をとるように見えた。昨日と同じ場所にT. S.

11月4日 ①

1昨日と同じように朝から淨たい沢の中を歩いて下る。矢木沢ダムよりは車を止めようとヤッギになるが平日でもあったし中々無い。その内京成ホテルのジープが止ってくれ、須田貝ダムまで行く同様歩かずに済んだ。須田貝より最終のバスに少時間待っただけで乗ることができた。

## 尾瀬 OB 山行 (ゴールデンウィークのゴールデンコース)

5月1日～5日

鳥居, 鳩原, 藤村, 内田, 小島, 草場, 横尾, 他1名

(コースタイム) 5月1日 ①

~~~~高崎——沼田——戸倉——鳩待峠——山の鼻——柳平□

5月2日 〇

□柳平(5:00)——尾根取付(5:35)——ススケ峰(7:10)——(7:45) 1918m峰 (8:15)——白沢山(8:55)——(10:00)平ヶ岳(11:00)——白沢山(11:45)——(12:30)1918m峰 (12:45)——スヶス峰(13:15)——1821m峰(13.50)——(14:45)柳平□

5月3日 〇

自由行動

5月4日 ①

□柳平(5:50)——(8:55) 至仏山(9:30)——(11:35)笠ヶ岳(13:55)——(18:40)湯の小屋□

5月5日 ①→②

□湯の小屋——水上→

(記事) 5月1日

人けの少ない山の鼻に着いた。「おい、Beer を飲もう」とでかい声。至仏山荘かどこかで缶入を買ってきて一気に飲みほした。

山行の無事終了を祝していつもやるあの味だ。ただいつもと違うのは今日が入山日でまだ1時間足らずしか歩いていないという事位だろう。柳平の一角で雪を踏みならし設営。持参の御神酒で乾杯! 明日の平ヶ岳往復が天候に恵まれんことを祈る。

5月2日

雲一つねえ! まっさおだ! すげえ! アイゼンを着ける者着けぬ者、皆快適に雪の上を進む。猫川二俣から左俣に入りススケ峰への枝尾根にルートをとった。夏のいやなヤブなど全部雪



の下。のっぺらぼう平ヶ岳山頂、雪又雪の奥利根の山が延々と続く。しかしもはや冬の雪の厳しさは感じられない。

このままどこまでも簡単に歩いて行けそうな錯覚におちいる程優しく暖かい山波であった。帰路、なでるようにスキーで下る者、ボンボン駆け下る者。

一句掲載『ふりかえり、ふりかえり、あーいいないいな平ヶ岳かな』？

陽のまだ高いうちに帰り着いた。山の鼻まで缶ビールの買出しが行われ、またたんまり運び込んである。食料は質、量ともに抜群。上げてよかった？

5月3日

自由行動日に指定。鳥居氏は外田代方面へ探索に、鳩原氏は燧岳へ出かけた。草場氏は今日入山する小島、横尾両氏を山の鼻までお迎へに、藤村、内田、彼の友人菅野はムジナ沢から至仏へ。



近年とみにスキーヤーの御目にとまった至仏山は鳩待まで車で入れる便利さが手伝い山頂付近など正に冬のスキー場、ゲレンデに劣らぬにぎわい様である。これらのスキーヤーを尻目に藤村が12分なにがしの鳥人？的早さで山頂から鳩待まで駆け下って皆をあったいわせた。夕方、持参の魚釣り道具で皆かわるがわる描川の魚をだまそうとするが一向にひっかからない。やはり毛針ではダメか。

夜、盛大なる夕食、ファイヤー、とっておきの御神酒、これに小島、横尾両氏差入れなるウィスキーが加わる。これは「社会人の常識」というポ

ケットサイズで山の鼻で売っている。実に楽しい、今夜もいい星空だ。

5月4日

フルメンバーで至仏を経て笠越えの縦走。柳平から直に尾根に取りつく。アイゼンなどつけて楽しんでいる者もいるが、どっちでもいいようだ。至仏からスキーを着けるもの3名、小至仏までは楽にとばす。笠の手前で内田、菅野が横道へそれ、大分遅れた事もあって、笠山頂で大休止。湯の小屋へはまだまだ長いルートをとどる。やがて雪は消え岩桜やコブシの美しい花が目を楽しませてくれる。ことにコブシの花の白さは夕暮れせまる時の心のあせりさえやわらげてくれた。湯の小屋へ着いたのはもうかなりいい時間になっていたが鳩原氏は最終バスをとらえ再会を期して帰っていった。残りの者は空地に設営、盛大なる残飯整理で最後の一夜を送る。ボロボロの小屋がけの湯につかると今回の山行の疲れは全部溶け出し楽しさだけが全身にゆき渡るようであった。一句掲載「はいったり出たり、はいったり、あーいいないいな湯の小屋の湯かな」？

(反省)



先輩諸兄に、特に内田氏の努力によって、第1回のOB合宿なるものが行なわれた。参加人数や日数を考えて、5つの案から本コースに決った訳だが、1日の強弱のリズムがバランスよくとれたと思う。欲を張ればもっと多くのコースをとれたと思うが、天候を考えれば、今回の様な所に落ちつくのではないだろうか。今回はすべて晴天に恵れ、快い山行ができた。

## 北 ア ル プ ス

8月12日～8月16日 須藤他一名

12日 ①

桐生(8:46)~~~~松本(14:10)~~~~新島々(16:10)

13日 ①

新島々(6:30)——乗鞍(9:45)——(12:15)上高地(13:00)——一の俣小屋(17:00)

14日 ②——①

一の俣小屋(5:30)——(7:00)槍沢小屋(8:00)——(11:30)殺生小屋(12:30)——槍岳小屋(13:00)——中岳(15:00)

15日 ①

中岳(4:30)(7:00)——(11:30)北穂小屋(12:30)——穂高小屋(15:30)

16日 ①

穂高小屋(4:10)(7:25)——(7:55)奥穂(8:15)——前穂(9:50)——(12:00)岳沢ヒュッテ(13:00)——上高地(15:00)

12日

新島々まで来てみたが上高地までのバスが不通(昨夜の集中豪雨のため)駅で一夜を過ごす。予定では上高地へ行くはずであった。

13日

4時起床したがバスがでずまで待つ。上高地線は不通だったので乗鞍経由になる。乗鞍頂上では風が強かったが晴れていて遠くの山がはっきり見えた。これから登る槍ノ穂高や木曾駒なども見わたせた。頂上附近では夏スキーを楽しんでいる人もいた。これほど晴れたのはひさしぶりのことだ。乗鞍へのこの予定外の行動も景色が非常に美しかったためむしろよかった。上高地から歩き始めた。一の俣小屋まではいくつも小屋がありごく普通の道である。上高地では焼岳、穂高などものすごくはっきり見えてまるで我々を招き入れてくれるかのようだった。焼岳では白い煙が出ていて少し不気味な感じがした。

14日

槍沢の登りがだらだらと続き非常にきつかった。霧がでていたので余計にこたえた。途中には



雪溪があり、気分をほぐしてくれたが寒くてじっとしていられなかった。殺生小屋でラジウスをたき砂糖湯を飲み食事をした。午後はカラッと晴れた。槍岳小屋からは尾根歩きとなりいくらか楽になる。中岳に着いた時遠くに入道雲、雲海ができ空は真青で非常に美しかった。霧のため槍岳頂上に行かなかったのが残念。水は雪どけ水を使う。朝になったら雪が氷ってしまい水がなくなったので弱ってしまう。尾根に出ると小屋以外は水がないので苦戦した。中岳にちょっとあるだけだった。(雪溪が残っていたので)

#### 15日

朝やけ、それに続く日の出を拝んで出発する。南岳小屋からはものすごい岩場となる。雨や霧の場合を想像すると非常に危険な岩場である。またキスリングの大きいのもよくない。穂高小屋について一安心した。それまでは一寸でも気が抜けなかった。しかしこんな危険な所でも人が列をなしていたのには感心した。水が途中できれてしまい、こちらの方でも苦戦する。昼飯は北穂小屋で水を買って食べた。

#### 16日

奥穂は穂高小屋のすぐ上であった。ここはものすごく景色がよくあらゆる山が見えた。一日中見ていてもあきないほどだった。前穂はピストンをした。上高地からここまで晴れていたせいか迷うような道はなかった。それに人の後をついて行けば自然にこられるようだった。前穂からは一気に下り上高地へついた。最後になって気がゆるんだせいにかついにバテてしまった。全行程すべて人、人で山の他に人も見に行ったのではと錯覚におちいる。全行程晴れていたのも幸運だった。特にその前日までは集中豪雨だったので。

## 北 ア ル プ ス

8月2日～6日 上山

2日 ● 富山(11:00)——室堂(13:00)——雷鳥沢(14:00)□

3日 ◎←→①←→● □(5:00)——(6:45)剣御前小屋(6:55)——(10:10)雄山(10:30)——(11:20)一ノ越(11:10)——(12:10)浄土山(14:35)——(15:35)獅子ヶ岳——(15:55)ザラ峠——五色原(7:25)□

4日 ①←→◎←→● 五色原

5日 台風・五色原

6日 ①←→◎ 五色原(5:05)——狩安峠(6:35)——(7:20)平の小屋(7:30)——(11:30)黒四ダム(12:03)——大町~~~~能生

2日 研究室の合宿で能登に行ったので、この帰りに立山に行くつもりで、富山で研究室の連中と別れる。バス等の運賃は高い。天候悪く明日の天気もよくないらしい。バスから見る外の



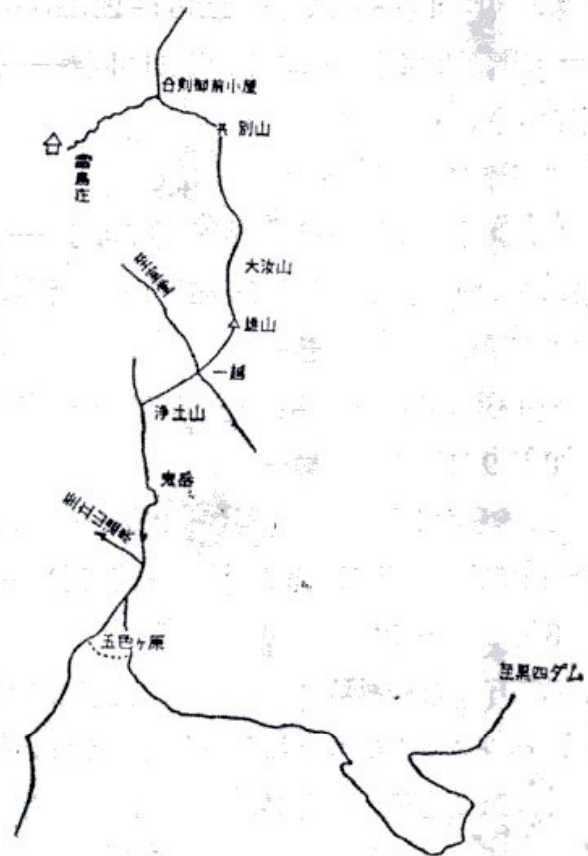
景色まで寒々としている。室堂でバスをおりたとたん大きな雪渓があるのには驚かされる。室堂で入山届けを出し雷鳥沢へ。風が強くテントがとばされそうになる。

3日 やはり天気は良くない。予定では立山には登らず五色ヶ原に行くつもりであったが、昨日ここにテントを張ったために、立山を縦走して五色ヶ原に行くことにする。日曜日のためかたいへんな人である。街の中にいるようなものだ。トレーニング不足のためかバテル。腹は減るのだが、めしがのどを通らない。やすみながらゆっくり行く。一ノ越からはそれほど多くない。体調が全くおかしく、やっとの思いで五色ヶ原につく。ザックの上に腰かけたままでテントを張る。夕食は作ったが食べたくないのもそのまま寝てしまった。

4日 相変わらず何も食べたくない。台風が来るらしいが小屋が近くにあるのでここで沈殿とする。カメラを持って黒ユリを見つけに出て行く。すぐに見つかる。きれいだ。人はよく、思ったほどきれいでないと言うが、やはりきれいだ。夜になってもまだ何も食べられない。

5日 体は少し良くなったが天候は最悪。とんでもない天気だ。テントの修理のために出てみてもまともなテントは一つもない。もっとも、ガスで見えるのは2～3張しかないが。3度目の修理に出た時は隣のテントがつぶれたとこだった。何やら中でぶっくさ言っている。5回ほど修理に出たが、めんどうになって寝ることにした。時々テントのスペースが風で極端にせばまって顔にへばりつく。

6日 台風は去ったがこれからの天候も良くない様なので下山することにする。かぜのため少々めまいがしたが、平の小屋あたりから良くなる。黒四までは意外に早く着く。今日は比較的人が少ないと喜んでいたので、黒四に近づくとしたがつてやはり多くなる。トロリーバスは高い。扇沢からのバスは満員にもかかわらず、小生の隣には誰も来ない。大町に着いて鏡を見たら来ないわけだ。赤毛のボロボロのシャツを着た男がこっちを見ていた。佐渡に渡るために今夜は能生にとまる。





## 南アルプス縦走

8月5日～9日 松田, 堀江, 他2名

8月5日～6日 ①→◎→●→◎

桐生(18:46)~~~~八王子(22:50—23:20)~~~~辰野(03:23—04:45)~~~~伊那大島(06:27—07:00)  
== 梨原(08:40)——塩川小屋(11:40)——五合目(15:45)——三伏峠(18:15)——三伏小屋 T. S  
(19:05)

8月7日 ◎→①

T. S (06:50)——鳥帽子岳(07:45)——小河内岳(09:30)——大日影(11:30)——高山水場  
(13:45)——荒川岳前岳(18:05)——荒川小屋(19:30)

8月8日 ◎→●→①

小屋(08:35)——大聖寺平(09:05)——広河原 T. S (13:25)

8月9日 ◎→●→①

T. S (04:40)——小渋湯(08:30)——湯オレバス停(08:55—09:10)——伊那大島(11:01)~~~~辰  
野(12:55)~~~~八王子(17:28)~~~~高崎(20:09)~~~~桐生(21:54)

8月5日～6日

八王子から中央線に乗ったが、荷網は全てキスでうめられ、一車中にピッケルのついたもの4つ、ヘルメットのついたものも同数くらいあった。H氏2名はうまく座われ、ぐうぐう寝ているのに、M氏とK氏は席がないので、車両を見て廻ったが、空席などない。しかたなしに、入口の所で文献をバラして横になる。大島からのバスは、道路に穴があいているために、梨原までしかゆかず、そこから塩川小屋まで歩く事にあいなった。標高1700mからは急坂になり、2560mまで約25°の勾配である。2200m付近で雨に見舞われ、そこに T. S に適する所があり、また皆疲れているため、ここを T. S にするかと議論したが、結局予定通り、三伏峠まで行くことにした。しばらく行くと豊口からの道と出合い、最後の力を振り絞って峠に行く。峠のガレ、向かい側の谷川、夕日、峠を見て、方向感覚を新たにす。T. S がなかなか見つからず、H氏が荷物を置き、さがす。20分位してもどって来てH氏にリードされて T. S に向かう。途中、尾根で夕日を楽しむ5人位の人に会う。我々もできれば、そういう余裕を持ちたいが、これから、テントを立て、飯を作らねばならない。

8月7日

ほぼしんがりに T. S を出発。今日は稜線のせい、昨日よりも皆調子が良さそうである我々の縦走の第1の頂、鳥帽子に着く頃は雲も切れ、割と見通しがきく。東よりの南東に富士、北に塩見、仙丈、駒ヶ岳、南に小河内、赤石、兎岳の展望である。鳥帽子を下山する頃に、また雲が



出始めたが、第2の頂、小河内岳に着く迄には、切れてくれ、小河内岳からは間近に荒川(中岳、悪沢岳)岳がそびえ遠く雲上に中央アルプスが見える。大日影山をまき終えた處に休む。その時に太陽に日がさがかかっているのに気がつく。お花畑を通過し、ガレのすごい荒川岳を東に望みながらやがて高山裏 T. S に到着。他の隊はここを T. S とする様子であったが、我々は、明日の予定を考え、予定通りに荒川小屋まで行く心構えで帰る。荒川岳(前岳)への登りは、小石場の直登であり、2460m から 3000m まで、約  $23^{\circ}$  の登り。登り着いた所が絶壁、まわりは、ガスっており、肝をつぶす。少しそのガケ沿いに行くと前岳の山頂に出る。そこから見る中岳山頂は本当に真近なのだが、そこには行かず、直ぐに小屋に向かう。回りが暗くなった小道を通っていると、クロユリの散在しているお花畑に出、H氏がカメラを向ける。P.M7:30 にやっと小屋に着き、余りにも我々の歩みの鈍いのには小屋の番人が驚く。またもや、しんがりである。この日は余りにも遅すぎたので小屋宿りとした。素泊り、お一人様 450 円也。

8月8日

留まっているテント数個あり。空は非常にガスっていたが、小屋を出発。出発して、まもなく、小降りになり、やがて風も強くなり、雨も強くなる。これは前岳の北側の屋根をまいているために局所的におこっている風雨だと思って大聖寺平迄

行って見たが、相変わらず、風雨共に同じである。よって大聖寺平にて行動をどうするかを議論する。K氏は絶対に予定の日に帰らねばならない。また、天候は、明日は今日よりも悪くなる事は、ほぼ確実。二つの決議が出る。(i)また小屋にもどり明日赤石にピストンする。(ii)今日中に広河原をへて、小渋湯あたり迄行く。の二つである。しかし、皆の意見、天候を考慮して(ii)と決定する。途中、大いに雨が降ってくれる事を願いながら山を下る。今迄は計画実行のため、時間に余裕がなかったが、今日は時間も食料も非常にある。またのんびりした事がないので、早いが広河原を T. S と決める。広河原からは、荒川(前、中岳)、赤石岳が雲の切れたときに良く見えた。

8月9日

予定より50分くらい遅れて起床、あわてて飯を作る。とにかく一番のバスに間に合うように道を急ぐ。湯オレで、なんとか間に合いバスの中で濡れ物を着換える。大島では、すぐ電車が出るとの事で、切符も買わずに電車に飛び込む。あわただしい帰路であった。





## 南アルプス（駒ガ岳—茶臼山）

8月7日～17日 宮川，滝野

7日 ○

桐生(5:31)——葦崎(13:20)——駒ガ岳神社(14:10)

8日 ◎

駒ガ岳神社(4:10)——カニモチ石(6:35)——刀利天狗(9:05)——五合目小屋(10:10)——七合目小屋(11:30)

9日 ◎→●

△(4:10)——駒ガ岳(6:10)——駒津峰(7:45)——双児山(8:15)——北沢峠(9:20)——ヤブ沢小屋(12:20)——仙丈小屋△(14:10)

10日 ◎→①

△(7:30)——仙丈岳(7:55)——大仙丈岳(8:30)——伊那荒倉岳(10:50)——横川岳——(12:20)——両俣小屋(13:30)

11日 ◎→●

△(6:00)——大滝(7:10)——中白根沢の頭(9:55)——北岳——北岳稜線小屋(11:30)

12日 ◎→○

△(5:30)——中白根(6:00)——間ノ岳(6:55)——西濃鳥岳(8:25)——濃鳥岳(8:45)——三峰岳(12:35)——熊ノ平小屋(13:40)

13日 ①

△(4:00)——北荒川岳(6:45)——北俣岳(8:00)——塩見岳——本谷山(11:30)——三伏小屋(12:10)

14日 ◎→①

△(4:00)——鳥帽子岳(4:40)——小河内岳(5:55)——高山裏(9:05)——荒川岳コル(11:35)——悪沢岳(12:40)——コル(13:45)——荒川小屋(14:40)

15日 ○

△荒川小屋(5:20)——大聖寺平(5:45)——小赤石岳(6:35)——赤石岳(7:00)(9:30)——百間平(10:20)——百間洞山ノ家(11:20)

16日 ①

△(3:50)——稜線(4:25)——中盛丸山(4:45)

17日 ◎

△(4:10)——日横窪沢小屋(5:10)——大つり橋(6:45)——畑薙ダム(7:20)静岡(12:20)——高



崎(17:30)——(5:55)——兎岳——(5:55)——聖岳(7:20)——聖平(9:00)——上河内岳(11:30)  
——茶臼小屋(12:30)——茶臼岳(13:30)——茶臼小屋

## 7 日

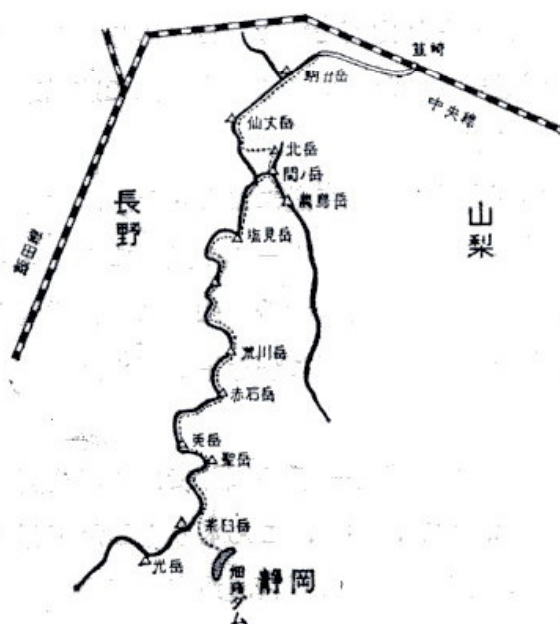
朝の国電ラッシュにぶつかりキスリングをだきかえて汗びっしょりになる。やっそこさっとこ新宿をぬけ出し、高尾から中央線で韭崎へ。駒ガ岳神社では感じのいいバンガローを見つけ、飯を作り早々と寝る。

## 8 日

暗い中をヘッドランプを着けて出発。合宿後なので体の調子もよく、ケッコウ順調なペースで進む。八ガ岳の大きなすそのが下に広がっている。晴れたと思ったら、雲ったり、雨が降ったり、おまけに風も強くなり、全く不安定な天気になってきた。五合目をすぎると岩場となり、横バイ、鉄クサリ、ハシゴの連続で少々バテだす。どうにか岩場を通りすぎ、七合目手前でどしゃぶりにやられ小屋ににげ込む。このどしゃぶりのため小屋は、ギッシリ満員、最後には身動きするのがやっとの状態。

## 9 日

満員の小屋からはじき出されと、すっかり晴れていて、星空や下界の灯がとてもきれいだった。しかし登るにつれガスがかかり出し、山頂では強風でとてもいられたものではない。しかしここで、初めてライ鳥とやらに出合う。ガタガタとばし標高差1000mを一気に北沢峠まで下る。しかし北沢峠からはまた1000mの登りであり、ゆっくりと森林帯の中を仙丈の登りにかかる。全然展望のない、いやな登りで、またまたドシャブリにやられ、ヤブ沢小屋へにげ込む。しばらく居すわったがなかなか止みそうにないので仙丈小屋めざして出発。バテたすえやっ和小屋に着き、びしょぬれの服を脱ぎ飯の用意ができた時、何とか女子校のとんだアクシデントがあり、宮川氏は連絡のため北沢峠までまた下ることになり、食べるものも食べず、ガスと強風の中を走り降りていった。結局小屋へ帰還したのは22時近くであった。



## 10 日

朝はあい変わらずガスと強風。大仙丈を下るころより序々に晴れ出し、鳳凰三山などが見え始める。すっかり晴れ上り初めてすがすがしい気分になる。森林帯中唯一の展望のあるハイマツに囲まれた岩峰からは仙丈、北岳の大きな姿にお目にかかることができた。野呂川越より急降下で両



俣小屋へ。

#### 11日

1時間程左俣沢を歩くと、水量の豊富な大滝に出合う。ここから尾根の取り付けまでは、ものすごい急登である。ガスがだんだん雨になり、激しくなってきた。登るにつれ、激しくなり目などあけていられないほどであり、北岳山頂はただ踏んただけで、小屋へかけおりる。また小屋の混雑も駒ガ岳の七合目小屋以上であった。この日、北アルプス、北陸方面は集中豪雨で相当被害がでたことをラジオのニュースが告げていた。

#### 12日

例によってガスと強風、いささか二人共ふてくされながら出発。1時間程してチラチラ光がのぞきはじめ、濃鳥ではすっかり晴れる。六日目にして初めて見るバツグンな景色。雲上に浮かぶ富士、はるかに塩見、荒川方面、目の前には大きな間ノ岳、その奥に駒ノ仙丈等々。間ノ岳に引き返し頂上でしばし昼寝。足どり軽く屋根を下り、熊ノ平小屋へ着く。感じのよい小屋で、なんといってもシュラフにもぐりながら、濃鳥の姿が赤く染まってくのが見てられるのである。

#### 13日

満天の星空の下に小屋をとび出す。ここから北荒川岳までは、お花畑が延々と続いている。北荒川からの塩見のながめはすばらしく、またガレ場がすっぽり下まで切れ落っている。塩見の登りでガスられ山頂ではガタガタふるえながらパンをかじる。下ると晴れていて結局山頂だけにガスが巻いていたのである。本谷山で駒以来同じコースをたどった人と挨拶をして別れる。

#### 14日

小河内岳の下りで道にまよったが、すぐ引き返す。高山裏まではお花畑があっちこちに点在している。荒川岳のカールの登りでダウン寸前で、前岳と中岳のコルに出る。ここにザックを置き悪沢岳をピストンする。山頂にはN電気山岳部のお兄ちゃん達20人位が山頂を占領、ちょっと写真をとり、すごすご引き下る。またカールをガタガタ下り荒川小屋へ。

#### 15日

快晴、本山行中一番の天気である。快調に赤石岳に着く。目の前には荒川三山その奥に南ア北部の山、北ア、中ア、こんもりとした恵那山、聖、遠くに富士が、すべて雲の上に浮び上っている。3時間程山頂で昼寝、最高の気分である。のんびりと百間平を通りすぎ、早々と小屋に着く。本山行中最もすばらしい一日であった。

#### 16日

初めて4時前に外にとび出すことができた。快調なペースで兎、聖を越える。聖山頂には人間がうようよ、スタコラ山頂を後にして聖平へ向う。我々が下り始めるとすぐ山頂はガスられる、我々の判断は正確であった。聖平への道はアザミがいっぱいあり短パンの宮川氏はしかめっ面。また倒木もかなり多く苦戦。上河内岳特有の二重山稜の西稜を登り、西肩に着く。ザックを置き



ピストン。茶臼小屋でザックを置き、タフネスを誇る宮川氏光岳を目ざしてかけ足。小生のんびりと戸田岳で昼寝。

17日

いよいよ最終日、家へ帰れる日である。電池の終りかけたヘッドランプを着け小屋を出発明るくなるころより、いよいよ急降下の開始である。ザックが軽いので走り下る。9:55に乗るつもりであったがバスが、7.25に間に合いそうになったので、いっそうとばす。登山靴をはいたマラソンである。ダムに着くころはすっかりグロッキー。またバス停までマラソン。結局始発のバス(7:25)に間に合うことができた。11日間の山行を終え、4時間半程バスにゆられ、ジリジリ焼つくような暑さの静岡に着く。

## 南 八 ヶ 岳 縦 走

11月1～4日 松田・小堀 ほか1名

11月1日 ①

桐生(22:17)~~~~高崎

11月2日 ①

高崎(2:00)~~~~小諸(7:00)小海(7:30)——稲子湯(9:00)——ミドリ池(10:55)——本沢温泉(12:25)——夏沢峠(14:20)——硫黄岳山頂(15:40)——(16:00)石室

11月3日 ①

石室(9:00)——(9:40)横岳(10:00)——(11:45)赤岳(13:10)——中岳(13:55)——(14:30)阿弥陀岳(14:50)——(15:45)赤岳(15:30)——(17:10)キレット小屋

11月4日 ①

キレット小屋(7:00)——(8:05)権現岳(8:45)——(9:35)青年の家(9:55)——(10:15)編笠山(11:35)——(14:55)小淵沢(15:08)~~~~(10:00)桐生

11月1日

紅葉の山を求めて土曜日の最終列車は山行きの仲間達で混んでいた。個人山行に向うワンドルの仲間10人位の大部隊である。夜のない高崎駅は列車を待つ人達で混乱している。

11月2日

信越線の普通列車は10時間もおくれて出発、後発の急行列車がどんどん出発していくのを横目に見てため息をつくことしきり。しかし同席の女の子達と話しているうちに列車は小諸まで来てしまう。小海線は朝もやのかすむ佐久盆地を小海へと向う。朝日の中にしだいに浮んで来る浅間山や八ヶ岳の山姿は陰影のくっきりしたきれいなながめだった。車窓に感動しているうちに「山の駅小海」につく。バスは駅前から稲子湯登山口まで1時間弱で行く。秋晴れの真青な空にくっ



くりと姿をみせている天狗岳、硫黄岳をめざして出発。夏沢峠までの登りは夜行出発睡眠不足のためか、後半疲れを感じた。途中ミドリ池と言う林間の小さな池畔で昼食をとってゆっくり登る。夏沢峠から硫黄岳への登りはきつかった。冷い風が頬をうちつける岩のゴロゴロする急坂を登りつづけた。ガスのため山頂からの眺めはきかず即、石室をめざして下る。石室は超満員だったがなんとか席を確保した。

11月3日 ①

硫黄岳山頂よりの展望が欲しくて早朝、松田、小堀は再び硫黄岳に登る。朝の展望はすばらしかった雲海の上に島の様に浮ぶ山々、北アルプス、南アルプス、中央アルプス、そして富士の雄姿が手にとるようであった。赤岳へむけての出発はゆっくりだった。30分程で横岳山頂につく。赤岳への登りは急であったがいっ気に登れる短い行程である。山頂からは八ヶ岳連峰を一望の下に見わたした。秋晴れの青空に遠くアルプスの山々を望みながら昼食をとる。阿弥陀岳へのピストンは駆け足であった。キレット小屋への道は夕陽の長い影と共にあった。夜はいっしょになった女の子達と「反体制運動論」や「登山論」などをおこなった。

11月4日

山小屋の窓から遠く雲海の上に富士が顔をのぞかせている。涼々しい朝の涼気につつまれて出発する。山も3日目になると体調も段々よくなってくる。権現岳へはいっ気に登りつめた。南アルプスの連峰が正面におしかかるようにあった。同行の女の子達とスナップ写真を取りあって編笠山へ向う。起伏のない平坦な山道は「歩く事」に楽しみを感じさせてくれる。編笠山からの下りはいっきに小沢まで下りきる長いだらだらした下りである。女の子達と雑談しながらの下りだったが列車の都合で都中から別れ急ぐ。つらい別れだったが……急に足の痛みを感じだしたが……。小海線の列車の中で3日間の縦走路をながめながら3人で下山のウィスキーを飲み桐生へ向う。

## 甲 武 信 岳

9月12～14日 長 谷

9月12日 池袋——峰口——二瀬(10:05)——川又(11:40)——赤沢出合(14:15)——赤沢分岐(14:35)——柳小屋(16:40)

9月13日 柳小屋(6:00)——干丈の滝(7:25)——甲武信岳(12:00)——笹平避難小屋(13:20)

9月14日 笹平避難小屋(5:05)——西破風(5:40)——東破風(6:10)——雁坂嶺(7:10)——雁坂峠(7:30)——上広瀬(10:45)——塩山——新宿

12日。二瀬から林道をてくてく歩いて川又部落に着く。川又からは沢を渡り森林軌道を歩いて行く。入川に沿った軌道で、今は軌道車は走っていないようである。この軌道で赤沢に出るま



で5回くらいへびに出会い、一時は引き返そうかとまで考えてしまった。こわごわ進むが天気も良いせいか、眠くなってしまい。へびの恐怖もあったが、休んでいるうちに眠ってしまった。30分くらいであっただろうか。赤沢出合には昔の飯場が残っており、道が途切れてしまっていた。右側のガケがくずれた所を登って行く。すぐに道が現われて、つり橋を渡り、わずかに登るとまた軌道に出あう。この軌道はほとんどくずれ、こわれてしまっている。赤沢分岐で軌道とも別れて、小さな登り下りが続けて行くが、いつまでたっても小屋に着かず、道をまちがえたのではないかと思われた程であった。そう思いつつも進むと、やっと小屋にであう。さて夕食でも作ろうかと、ラジウスをつけようとするが、プスプスって全然つかない。あせって燃料を調べてみると、中は石油ではなく、メタがはいっていた。どうしようもなく、非常食があったので、火を使わずに1日は過ごせるし、甲武信岳には有人小屋もあることだと、予定通り進むことにする。

13日 小屋の前の吊り橋を渡り、うす暗い道を登って行く。ここからは、登り下りが激しく、全然おもしろみのない道である。しかし千丈の滝は、道からは全望できないが、疲れをいやしてくれた。ここから5時間、本当に静かな道で、さびしくなってしまう程であった。ほとんど人がはいらないらしく、足跡もゴミもなく、奥秩父の静けさを満喫する甲武信岳では曇り空であったため、展望は良くなく、わずかに国師を望めるだけであった。甲武信小屋へと向かい、木賊山へは登らず、近道をして笹平避難小屋に着く。しっかりした造りの小屋であるが風通しはよかった。

14日 毛布1枚しか持って行かなかったため、非常に寒くあまり眠ることができなかった。それ由の早朝出発であった。小屋の裏からすぐ登りつめて行くと、破風山である。ここは岩がゴロゴロした所であるが、奥秩父特有の樹林地帯である。雁坂峠には、前夜行で来たらしい数人の登山者が来ていた。今までの静けさが急に破られてしまったようで、興ざめしてしまった。峠に着いたのがばかに早かったが、予定に従って下山する。急な下りで長かったが、今回の静かな山歩きの楽しさを心に秘めて下山する。今回は、泊りでは初めて単独行であったが、12日、13日にはほとんど人には会わず、すばらしい山の気分を味わうことができた。

## 飯 豊 連 峰

7月18日～20日 藤井幸吉(OB)

(コースタイム) 7月18日 ①

上野(前夜23:50)~~~~(6:14)山都——(一ノ木)——川入(8:00)——(8:35)御沢小屋(10:10)中五十里——(10:50)上五十里——(11:35)横峰小屋(12:55)——(1:25)地藏山(1:40)——最低鞍部(2:00)——(3:20)三国小屋(4:10)——(5:45)切合小屋(泊)

7月19日 ①



切合小屋(7:05)——(9:00)飯豊神社——(9:15)飯豊本山——(11:10)御西小屋(12:00)——(12:55)天狗の庭(1:05)——(1:45)御手洗の池(1:50)——亮平の池(2:20)——(3:35)鳥帽子岳(3:45)——(3:55)与四太郎の池——(4:45)カイラギ小屋(泊, 無人小屋)

7月20日 ◎

カイラギ小屋(6:00)——(6:25)北股岳(6:30)——門内岳(7:20)——(7:45)扉の地神(8:10)——展望台(10:30)——(11:25)湯沢峰(11:55)——飯豊温泉跡(12:45)——沢渡渉点(1:30)——(1:40)飯豊山荘(1:50)——(3:30)長者原——玉川口(6:37)——坂町——加茂(7/21 5:00)上野

(記事) 7月18日

以前からの念願であった飯豊の山に、今年の夏偶然な事からその機会に恵まれ早速、仕度を整えて夜行に飛び乗る。コースの選択に余裕がなかったのでもっとも一般的な山都から入って小国方面へ抜けるコースを取ったが、よかった。

早朝の山都駅に降り立った登山者はたったの3名。バスの発車が遅いので、Y氏(未知の人)の提案によりタクシーで川入まで入る。途中、一の木部落にて登山者カードに記入する。山都から川入まで車で50分位。各自見知らぬ間柄であるが、山深いいためか結局同行となってしまう。御沢小屋のところで右手の方に進むと勾配が急な登りとなり樹間の山道と、夜行のため3名共非常に疲れ、真夏の太陽を避けるため小屋にて大休止する。暑い時に飲むお茶は又甘味いものである。

水場は10分位離れているが僅少、ここから地藏山に至るまでの道は陣竹の中で雨水に深くえぐられている。非常に蒸暑いがすぐ山頂に辿り着き三国岳、飯豊山などが見えて、小屋は近くにある。鞍部まで下り、登り始めたら速度は遅くなり休息时间の方が多くなってしまう。岩場の横下20m位の処に水場あり。やっとのことで三国山頂(小屋)に着くが、大日岳や本山の方はガスで見えず、遠くで雷が鳴っている様子である。ここからそれ程登り降りのない稜線沿いの道となり、沢山の高山植物を眺め、遠くの白い雪渓の豊富さに驚き、先程の疲れも忘れて、やはり来てよかったと思う。特に飯豊に多いと云われるヒメサユリは一本の茎で4~5ヶの花を咲かせてその薄桃色の花卉はとても印象深いものである。ガスで辺りが曇くなり、疲れも出てくる頃、やっと今夜の泊り場である切合小屋に辿り着いた。小屋は永久建築で水場はすぐ下の雪渓であるが、その周囲にはキスゲやキンボウゲ etc の植物が一大群落を成している。歩いている時、汗が気になって冷たい雪渓で体をふいたらさぞ気持ち良いと思っていたが、雪渓の端から流れ出る水は冷たく、一分間たりとも手を入れていられない程であるが顔を洗ったらとてもさっぱりした。夕食後、小屋番の人2名と他の登山者3名と我々の3名とで、山についての話をする。夜も更け、外に出てみたら満天の星であり、とても美しいものである。肌寒かったが風もなく、いつまでも見つめていた。

7月19日



早く起きて日の出を見る。小屋の周囲はお花畑になっており、量も種類も豊富であり非常に良い処である。ここから残り咲きのシクナゲ畑を過ぎ、大きな雪溪に沿って行くと、草履塚で、岩屑の道になると飯豊神社も近くなる。山頂はここから西方15分のところにある。大日岳やカイラギ岳への縦走路が一望出来る。山頂から一寸下った所にある雪溪の端で休息するが雪の解けた後は若芽が出ていたり、可憐な高山植物が咲いていたりで、詩情を感ずるのに充分である。

水を補給し大日岳への分岐でもある御西小屋前で昼食とする。なだらかな草原でのんびり昼寝をしたくなる処である。大日岳まで往復したかったがカイラギ小屋までの行程を考えて断念する。雪溪を横切り、美しい高山植物の中を歩いて行くと陣竹があり、それが終ると急に開けて、カイラギ岳が望まれ、辺り一面お花畑である天狗の庭に着く、絶好の T. S であろう。時間に余裕が無いのが非常に残念である。次第にガスがかかって、行く手が見えず斜面にへばりついている雪溪の上端を歩くのであるから一寸危険である。慎重に進む。ガスの中を黙々と御手洗の池や亮平の池を過ぎると鳥帽子岳の手前で急にガスが切れ、今日歩いて来た稜線が現われたが北面は残雪に大部分被われていた。鳥帽子岳を下った処の与四太郎の池を右に見る鞍部は良い T. S である。カイラギ岳へ登る途中30名位の遭難救助隊とすれちがい、山頂を下る頃には今夜の泊り場、カイラギ小屋が見えて来てテントの囲りでの夕食の仕度の叫び声が聞えて来る。無人であるが頑丈で仲々良い小屋である。ブヨに悩まされながら夕食を作り、夕日に映えた積乱雲を目前にしながら食事をする。カイラギ岳の下りから小屋のあたりまでヒナウスエキソウが沢山あるが、ガスがまいてしまって。余りにもブヨが多いので小屋を閉め切り殺虫剤を噴霧して、シュラフに入ったためか暖かったが夜半外に出て見たらさすがに肌寒く、星も昨日ほどははっきり見えなかった。

7月20日

起きた時には大日岳など見えたが小屋を出発する時は、ガスがまいて視界は 10m 位。北股岳からの飯豊連峰を見たかったが残念である。這松と熊笹の中を黙々と歩くが門内岳付近で危うく道を間違えるところであったが一瞬ガスが切れて助かった次第。門内岳小屋は半地下式であるが湿気を感じず。扇の地神にて陽がさして、カイラギ岳や門内岳が見え出したので休息する。ここから主稜と離れて梶川尾根を下るのであるが、梶川峰まではなだらかな草原状で処々にキスゲやヒメサユリが咲いていて仲々良い処である。秋には草黄菜が見事なことであろう。尾根を下るにつれて次第に急になり樹林のため視界はきかず、ただころばない様に下るのみ。展望台は一寸山道から離れているがカイラギ滝を見ることが出来る。又石コロビ沢の雪溪が主稜まで伸びている様子もわかるだろう。湯沢峰にて昼食とするが小雨となって来たので最後の最大の急坂を慎重に下る。足元に湯沢が見えている程である。雨の時や雨後などには要注意。飯豊温泉は跡のみであるが30分程行くと立派な飯豊山荘があり近年にはここまで車道が通じるとのこと。先程の下りで足を痛めたのが長者原までの道も辛くなってしまったが無事この山行を終える。丸森尾根の方が容易であろう。帰京の途中、加茂の伊藤君宅に寄る。夕食を御馳走になり、翌朝下宿に到着した。



終りに、一般に飯豊連峰は残雪と高山植物の時期が一番良いであろう。急に出来た暇を利用して2泊3日で歩いたが、もう一日増したら余裕を持って味わえたのではないだろうか。又急なため充分な装備を準備しなかったことを反省し、山行中、行動を共にしてくれた東京の柴野氏と埼玉の矢島氏に深く感謝致します。

## 佐 渡

8月7日～9日 上山

7日 ◎ 能生——直江津(9:30)——小木(12:10)小木□

8日 ◎ 小木□

9日 ◎ 小木(7:00)——新潟(11:30)——桐生

7日 北アルプスの帰りによる。昨日まで涼しかったのに今日はすっかりむし暑い。小木港の近くの大崎神社に百円を払ってテントを張る。もう動く気がないのでここで定着。気が向いたら帰ることにする。付近の子供と遊ぶ。

8日 子供と泳ぎに行く約束だったが天気が悪くてだめ。子供に、「おっちゃんに来てから天気が悪くなったよ」なんて言われて、そう言えば北アルプスに行く前に能登でもそんな事を言われたっけ、なんて妙な事に感心する。しかたないから観光船に乗って沢崎まで行ってくる。沢崎は美人の産地だそう。しかし隣の部落が美男のとこだそうで残念。海岸線はチマチマとした美しさがある。夜、子供と花火をやったり、スイカをパクツク。

9日 昨夜ものすごい雨が一時あったと思ったら北陸地方は大雨だったそうで、北陸線信越線は不通。さいわい上越線は動く。どこかに下車して一泊しようと思ったが、雨がふっているようなのでやめて桐生に戻る。

## 佐 渡 旅 行

7月31日～8月10日 海老原、長谷、山口(昌)、太田

31日 ◎→● 小出(12:11)——新潟(14:40)——学校町浜□

1日 ◎→① □——新潟港(13:00)——両津港(15:25)——両津(17:25)——白瀬(17:50)

2日 ● 白瀬(8:25)——虫崎(9:05)——北小浦(9:55)——北小浦西光寺(11:50)

3日 ① 北小浦(7:55)——見立(8:13)——(9:14) 鷺崎(10:00)——(10:28) 弾崎(10:55)——藻浦(11:45)□

4日 ①→● □(12:10)——(12:45)二ツ亀(13:11)——(13:27)賽の河原(13:50)——



願(14:08)□

5 日 ●→◎ 停滞 □ ⇄ 大野亀

6 日 ◎→● 願(10:05)——(10:55)岩谷口(11:15)——(11:50)関(12:30)——矢柄(13:20)——(13:20)大倉(13:45)——小田(13:57)——石名(14:47)——(14:30)小野見(14:40)——北田野浦(5:05)——高下(13:13)——(15:25)入崎(15:40)——入川(16:00)

7 日 ●→◎ 停滞

8 日 ◎→① 入川(9:10)——(10:20)相川(10:30)——(11:45)両津(12:30)——新潟港(14:55)——学校町浜□

9・10日 ① 学校町(13:05)——(13:20)新潟駅(14:46)——(16:19)長岡(22:35)——(2:35)新前橋(5:51)——桐生(6:34)

31日 夏合宿のあと、終ったその日から、小出まで来たんだから帰るのは損と佐渡へ向かう。北へ向う汽車の中で夏合宿の草場さんの悪影響で、すべてのこと、おかずの多い少ない、テントオーダーその他もののことをアミダクジなるもので決めることに決定。まず第1のアミダでリーダーE氏、食料係N氏、渉外係Y氏、会計記録雑役その他すべて前三役に入らないものの係O氏と決める。

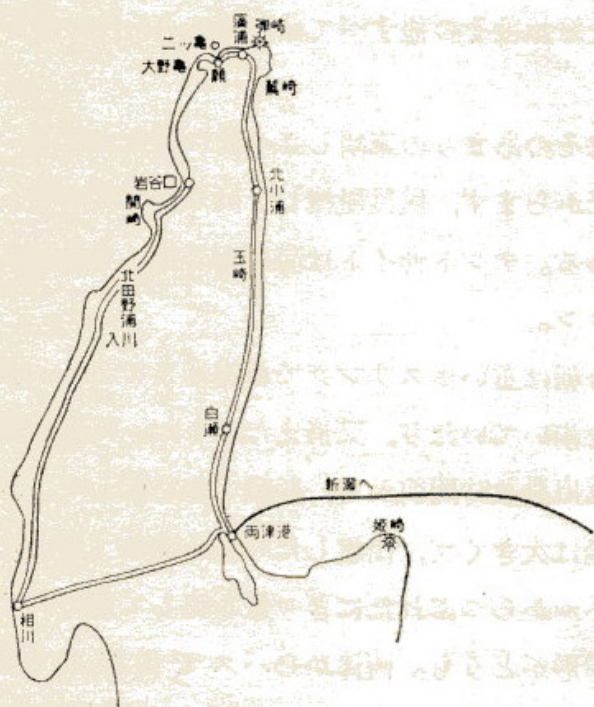
新潟はやはり裏日本随一だけある街なみ。山ザルはそのあまりの素晴らしさの前に頭を上げることもできず。まあこんなきたないかっこうじゃね。だからまず、風呂屋捜し。同じ料金では申し訳けない。学校町の浜辺のはるかかなたに島をながめる。テントサイトは海の家の後。夕食はさばのからあげ。デザートはモモ。昼食は駅弁とラーメン。

1 日 昨日はバスで学校町浜まで来たのだが今朝は重いキスリングで新潟港まで歩く。何ぞか、リーダーだけ違う道に行く。時々ずっと先きを歩いていたり、又消えたりした。だが新潟港にはちゃんと居た。どっちがどっちだか……。Eは出発数時間前から、船酔いを心配して、落ち着かない。小雨も降り出したからよけいである。船は大きくて、出帆したら空も晴れてきた。佐渡に近づくにつれ夏の光りがもどる。船中でコッヘルからつぶれたにぎり飯を出して食いつく。渉外係がにぎったにぎり飯はなんとなく変。うまいが形がどうも。両津からバスで白瀬まで向う。リーダーが聞き込みから決める。まあ、計画はまったくない。だいたい8日～10日位桐生に帰ればいい。白瀬では、どうしても屋根のある家に泊めてもらおうとリーダーがはりきってなかなか飯にならない。公民館は管理者がどこにいるかわからず、もういいよと三人が言い出す頃、リーダーが屋根つき家を見つけてくる。その家で風呂をもらい、たたみの上に寝ることもできた。朝食は、イカとピーマンの天ぷら、昼食はにぎり飯、夕食カレーの煮物。デザートはトマト。

2 日 昨夜の人は両津市白瀬の稲村くらさんである。大変親切にしてもらい、涙を流して感謝したいほど。出発の時、なすやジャガイモをもらった。しゃもじももらった。以後大変役に立つ。このお婆さんと記念の写真を撮ろうとした時、服を着かえて出て来た。やはり、このお婆



さんも女性であった。舗装されてない道の脇で、どろとほこりまみれになっている何のへんてつもない家の中に、何も知らなければ脇目もくれないそんな家の中に、観音さんはいる。バスに乗る前に降り出した雨は止みそうもない。バスの中には我々よりかっこうのいいハイカーの一団もいた。虫崎に着いた時にはもうどしゃ降りである。その中をハイカーの一団の後から歩き出す。北小浦に着いたとたん郵便局に飛び込む。ここでEは7・8枚のハガキ書きに熱中。食料係と雑役係は家に電話して、久さし振りに家の人の声を耳にする。この離れた島からも電話がかかる。百円位安いものである。雨がひどくめったに佐渡ではこんなことはないそうであるが、そのために学校かお寺を捜す。まず学校へ行ったが、予期どうりだめであった。局長から、若い女の先生一人だからねえ……と言われていたのでまあしかたないこと。次にお寺さん。ここは心よく承諾してくれた。しかも、間髪入れず「ヨオでございます」と。お寺さんのお名前は西光寺。郵便局より三・四軒の所。北を向いて左側にあります。東はすべて海。朝食は卵。昼食はさばのみそ煮とくじらのカン詰。夜食はなすの料理もの。



3 日 お寺の掃除をすませて出発。道は広く自動車も通る。あと少したてば舗装されてしまいかも知れない。きのうとはうって変って、今日は夏の光が照つける。海も灰色から真青である。波静かな海岸線である。これが、鷺崎まで続いている。鷺崎部落は海に向って開いているようである。今、さかんに民宿の新築がされている。弾崎の北はもうない。海の向うはシベリアである。ここには灯台がある。例のごとく真白。ここから藻浦へは灯台の横の道を行くとよい。我々は二ツ亀への道から、田んぼの中に入り込んだため、右往左往。弾崎からほんの10分もかからないところを50分もかかった。午後は海水浴。魚釣り。フグがよく釣れる。釣ってはコッフェルに入れ、いっば

いになれば海に放す。またそのフグが釣れる。いつしか飯ができ、夜になる。黒い海と空とを分けるイザリ灯が燃えだす頃キャンプファイヤー。朝食はカン詰め。昼食不明。夕食はカレーライス。

4 日 午前中、昨日の午後と全く同じ。釣れるのはフグばかり。飽きた頃出発。あまり急にからだを焼き過ぎたので、ザックが背にこたえる。買い出しした商店の娘さんがきれいだという食料係長の声に、その商店でアイスクリームやお菓子など買って長く居すわった。そのうちじいさんばあさんが出てきて、「まあ、そんな重い荷物しょって……」とばあさん。「まあ、若い



うちは体の鍛練にいいじゃろう。軍隊がないんだから。」とじいさん。藻浦から二ツ亀へは石ころの海岸線に行く。藻浦あたりからの二ツ亀は、静かである。佐渡では亀が甲羅を干しているような型の岬や島を一般に亀という。まったく言い得て妙である。ところで二ツ亀は海水浴場と化している。どこかの海水浴場とかわらないミーちゃん、ハーちゃんがワンサワンサ。賽の河原へは、ここから石塊を踏みながら行く。藻浦から少しの所だが、海がだいぶちがうように見える。波が高くなるにつれ、その青さが増すようにみえる。波がくだけ散るあたりに賽の河原がある。冷え冷えとする洞窟の中に、無数の地蔵尊が祀られている。岩壁を斜め上にぶちぬいたような所から出ると、元の夏がもどって来た。すぐ目の前は願部落である。このさいはての北の海に何を願うのか。朝食はハムとマグロのフレック。昼食すいとん。夕食はまたカレーライス。

5 日 今日是一日中ゆっくり。今までもゆっくりであるが、それよりもっとゆっくりくつろぐ。小雨が切れたので、大野亀往復。二ツ亀とならんで外海府を代表するシンボルである。この二つを左右に配する願部落は最高である。午後はまた海のなかで。でもフグは釣らなかった。藻浦で釣りすぎて、エサがなくなってしまったからだ。ところでこの部落の人が桐生の織物工場に出かせぎに行ったと聞いてびっくりした。だが考えてみれば、こうして我々もここに来ているんだから……。夜は二度目のキャンプファイヤーで楽しむ。朝食はさばの水煮ミソピー、五色まめ。昼食は五色まめ、たいでんぶ、姫たら茶漬。夕食はショーコ飯、さんまとくじらのかん詰。

6 日 テントをたたみ、ザックを用意してから、船が二ツ亀の方から現われるのを長い間待った。だいぶ遅れて船で出発。海からの外海府は素晴らしい。小さい船であるが、そのゆれも気にならない。気になるのはいちゃ付く二人。あの野郎、人の見ている前で。

岩谷口から、この旅初めて足をのばす。岩谷口の船付場は砂浜である。ここからはバスの通う道である。関部落の港は写真か絵のように美しく静まりかえっている。ここから少し行くとトンネルがある。中央が高くなっているので、先が見えず不気味であった。このトンネルをぬけた大倉部落で米の買出しを行う。夏合宿の残りの1米2斗升をほとんどたいらげてしまった。このあたりから景色などには目もくれず、ただひたすら歩くのみ。疾風のごとき部落を駆けぬける三度笠を思わせる。小田、石名、小野見、北田野浦、高下、入崎そして、終点入川。ここでリーダー以下食料係渉外係が民宿に泊まるはずであったが、雑役兼会計係がどうしても首を縦に振らず、あえなく海辺で寝ることになってしまった。学校前の海岸は水泳に好適である。でも天気が悪く泳げなかった。朝食は、ソーセージ、ミソピー、しその実。昼食はにぎり飯。夕食は卵丼と山菜漬。ここで久し振りにミソ汁を味わった。いままではとろろが主力。ミソをくれた商店のおばさんありがとう。

7 日 雨のため動かず。手持ちぶさたでもあり、買ってくるかと意見が一致。さっそく週刊誌を買い求める。マンガサンデー3冊、マガジン1冊。よくまあ2週間、1週間前の本を売っ



ているね。そのおかげで連載物が楽しめたが。だが何んと言ってもピカーはジョージ君。誰れかがジョージ君と読み違えて大笑い。まあ、わかるね。夏合宿以来のテント生活なのだからね。朝食はハム、サンマの蒲焼きと辛子でんぶ、昼食は中めん。三時のおやつは羊かん。夕食はカボチャ。今日の夕には再びとろろがつきました。1回分のミソしかくれなかったおばさんもっとください。

8 日 入川からバスで相川へ向う。どのあたりか忘れたが道幅を拡げる工事をやっていた。この波がどんどん北へ拡がって行くだろう。観光で金を集めるには、自家用車が一番である。そのためには、舗装道路が。車の通れる道はもう外海府までもホコリでつつんでいる。相川は大きな町に感じた。いままでだから。相川から両津までバスを使う。両津から新潟駅まで船だし、学校町浜までバスだし、今日はラクチンラクチン。新潟では出発前のときと同じく。同じ風呂屋できれいになり買い出しをして学校浜へ。前と同じ所へ、同じ四人で、同じテントをはって……。よくここまで来ましたね。朝食はさんまのかん詰、ふりかけ、お茶づけ。昼食パン。夜食。これを書く前にたいへんな事を書かなければならない。人間とはこれほどすごいものなのか、はじめて知った。今日は、無事を祈って、夜食をおごることにした。それでキスのサシミなるものを一度もこれまで食べてみたことがないので、どんな味がして、うまいものやらずいものやら、わからないまま、高いのをいいことにそれを買った。飯は普通通りたいたのだが、このキスのサシミも、からあげのさかなも、えらくうまかったものだから、コッヘル一杯たいらげてしまった。ここで一人はその連中の中では一番体重がある男は、それで腹一杯になったが、三人は食い足りないと言い、飯をまたたき始めた。そのために、おかずをけちりながら。そして、飯ができれば、食うは食うは、その恐ろしさときたらものすごいもの。けちったおかずもなくなり、お茶づけにして飯を腹に入る。そして、再びコッヘルをからにしてしまうた。そして、その後すぐに、食事のあとのデザートなどとはざいて、メロンにかじりついた。問題はその後なのでございます。ウーとひとつゲップをしたかと思うと、これが人間の声なのかと疑がわれるような声で、こう申したのでございます。「もう腹が一杯で、下が向けねえー。」なんとこれも私たちといっしょに住んでいる人間なのでございます。私は我が耳と眼を疑がいました。しかし、どうするすべもございません。

9・10日 昨夜がそんなことであったので、午前中は三人の腹をへこますために海へ出る。海水浴場はいっぱいである。はなやかな海である。昨日帰らずにいたのは、長岡の花火大会のためである。そのため、長岡に夜着くように、時間をみはからって、海をたつ。駅は、北陸線などが、集中豪雨で不通になっていたのでは、混雑していた。長岡の花火は、大花火大会の名にふさわしく、素晴らしいものであった。しかし、時間通りに始まらないのには閉口した。そしてリーダーと渉外係は、雨の中、傘もささず、最後まで見ていたとか。日本一という二尺玉の花火はすごかった。この旅の終りの花火は、我々四人のためにあったものである。桐生に着いた時は、翌日の



早朝、6:34であった。朝食は天ぷら、はまぐりのお汁もの。昼食パン。夕食は各人食堂で、うまいものを食う。これで夏合宿以来、21泊22日のテント生活を終る。

## 出羽三山・鳥海山・佐渡

7月26日～8月2日 松田

7月26日～27日 ◎

足利(22:16)~~~~(23:01)小山(23:34)~~~~(5:10)山形(6:60)——湯殿山入口(9:40)——丹生鉾泉(11:20)——湯殿山頂(14:25)——月山鍛冶小屋(17:20)

7月28日 ●ッ風ッ——◎

鍛冶小屋(7:30)——月山山頂(7:50)——仏生池(8:50)——弥陀ヶ原(9:50)——バス停(10:05)——羽黒山(12:05)——(14:45)鶴岡(15:20)~~~~象潟(17:18)——□

7月29日 ●→●ッ風ッ

7月30日 ●ッ→●

五合目(8:30)——白糸の滝(10:20)——五合目(10:45)——(16:00)象潟(16:25)~~~~新発田(22:30)~~~~(23:37)新潟(1:30)——船——両津(3:50)

7月31日 ●→◎

両津——根本待——妙宣寺——国分寺——真野宮——尖閣湾——両津(16:45)

8月1日 ◎

両津(8:30)——白雲荘(9:40)——妙見山(10:30)——二の岳(10:55)——金北山(11:45)——アヤマ池(12:00)——いもりが平(12:55)——研花越(13:50)——笠峰(14:45)——アオネバ峠(15:05)——ドンデン登山口(15:35)——両津(16:25)——船——新潟(20:00)

8月2日 ◎

新潟(22:55)~~~~(3:12)高崎(5:40)~~~~太田(6:59)

7月26～27日

前日迄バイトをやっていて天気予報に気をくばらなかったのであるが、山形からバスに乗って空を見ると、様子があまりかんばしくないのです。今後の事を心配する。ツェルトを持ちキスで行ったわけだが、そんな格好の人は一人も居ず、しかも「月山に登るのですか?」「ええ……」「御苦労様です。」……。

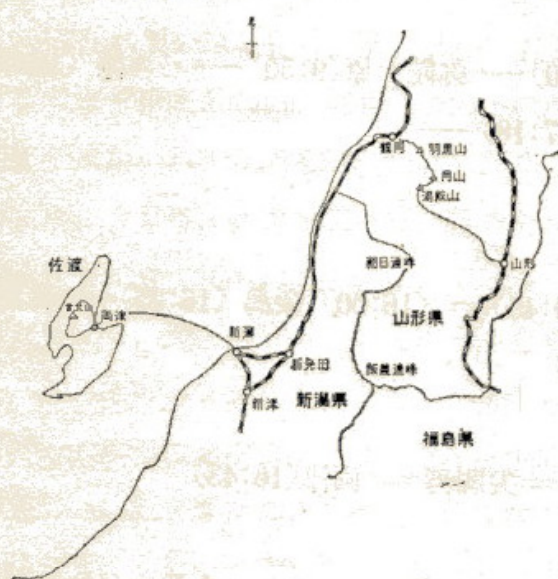
信仰の山、また一年のうちで一番気候にめぐまれる時期?故、白の浄衣をつけ、木綿注連をかけて登山している人が多かった。湯殿山の頂には石跳川沿いに少し下って、やぶこぎをして直登した。一般の人は、この山頂には行かないで神社ですませてしまう。

月山の牛首あたりは、夏スキー族の声が聞えたが、ガスっていて姿は見えず、ただ不気味に土



やがて小屋に着き、「T.S は……」と聞くと、牛首より上は禁止になっているとの事。また「風呂がある。」などと聞いたとたん to 一日の安らぎを思い出し、ツェルトを持っていたが、ここに素泊りすることにした。

起きた頃から凄まじい雨と風。山頂に行って御来光など夢の話。しかし、出かけねばならない。もちろんビョヌレ覚悟である。山頂付近では風にとばされそうになり、名所を見ると、「風の難所」とか。やや安心すれど依然風と雨は止ず。同じ状態が続き、バス停に到着。古いバスを利用した待ち会い室で昼食。八合目からバスに乗り、六合目頃になるとやや雲が切れてきた。羽黒・



7月29日

予定通り五合目迄は来たが、昨日よりもすごい雨と風のために、一日ここで様子をみる事に決める。

7月30日 ●  $\rightarrow$  ●

とりあえず御浜迄きょう行き、そこで天気晴れるのを待ち頂上に登る事にして小屋を出発。しかし、白糸の滝まではまあまあ良かったが、そこをすぎ稜線に出るとともに風と雨が小生の肌にぶつかり、恐ろしくなり下山と決める。五合目の小屋で天気予報を聞くと鳥海山の雨量 282 mm、まだまだ庄内平野秋田南部は前線のため当分雨が降るとの事。そこで、どうしたら良いかを経済性、並びに時間性を考慮して佐渡ヶ島に行く事に決めた。五合目の小屋に居た人は全員下山。バスもこれ以後はしばらく運休。

7月31日      ●→⊙

佐渡に関する資料をまず購入する。観光地図金30円也。天気は相変わらず雨。定期観光バスに乗るのはつまらないので、レンタカー（コロナ MARK II）に乗る事に決め、相棒3人を探す。シェーネメッチェン2名、理科大 Y. H. C 所属の者1名也。天気は良くないが、客は上々。

夜は両津港に宿る事に決め、夕方加茂湖、パチンコ屋に散歩。夕食のおかずにはしゃけのような魚を買ったのだが非常にうまかった。夕方の港、堤の風景には、心をうるおす何かがあった。

8月1日



例の観光地図を頼りに計画したのだが、現在廃道になっている道も道路として記しており、その道に入って行って道がなくなってしまい、あせった一場面もあった。

白雲荘から妙見山をまいて金北山に至る道は、現在自衛隊の所有になっているため、一般の車及びバスは入れない。つまり行けるのは登山者と自衛隊。妙見山頂は、倒れた電柱及び社、廃鉱の跡があるのみでつまらないものだが、シャクナゲは非常にある。

金北山頂のほとんどは自衛隊の陣地になっており、すぐ横に登山道が走り、一応作ったと思われる三角点（山頂）がある。そこからドンデン山に抜ける道は、急にせばまり 50cm 位のハイキングコースとなる。かなり池が散在したが、ガスっていたためはっきりとした大きさはつかめなかった。

石花越からすぐ両津に向かおうと思ってその道をとった所、30分も行かないうちに道はなくなり、回りはガスのため見晴らしがきかなくなりシクハックした。結局、時間はかかるがアオネバ峠まで行き、下山することにして、また石花越にもどりアオネバ峠を通過。途中雲が切れドンデン山の車道が見え、ハートが落ち着く。峠からドンデン登山口に下山している途中には、岨巒堂山と藤権現山の間に両津の港が見え、きれいである。

登山口では、バスが出たばかり故両津まで歩く。きょうの山行の充実感を味わいながら一路両津へ向かう。

8月2日 ◎

今回の山行は始め予定していた訪画とは大巾な違いを生じ、「山行にレンタカーとは」思ったが、有効に使うならば車（レンタカー、ヒッチ）やY.H.を利用したワンデルング活動も面白いと感じた。

もっと色々な交通機関、宿泊所などを利用したワンデルグも面白いと思う。

両津港では本当にすばらしい海の夜明けを経験したと思っている。

## 九州旅行

3月17日～4月3日 上山

3月17日 ①

別府 → 延岡 □

3月18日 ◎

延岡 → 青島 → 内海 □

3月19日 ●——◎

内海 → サボテン公園 → 串島 □

3月20日 ●——◎

都井岬 ↔ 串島 ~~~~~ えびの高原



3月21日 ◎

えびの高原→国分→上境 □

3月22日 ○

□ ←→ 桜島

3月23日 ◎ → ①

上境 → 麗児島 → 指宿 □

3月24日 ○

□ ←→ 開聞岳

3月25日 ●

3月26日 ①

指宿 → 五木村

3月27日 ①

五家荘 ←→ □ → 阿蘇

3月28日 ● ←→ ◎

□

3月29日

□ → ダザイフ → 二日市 □

3月30日 ◎

□ → 博多 → 平戸口 □

3月31日 ◎

□ 平戸口 → 平戸 → 長崎 → 諫早 □

4月1日 ①

□ → 雲仙 熊本 → 水前寺公園 → 熊本 吉松 □

4月2日 ①

□ 吉松 → 霧島神宮 → 高千穂 → 青島 □

4月3日 ◎

青島 → 帰途

3月17日

早朝別府に着く。夜の街として天下にその名をとどろかす地に早朝着とは色気がないが、サルで有名な高崎山と地獄めぐりをする。観光者用の色々コースがセットされているが、お金ばかりかかっておもしろくないのでバスにはちょっと乗るだけにし、近くはすべて足を利用、どこもみるには便利になっていてしまい味気ないが高崎山の猿はいくらみてもあきない。一週間分の食料を買って延岡にテント、夜はかなりひえこみテントに氷が張る。



3月18日

青島に行く、さすがにビロウ等の熱帯植物がしげり、夏にでもきたら熱帯地方にきた様な気がするだろう。ここから日南海岸をあるくためアルスファルトの道をテクリ始める。ザック重いためか、すぐに足がいたくなる。内海という漁村の近くにテント、夕方浜辺でさくら貝の首かざり（すぐにこわれてしまったが）をつくる。やはり今夜も寒い。

3月19日

雨の中をサボテン公園まで歩く。考えてみればバカらしいことなのだろうが、人が車をとばしている中をあくのもおつなものだ、日南海岸はスケールの大きさは感じないが、晴れていたらもっとすばらしいかもしれない。サボテン公園でつくっておいた昼食をたべここからバスにのることにし鵜戸神宮へ、鵜戸神宮は海の美しいきれいなところにある。串島にテント。ようやくあたたかくなる。

3月20日

都井岬へ、ガスが濃く、時々強い雨をとまなう。海の色が美しい。野生島に七頭みてむじやきによろこぶ。串島に張っておいたテントをたたみえびの高原へ、えびの高原のキャンプ場はいまは開かれてないそうなので下の温泉にとめてもらおうと小屋に行ったが、あいているのに断われ、しかたないのでキャンプ禁止地にテントを張る。ものすごい風と雨でありながら山小屋でとめないなんてよほど悪く見られたのかもしれない。しゃくだから昨朝強引に露天風呂に入る。

3月21日

露天風呂に入り、桜島に向うべく上境へ。風が強い、神社の境内にテントを張り、昨夜ぬれたものをかわかす。

3月22日

しばらくぶりに晴れる。桜島に行く。北岳は登山禁止のため登れず。しかたないからあたりをぶらつく。夏みかんの畑からおちていたのを失敬してたべると、これが大変にうまかった。しばらくぶりにのんびりしたのでまたここにとまることにする。土地の人のことばがよくわからない。意味はわかるのだけど、まねができない。東北に行ったときは、まねられるけど意味がわからなかったのにおかしなものだ。

3月23日

鹿児島にて買い出し、大きな街である。買い出しに時間をとりすぎたため指南ではホテルの前の空地にテントを張りただ寝るだけ、海岸のすぐ近くなので潮風が気持ちいい。浜辺では高校生でもあろうか、かくれたばこをふかしている。どこでも同じなのだ。

3月24日

開聞岳に登る。桜島、霧島がみえる。長崎鼻まであるく。腹がすいたのでここでパインをたべる。きつねざるやフラミンゴいたり、海が美しいのでのんびり昼寝をきめこむ。それにしても、



こんなところにあつまってくる連中とはどうしてこうもきまっているのだろう。新婚か学生か修学旅行と思えばまちがいない。あそぶための場所なのだ。

3月25日

雨のため午前は動かず、午後はジャングル風呂。半混浴なり。しばらくぶりにきれいになる。よほどきたないなりをしていたのか。入るとき支配人が上から下までジロジロ見てブスブスいていた。

3月26日

五木の子守唄で有名な五木村に行く。人吉よりバスで3時間余り。道がせまくのっているほうが恐くなる。別にとりたててどうということもない。林業がさかんな様だ。

3月27日

五家荘へ、ひっそりとした静かな村である。バスの終点から1時間半かかる。土地の人は交通の便の悪さをなげく、桜がきれい。阿蘇へ行く、子供が集まってきてたいへんなさわぎ。

3月28日

高岳に行きビッショリ。午後は竹田へ、よき町である。岡城はすばらしい、霧の中のたたずまいはいいようがない。滝氏の気持がわかる。思わず荒城の月をくちずさむ、夜近くの家で風呂に入れてもらう。はなしていることばがわからず苦戦する。九州独特のもちをやいてもらう。

3月29日

ダザイフへ。ここでおがんでもらうと学力があがるそうで、誰やら親子づれのためにさかんにヘイソクをふりまわしていた。多分きくのだろう。二日市の工場あとにテント。

3月30日

博多へ、ここも大きなところである。博多人形は今ではどこにいてもみられるが、たくさんならんでいると何か不思議な気分させられる。ここから平戸に向う。平戸口の耕作してない畑にテントを張る。夜誰かがきて、身元を聞かれる。数日前に殺人事件があったとのこと。ブッソウなどどこにきたものだ。夜、一袋20円也のあさを食べる。うまかった。

3月31日

朝船に乗って平戸に行く、早朝のためか静か。長崎はややきたなく、やたらにせわしい。平和公園ではやたらと記念写真ばかりとりたがる。観行客に何かムットしたのを感じ線香をあげ早々に引上げる。今夜は諫早にテント。線路の近くに張ると、貨物列車の機関手が手をふって汽笛をならしてくれた。

4月1日

雲仙へ、風呂に入る。島原で友人と別れる。ここからフェリーボートで三角に渡り水前寺公園へ。たいしておもしろくもない。高千穂に登るため南下。桜も南に行くにしたがってふえてくる。人吉でザボンを求める。ここらあたりから景色もよくなり、矢岳一帯はあとでおりなかったこと



をひどく後悔した。吉松にてテント。

4月2日

高千穂に登山。火山特有の登りがまことに登りにくいが、下りはかまわず走りおりる。楽しい。青島にもどりテント。ここで旅をうちきることにする。

4月3日

帰途につく。観行地回りはやはり我々ワンデラーの場としては適當ではない。あまりに環境的にめぐまれてはいない。自然との調和は人工の開発されたものによってみだされる。我々自身でやりとげねばならないことは観行業者によって金さえ出せばいくらでも容易に手に入るのである。

## 南紀州春の旅

3月29日～4月3日 堀江

29日 神戸~~~~大阪~~~~奈良~~~~亀山~~~~伊勢□

30日 伊勢——伊勢神宮(外宮——内宮)——伊勢~~~~二見浦

31日 伊勢——熊野駅~~~~新宮市——宮井——玉置口——新宮市~~~~串本~~~~新宮市~~~~紀井姫□

1日 □——新宮~~~~串本~~~~新宮——佐野の松原——紀井なち~~~~串本——潮ヶ岬□

2日 □——串本~~~~御坊市——道成寺——御坊市~~~~海南市——紀三井寺——和歌浦□

3日 □——和歌山~~~~大阪~~~~京都

29日

工場見学の帰り、伊勢を振り出しに南紀州一週の旅に出る。伊勢には小雨模様の寒い中、夜8時に着く。参宮線で伊勢の次の無人駅に寝る。シェラフとカバーだけで寒くはなかった。

30日

朝一番列車で伊勢に舞い戻り、早朝の伊勢神宮を見物する。霧と小雨の中、警備員が小さな小屋の中に戻るのので雰囲気喪さずにゆっくりと見て廻る。内宮に行った時には、人、又人の波でひしめきあい。五十鈴川も増水の為濁っていて、早々と引き上げる。二見の浦は松林が美しく、堤防を伝って夫婦岩まで行ける。内宮では年寄が多かったが、ここでは若い人が多い。雨と風が強く、嫌になって来たので熊野の鬼ヶ城まで行く。熊野駅からバスも出ているが、歩いて30分位である。ここは晴れているので鬼の寢室に寝ることにする。一晚中月が頭上になり、船の火が美しい。寒くはなく、シェラフカバーの内側が濡れて来るのが嫌になるだけだ。

31日

朝のうちは晴れていたのので9時迄ゆっくり過す。この頃になると観光客が多い。急行で新宮へ行く。湊八丁見物に国鉄バスで出かける。客の8割方は周遊券の持主である。うまくできていて、



これでは宮井までしか行けないのである。玉置口への民間バスは本数が少ない。しかしながらここを歩きながら春を見つけることができ、かえって良かった様である。帰りはトヨエースに拾われ、あっと言う間もなく新宮市に着いてしまった。夕暮の熊野灘を見物し、佐野の松原に宿るつもりであったが強い雨となったので車掌さんに教えられるまま、今は人員不足で無人駅となっている紀井姫で寝る。新宮より熊野側の2つ目の駅である。

### 1 日

朝のうち雨、日中曇り、午後晴れ。朝の熊野灘見物。佐野の松原は枯れそうな数本の老木と背の丈に満たない苗木が植えてあるだけで全く見る影もない。只海は奇麗だ。国立公園だけあって、ここら辺の海岸線は山の緑と岩肌、砕ける白波、海の青とが美しく輝いている。テントは潮岬の高台の南の黒く突き出した岩の上に、かろうじて身を横たえることのできる所とする。本州最南端の地、これより南に寝た者は他にいないことを望む。

### 2 日

道成寺へ行くには、御坊の駅で降りて、小高い丘沿いの道を行くのが良いと同席した。御坊に住むという老人が事細かく教えてくれた。約30分程の道のりである。道成寺駅からは3分とかからない。紀三井寺では、3分咲き位で酒宴が催おされていた。裏山の頂上からは夕日に染まった和歌浦の海と遠く和歌山城も見える。和歌浦はどこまで行っても旅館街が続いている。燈台のある方だけが何も無い。仙人の洞窟に行く途中の道に寝ることにする。断崖の中程のせり出している部分である。

### 3 日

朝の和歌浦を船で見て廻る。日本一というのも頷ずける。一周500円である。天気は薄曇り。そのまま直ちに京都の中島君の家に帰る。

### 感 想

シェラフとシェラフカバーで寒くない、十分だ。食べ物は全て、買って食べたので交通費も含めて1万円弱程かかる。観光客も日中は多いが夜になるといなくなるので具合が良い。多くの駅に止まる急行の本数が多いので急行に乗れない切符だと具合が悪い。車中はものすごく汚ないから、其の覚悟をしておくこと。

## 北 海 道 旅 行

8月6日～16日 大橋、部外者2名

8月6日 ①→②

礼文島(餌深)(11:40)——(12:40)利尻島(杓形)——(15:30) T・S

8月7日 ②

T・S(4:30)——(8:15)鴛泊との合流点——(8:30)利尻岳山頂——(12:30)鴛泊



旭川(7:30)——(9:10)勇駒別(9:30)——(11:45)姿見の池(12:15)——(1:20)旭岳(1:40)——  
(2:00)大雪溪 T・S

8月10日 ◎→○

T・S (6:10)——間宮岳——北海岳——(9:00)黒岳(10:30)——(13:00)層雲峡 T・S

8月15日 ◎→●

T・S ウトロ(6:45)——知床五湖——岩尾別温泉(10:45)——(12:30)銀冷水 T・S

8月16日 ●→○→◎

T・S (6:00)——(6:15)羅臼平——(6:45)羅臼岳(7:15)——(9:00)岩尾別

8月6日

今日は、香深で偶然にこまどり姉妹の地方巡業に出会い、皆目をパチクリ、きのう礼文島へ渡る時酔って、こりたせいか、今日は皆船に乗ると薬を飲み、すぐ横になる。利尻島に着いたが、利尻岳の頂上は、雲の上で、見えない。でも折角ここまで来たのだから、山に登ることにする。今日は五合目と六合目の中間地を T・S とする。今日の夕食のホルモン焼は何か怪しい味がしたが、皆よく食べた。

8月7日

残念ながら、天気は余りよくない。途中七合目には避難小屋があり、水場も近い。八合目から登りが急になり、なかなか頂上に着かない。いい加減疲れる。苦勞して頂上に登ったが、ガスの中であった。帰りは、ゆっくりお花畑で楽しみながら下る。また、この島には、熊とヘビが一匹もいないそうだ。

8月9日

旭川の駅の待合室で、2時間程寝ただけなので、なんとなく眠い。勇駒別から、姿見の池までは、ロープウェイがある。我々は、当然歩いたわけであるが、雨後のせいか、地面が、固まっていけないので、歩きにくかった。それにひきかえ、姿見の池からは、かなりよい道が続いていた。旭岳の大雪溪は、どこかのパーティがスキーをかついで来ている程、雪が豊富だった。

8月10日

間宮を過ぎ、北海岳にさしかかると、天気がうそのように晴れ上り、北海岳からは、白雲、白鎮、凌雲、赤岳が、はっきりと見えた。黒岳の手前に高山植物が、群生している所があり、ついゆっくりとなる。黒岳で昼寝をしていると、シマリスが、チョコチョコと顔を出した。下りは、五合目までは、すばらしい道であったが、それを過ぎるとロープウェイがあるせいか、道が悪く歩きにくかった。

8月15日

知床五湖は、森の間に散在する静かな大きな地塘といった感じである。他の湖とは、かなり趣を異にしている。岩尾別の木下山の家には、すでに多くの登山者が、はいていた。天気が悪い



ため、羅臼平まで行って戻って来た人やら、色々である。羅臼岳への道は、驚く程整備されていた。

8月16日

朝4時頃起きて外を見ると、霧雨がふっていた。しかし、朝食をとり、5時頃外に出ると、なんと、雨は止み、きれいに晴れ上がり羅臼岳山頂の黒い岩肌が、朝日に光って見えた。そこで急いでパッキングをして出発しようとする、I氏が周遊券をどうも岩尾別に忘れて来たらしいと言うので、羅臼に下るのをあきらめ山頂をピストンして、岩尾別に下ることにする。ハイペースで登ったため、頂上へは、コースタイムの半分もかからず着く。頂上からは、三峰山、硫黄山を眺めることが出来たが、残念ながら国後島は見えなかった。

## 羅 臼 岳 (知床半島)

8月5日 ◎ 山田, 小堀, 他2名

5 日 岩尾別温泉□(6:10)——(9:15) 羅臼平 (9:30)——(10:05) 羅臼山頂 (11:10)——(11:40) 羅臼平——(12:40) 泊場——(14:35) 羅臼発電所 □

この山は 1661m の知床最高峰である。山容は本州の2500m級に相当し、山頂付近は急峻な円錐状の火山で火山弾がむき出しにころがっている。羅臼平(約 1500m)からはハイマツで覆われ、シマリスが顔を出し慰さめてくれる。雪渓が有り、高山植物が咲き乱れ、原始の匂いをもし出す。前日岩尾別温泉にテントを張り、霧のかかった中を出発する。1時間もすると霧の層を突破し、下にはガスが白く山から流れ落ちている。上を見ると本州の大雨の影響からか、ガスが大きく山の上を巻いている。そのうちまた霧の中へ突っ込み、羅臼平に来ると吹き抜けの場の為、風が強く寒い。幾つかのパーティーがテントを張っている。霧は晴れたりかかったりの繰り返しである。晴れた合い間に頂上を目差す。そこから見るオホーツク側は雲海、根室海峡側は晴れ、国後島が眼下に、遠くにはソ連の山が見える。昼飯を食べ、羅臼町へ下る。途中で、氷河に削られたような雄大な地形に会う。

## 大 峰 山 神 童 寺 谷

9月14日～15日 内田, 他3名

(コースタイム) 9月14日①

神戸~~~~下市口(9:50)——(11:00)川合 (11:40)——(12:50) モジキ谷出会 (13:10)——(14:10) 大川口(14:30)——(16:50) 沢又 □

9月15日 ◎



□(6:15)——ヘッツイさん(7:00)——(7:15)赤鍋の滝(7:30)——(8:20)——釜滝(8:40)——  
(9:35)滝(9:45)——(10:55)ジョーレンの滝(11:55)——(12:45)山上辻(13:00)——(13:20)稲村  
ヶ岳(13:30)——(13:45)山上辻(14:00)——(15:30)洞川(16:40)——(18:30)下市口(18:58)——  
神戸

(記事) 9月14日

林道が大川口から本谷へ向って2300m程延長されており末端では盛んに工事中だ。この沢を  
ぶちこわすつもりなのか。ワラジを着けていると発破の合図がありあわてて荷物を手当り次第ひ  
っさげて逃げた。ドカンと聞えたのでやれやれと腰をおろしたらサイフが落ちていたてんで3,000  
円もうけた奴がいる。

小生道案内ということでトップに立ったが、以前の不確かな記憶はかえって災しいしてむだな  
高巻きなどをしてしまう。沢口に着くまでに皆よく一度つつ水中につかった。枯木を集めて火を  
おこしパンツを乾す。

9月15日

今回は軽量化をはかるためツェルトで、シュラフは持って来なかったが昨夜はよく眠れた。天  
気はあまり良くない。ヘッツイさんと呼ばれる所ではヘソまで水につかり早くも体が縮む。一度  
見たら絶体忘れられない物の形? をしている釜滝、高さを誇るジョーレンの滝を過ぎて山上辻  
に飛び出す。稲村ヶ岳へ行き大峰山系の全貌を望めた後、洞川へ下山した。

## 白馬岳—朝日岳

9月21日～23日 内田、他1名

(コースタイム) 9月21日 ①→◎→●

神戸(前夜 20:48)——糸魚川(5:28)平岩(6:30)——(7:30)大所(9:30)——(11:00)蓮華温  
泉口(11:05)——(11:25)蓮華温泉(12:00)——(13:30)天狗の庭(13:40)——(14:45)白馬大池  
(15:20)——小蓮華山(16:40)——(17:00)□

9月22日 ① ◎

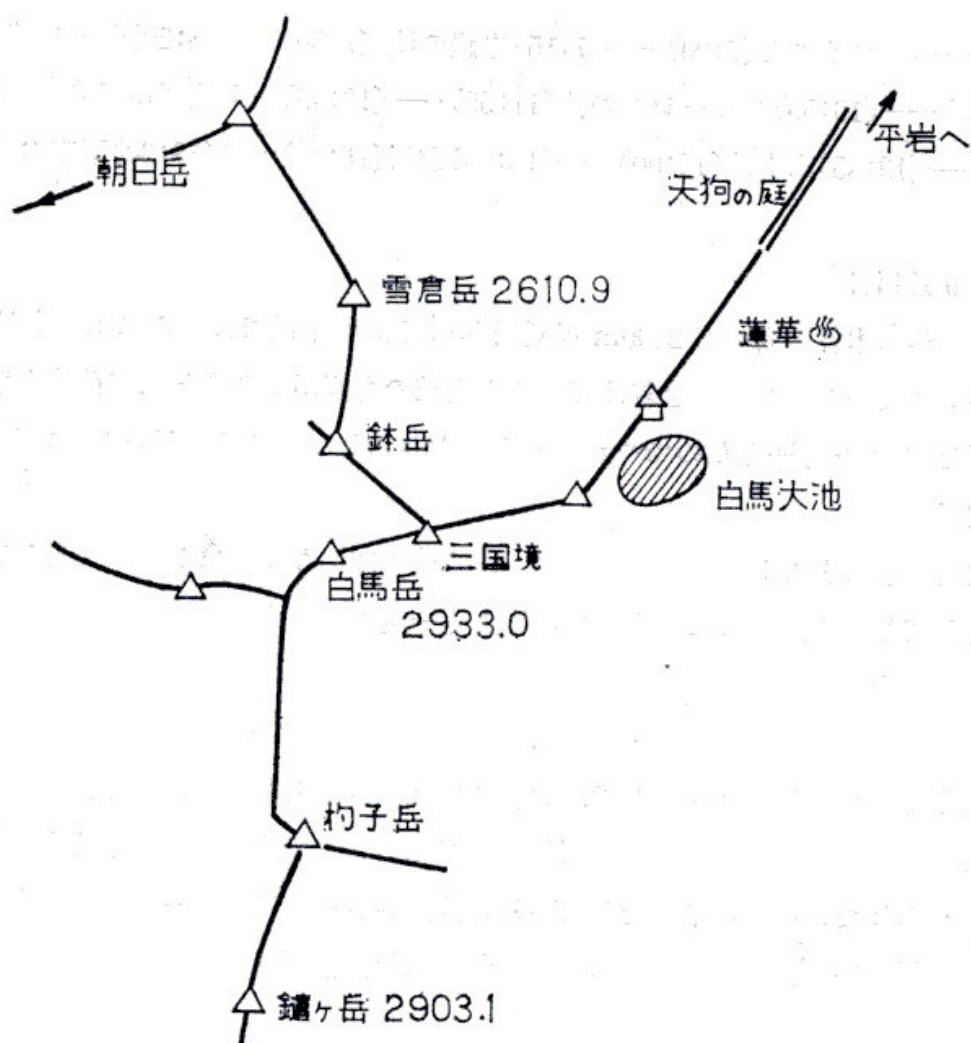
□(7:30)——(7:50)三国境——白馬岳——三国境(8:45)——(9:30)鉢山(9:40)池(10:20)  
——雪倉避難小屋(10:30)——(11:00)雪倉岳(12:55)——(15:15)朝日岳(15:40)——(16:10)朝日  
ヶ原□

9月23日 ● ◎

□(6:25)——(7:00)恵振山(7:10)——(8:00)ぶな平(8:10)——(8:50)北又小屋(9:20)——  
(10:05)越道峠(10:15)——(11:25)小川温泉(13:10)——泊(14:00)——富山(17:00)——神戸

(記事) 9月21日





夏の集中豪雨によるガケ崩れが残っており平岩～大所間約2km歩かせられた。

バスは予定を大分遅れて出発したうえ途中でパンクしてしまった。全くやる気を失う。白馬大池にはでっかい小屋が有り付近にチングルマの群生などあるが立入り禁止のサクがある。この小屋の便所にたまったウンコは全部この池に流しているの要注意！

水はこの池を利用する他はないのだが？

小蓮華山に着くころには雨が降り出した。風も相当強い。残雪のある凹地にツェルトを張ったが風雨で一晩中悩まされた。

9月22日

三国境からは雪倉、鉢方面のいかにも処雪地帯を思わせる美しいツヤのある山肌が見られる。私好みのものだ。白馬岳山頂ではファーと流れるガスの切れ間にチロチロと剣岳が頭を出した程度であった。

鉢岳付近でようやく陽がさし出した。雪倉山頂で大休止。とにかくゆうべは何もかもビショ濡れにやられたので徹底的に乾すことにした。小蓮華、白馬の稜線が初めて晴れ上った。雪倉を下ると山の感じは一変する。



針華樹、落葉樹の美しい湿原が幾度となく現れる。朝日岳山頂はガスっていて何も見えない。一瞬白馬が浮かび出たが二度と現われなかった。朝日ヶ原は湿原であるがすでに夏の生气はない。シュラフにもぐり込む前に外へ出た。月が美しかった。はるか遠くに町の灯が見える、富山辺りかな。ジョジョーという音を聞きながらロマンチックな気分にあひたっていたらブルルッときた。今夜も冷えるかなあ。

9月23日

昨夜の月は人をあざむく月だったのか。一面にガスっている。下山だ。恵振山辺りから激しく雨が降り出した。越道峠辺りでようやく雨も止みほっとする。小川温泉は少しはなれた所に露天風呂がある。俺たちがパンツを脱いだら、見ていた若い女性は残念ながら逃げてしまった。オバヤン達は平気なもんだ。一緒に入ってワイワイ騒いでいる。

## 毛 勝 三 山

10月10日～13日 内田、他2名

(コースタイム) 10月10日 ①→●

大阪(前夜 22:17)~~~~(6:50)魚津(7:20)——(7:50)東蔵(8:05)——オノマ(9:20)——(9:35)第四発電所(10:20)——東谷取入口(12:00)——(12:15)ケヤル谷出合(12:30)——(13:15)□

10月11日 ◎→⊗

□(7:15)——(8:15)大明神谷出合(8:30)——(11:20)昼食(12:00)——稜線(13:30)——(14:20)毛勝山北峰(14:30)——高峰(14:45)——(16:30)□

10月12日 ⊗→●

□(7:30)——(8:30)釜谷山(8:40)——(9:40)昼食(10:10)——(10:30)猫又山(12:40)——(13:10)猫又谷左俣コル(13:30)——猫又谷右俣出合(14:30)——釜谷出合(16:30)——(16:40)□

10月13日 ◎

□(6:55)——南又谷取入口(9:15)——(10:30)オノマ(11:00)——(12:00)東蔵(12:20)——魚津~~~~富山(16:55)~~~~神戸

(記事) 10月10日

紅葉と新雪をねらった期待の山行であったが、大分ひどい目にあった。取入小屋をすぎるといよいよ河原に下る。雨がふり出した。ケヤル谷出合を岩づたいに飛び渡りようやく岩屋を見つけツェルトを張る。

10月11日

何ともデッカイ谷だ。大明神、毛勝両岩の出合当りから地図にもある万年雪溪が現われる。上は岩や砂が推積していて雪溪とは見当がつかかねるものもある。谷の上部はガスがたれこめてい



て見えないが何やら白いものが見えがくれする。案の条、高度が増すにつれ雪が降ってきた。視界も悪い。十分注意して最後のツメに取りつく。予想に反してひどく急だ。岩をつかむ手が冷たい。急な草付となり悪い足場が続く。やっと稜線に出たが視界は全く効かない。すぐに頂上がある筈なのになかなか尾根が付きない。どうやらとんでもない所をツメてしまったらしい。毛勝山という文字を見つけたときは実にほっとした。南峰を下り初めると進むべき尾根がどれだか全く見当がつかなくなってしまった。大分時間をかけて検討したが結局動かないのが一番だということでその場に設営。

10月12日

一晩中雪が降っていたらしい。20 cm は積っている。視界は相変わらず効かないので毛勝谷を引き返すことにしたが、ツェルトを撤収しているとガスが晴れ快晴の青空が広がっていた。剣岳が目の前にさんざんと輝いている。あわてて写真をとり地形を調べる。昨日右往左住したことがあほらしい位何でもない所だ。この天候は本物だと信じ猫又へ向かうことにした。ところが釜谷山をすぎるところまたまたガスが出て雪が降り出した。猫又山頂へ着いたら時すでに遅く視界0の世界に引きずり込まれてしまった。予定の右俣への下降点が判定でないのである。2時間近く検討したが皆自信喪失。一番安全なコースとして左俣コルまで引返し左俣を下ることにした。

右岸から釜谷が出合うまで長い長い時間に感じた。釜谷が出合うまでは下っている沢が猫又谷であるという最後の確信が得られないからだ。

10月13日

でかい南又谷を何回となく渡渉を繰返しやぶれかぶれで下山。水がやけに冷てえ。昨日の朝の輝くばかりの剣岳を青い突き抜けるような空は一体どういうことなのだろう。富山で暖い日本酒にありつきながらしみじみと北陸の山の教訓を味わった。

## 加 越 連 山

3月21日～23日 内田、他1名

(コースタイム)

3月21日 ●→⊗

神戸(6:33)——福井勝山——谷(13:40)——(14:30)五所ヶ原

3月22日 ⊗

五所ヶ原(6:15)——1120m峰(9:00)——(11:00)こつぶり山(11:15)——(11:20)昼食(12:00)  
こまんど峠(12:30)——(12:50)こまんど山(13:00)——(14:00)五所ヶ原

3月23日 ①

五所ヶ原(6:20)——(8:50)1120m峰(9:00)——(10:00)こつぶり山(10:10)——(10:15)避難小



屋(10:30)——(11:00)取立本峰(11:10)——(12:45)鉢伏山(13:00)——取立本峰(14:00)こまんど峠(14:30)——(15:00)こまんど山(15:30)——(16:10)五所ヶ原(17:00)——(18:05)福井(18:16)——(22:40)神戸

(記事) 3月21日

谷部落から降っていた雨は次第に雪に変わった。五所ヶ原部落は深い雪にうずもれていてさびしい。織田数一氏宅が今回の基地であるが、この部落は今年限りで下界へ集団移住するという。開拓部落のむずかしさがうかがえる。

3月22日

かなり雪が降っている。見通しはまあまあ効くので出発した。雪は深くトップは相当のアルパイトだ。稜線に出る頃から激しい吹雪となった。小つぶり山の手前は石川県側が雪底、福井県側がアイスパーンで見通しが効かぬ時だけに緊張させられた。小つぶり山頂では視界0に近く吹雪は一層激しさを増し顔面は猛烈に冷たく目を開けていられない。

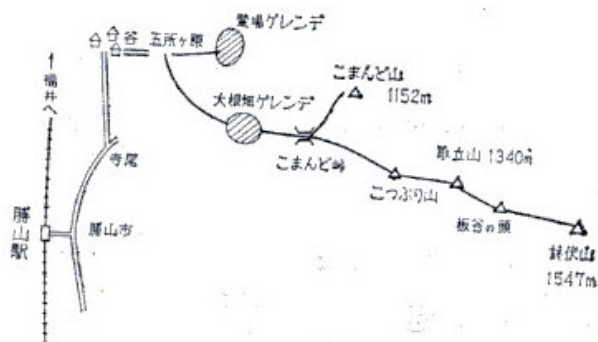
3月23日

先日から降り続けている雪のため昨日つけたトレースは全く消されてまた初めからやり直した。

天気は回復にむかい1120m 峰に着く頃には太陽が顔を出した。避難小屋はしっかりした立派なものでそこには吹雪の中で行き違った福井大 W. V の連中がおり、『うわーいい天気だ』ななどでかい声を出しながら、暗い穴ぐらから熊が現われる様にぞろぞろ出てきた。かわい子ちゃんもいるところを見ると今までチンデンしていたのだろう。

鉢伏からの展望は実に壮大で白山、別山が一段と白い。帰路の鉢伏山斜面の滑降はすばらしい。次第に高度が下がると春特有のくされ雪に変ってくる。ゴージャスに飛ばしているつもりでもあまりスピードはでない。

途中スキー靴の本体と底が分解するという珍らしいトラブルがあったがどうやら念願のコースを無事果すことができた。



## 鉢伏山—澁川山

3月2日 内田, 他5名

(コースタイム) 天気→◎

丹戸(5:50)——(8:10)鉢伏山(8:50)——池(9:45)——アンテナ(10:35)——(11:10)——澁川山鞍部(12:00)——杉林終り(13:00)——(13:40)第2直滑下部(14:00)——(14:20)——兎和野峠



(14:35)——(15:00)市原(15:12)——八鹿——宝塚——神戸

今年は積雪量の割にブッシュが目立つがこれは2月中に一度根雪が溶けてしまいせっかくねかされたブッシュが立ってしまったためだろう。コース中最大のフリーダウンのできる兎和野原は開こんの手が加えられ全員亜然としてしまった。このコースが年々魅力を失ってゆくようでは困ることだ。

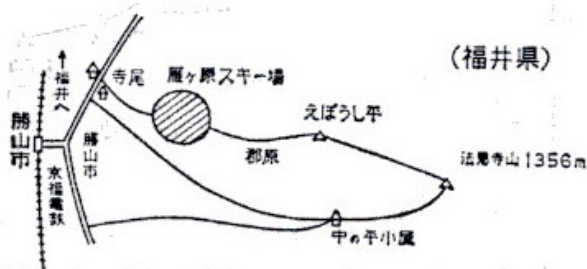
(注) 鉢伏山～瀬川山……兵庫県北部

## 法 恩 寺 山

2月10日 ① 内 田

(コースタイム)

寺尾部落 (7:50)——380m峰 (8:30)——580m峰 (10:20)——(10:50) 開拓部落 (11:10)——  
——(13:10)982峰(14:00)——開拓部落(14:20)——(16:10)386m(16:30)——(16:45)峰寺尾部落



福井県は豪雪山岳地帯をかかえておりそこでは無数のスキーツアーコースを選ぶことができる。法恩寺山にはよく利用される三つのコースがある。普通は下りに使われる長い長いコースを逆にたどってみた。雪質は昨夜の雨もたたり、陽ざしを受けて非常に重くなっている。結果的には頂上まで約

1 km 余して引返した。

## 平 標 ス キ ー ツ ア ー

草場, 上山, 斉藤, 渡辺

桐生(10:24)——(3:00)土樽(3:40)——仙倉山荘(5:55)——尾根取付(7:55)——伐採小屋(12:45)——土樽(16:10)

北瓜が来るはずになっていたが、来られず結局4人で行く。土樽駅では15人近く降り、スキーが6台近くあった。僕達が駅を出ると、続々皆がついて来る。あたかも僕達が出発するのを待っていたようで気分が悪い。5～6人程蓮の方へ行った模様。明け方だというのに、なま暖かい風が吹き、異様な雰囲気。岡部さんが来ていれば、お化けが出るなどと言え、さぞかし怖がるだろうと一同笑う。あとで駅員に聞いてみると、16°Cもあったそうである。

駅前の林道をまっすぐ進む。近道をする川原を横切らなくてはならないので、迷う恐れがあったため、橋を渡ってしばらく歩いたが、なかなか仙倉山荘の方へ行かないので不安になる。地



図を取出してみると、気が遠くなる程遠回りなので元に戻る。鉄橋をくぐり発電所を過ぎると標識が立っていた。先に行った人の踏跡をたよりに歩くと、川原を横切って対岸の林道に出る。踏跡でもなかったらとてもわからなかっただろうと、先人の行動に感心する。山荘の手前に2軒程伐採小屋があり、中に7人程登山者がいた。少し休んでいる間に草場氏が大キジをしとめる。標識が立っていた所で橋を渡り、対岸の夏道をたよりに歩き出す。ラッセルしてないので、500cmの雪に苦勞する。夏道が雪のためわからなくなった所では、うっかり横にそれると雪が深くてひどいめに会う。

沢の出合へ来ると、対岸の少し高くなった所にまた伐採小屋がある。そけまで行って休むことにしたのだが、飯という言葉を目にしてしまったため、突如空腹を覚える。さらに加えて急に雪が深くなり、わずかな距離にもえらく苦勞する。後から2人程登山者が来た。僕等が対岸に着くのを休んで見物している。とんでもねえ奴等だとぶつくさえ文句を言う。小屋に着くと、僕達もラッセルするから一緒に行きませんかと言ってきた。さんざん人の後について来て一緒にしますからもないものだ。

ここから先は雪が深くて、とても上まで着けそうにないと誰からともなく断念してしまう。まったく年をとったものだ。さんざん苦勞して濡れ木に火をつける。5時間近くそんな事をやって今日の日程を終す。スキーをつけてわずかに滑べると、石ころが出たりして滑れない。今日の異常な暖かさにすっかり溶けてしまったようだ。やはり三国峠側からピストンするのが一番いいようだ。12月一杯は何とか行けるだろうが、それからは、4月まで無理だろう。

## 蓬 峠 ス キ ー

12月6～8日 草場、小沢、上山、斉藤、渡辺、高橋

12月6日 ①

桐生(21:32)~~~~

12月7日 ②

(3:00)土樽(3:15)——(8:15)蓬峠△

12月8日

蓬峠△(13:15)——(17:20)土合(18:48)~~~~桐生

12月7日

夜歩くのもいい。月が特に美しい。雪はあまりないのでさしてつかれもせずに登っていける。ただスキーが目的なので雪が少ないのをよろこぶわけにもいかない。蓬峠についても雪は大変少ない。猫の額程の雪を見つけてすべる。ころがる、どなり合う。後から数パーティが登山の為にやって来たが、「皆もの好きめ」なんてケイベツのまなざし、3時頃ふてくされて小屋で横になっ



た。5時半頃目がさめて、朝か、夕方かわからない始末。ラジオをかけてもどっちともとれる番組ばかり。こんな狭い避難小屋でもテントとは大部ちがう。

12月8日

今日くることになっていた小沢さんに朝起される。小沢さんも雪のなさにはガッカリ、みんなすっかり退屈して無理にまずいメンを作り出す。とにかくのんびりとあそんでゆっくり新道を通って下山。

## 野 沢 温 泉 ス キ ー

2月8日～11日

2月8日 ② 桐生(21:32)~~~~高崎(01:45)~~~~(05:31)長野(05:43)~~~~戸狩(07:18)

9日 ① 戸狩(8:00)——野沢温泉スキー場(8:25)□

10日 ① スキー

11日 ① スキー□——野沢温泉(10:25)——(10:50) 戸狩 (11:03)~~~~(12:14)長野  
12:19)~~~~(15:57)高崎(15:57)~~~~桐生(16:42)

9日 バスで野沢温泉に着く。テントを張るため大きな荷物をかついでテントサイトを捜す。水が有りスキー場に近く、また温泉にも近いというようなぜいたくな場所を捜したが、見つからず、やむなくスキー場に最も近い雪の上にテントを張り、やっと我家が誕生する。さっそくスキーをはいてすべり出したのが、午後一時。スキー場は人々の大満員。リフトも乗らずエッチラオッチラ足の訓練。かなり転んで、疲れているので早く切り上げ、温泉へ行く。かなり大きな湯舟で割とすいていた。去年は風呂のハシゴもやったと聞いていたが、今日はこれまでとビールを買って我家へ向かう。スキーヤーがペチャクチャ関西弁を話して通り過ぎて行く。ほとんどが近くの民宿に泊っているらしい。カレーを食って早くも眠りにつく。

10日 朝7時頃から、もうスキー野郎達がガヤガヤと集って来る。負けてはならぬと、メンを食ってスキーをはいたのが八時。リフトに乗って野望を楽しみながら山頂へ向かう。遠く妙高、黒姫や戸隠の山々がくっきりと浮んでいる。

8日 今日はもう早くも帰郷である。スキーで一汗かいた後、おなごりおしくもテントサイトも後にする。野沢温泉は至る所に共同風呂があり、町にはスーパーなんかもあるが、のんびりとした農村である。町には民宿が非常に多く、家族的な雰囲気の中でスキーができるので、毎年関西方面のスキーヤーでにぎわっている。グレンデはかなり広く、上ノ平毛無山(1650m)へと続いている。



## 尾 瀬 ス キ ー

3月11日～14日 中島, 松田, 堀江

11日 桐生(8:30)~~~~新前橋(9:50)~~~~沼田(10:40)~~~~戸倉(12:15)——津奈木沢(16:30)□

12日 □(11:30)——(13:30)鳩待山荘(14:30)——(15:15)津奈木出合□

14日 □(9:00)——丸待峠——□——戸倉(15:10)——沼田~~~~桐生

11日 ①

戸倉から鳩待峠への道に入り、川を渡ると雪に出合う。しかし雪は少なく、津奈木川出合に近くなって、時々山靴がひざまで入るくらいで、何なく出合いに着いた。すぐにテントを張り、もぐる前に、ちょっぴり滑る。

12日 ②

朝起きると雪がかなり降っている。昨日踏み固めた上に新雪が積もり、うまく滑らない。昼食を持って送電線沿いに進むと車道に出る。この道ずたいに行くと鳩待小屋に着く。シールを付けて楽に行くことができた。雪は一日中降り続いていた。

13日 ③

大雪のため行動せず。至仏に行くべく出発しようとする頃(8時頃)雪は一段と激しく降り出し、一寸先も見えない程となる。仕方がないので一日中テントの中で寝ていることにした。食料は一週間分あるので食べ放題であった。

14日 ④

5時半に起きて、テントを畳んで帰り支度をする。雪が止んでいるのでもう一度滑ることにする。峠から小至仏に向うと、スキーがもぐってしまい、とても歩きにくい。至仏は時々、うっすらと頂上を見せてくれた。帰る時もスキーが滑らないので、とても苦戦した。

## 苗 場 (神楽峰スキーツアー)

3月23日～26日 高橋, 草場(弟)

23日 桐生(10:00)——(14:00)大島部落入口テントサイト(5:00)□

24日 □(6:40)——送電監視所(7:20)——(10:10)和田小屋(10:30)——(13:00)休憩(13:30)滑降開始——和田小屋(14:45)——(15:05)□

25日 □(8:45)——送電監視所(9:20)——(11:30)和田小屋(12:40)——(14:00)昼寝(上の芝)(15:30)——(16:30)□



26日 □(9:50)——大島部落入口(12:05)バス亭——桐生

23日 ◎→⊗

午前10時頃の列車で発つ。多分大島部落入口(トンネル前)でバスを降りたのは、2時頃だろうか。橋を渡る速中で、苗場から下山して来たスキーをはいたが登山者数名と単独のスキーヤーに会う。夏のバス道は大分、遠回りなので、近道をして行こうと言う事になったが、どうしても、雪深い斜面、重いザック、約一名、ワカンを持って来ぬため、非常に苦戦。こんなことならバス道をと嘆くが、登り始めてしまつては、もう遅い、なんとかかんとか登りきりの小屋を通り過ぎ、バス道に出る所に T. S を設ける。5:00 PM。夜はどうも冷えると思ったら雪がチラツいていた。

24日 ○

昨晚の雪模様はどこへやら、T. S 向いの雪面がまぶしい程の快晴なり。衣類は段々に脱いで行かねば、暑くてしかたがない。登りは和田小屋へと夏道どうりを行けば良いのであるが、例の



祓川の橋を渡らず、和田小屋の脇へと続く沢筋を行つたが、そのうち行くに行かれず沢を渡るのに手こずつた。和田小屋から下の芝、中の芝へと登りは快適である。ダケカンバの林、そしてコメツガの林を過ぎると、やがてコメツガもまばらな、やや平坦な所に出る。ここからの巻機をはじめとする上越国境の真白い山々の眺めはすばらしい。それを過ぎるとやがて神楽峰への急登になるのであるが、まだ雪も豊富で、しまっておらず足が深く

入り込んでしまう事この上ない。それにここを滑るとしても、我々のようなかけ出しのスキー屋さんには少々無理と見た。スキーをデポして頂上を踏もうかとも思い立ったが、でも思い留まる。左手の沢筋へと滑降して行くのが普通らしいが、今日のところは登り道を下る。なにせかけ出しのスキー屋には林間滑降は思うようにはゆかぬ。和田小屋からの下りは、長い直滑降で快適に飛ばせる。一気に、あっという間に T. S に下りた。

25日 ○

昨日に増してすばらしき快晴。

昨日は最後の神楽峰の頂上を踏まなかったにしても、やや今回の目的は達成されたし、本日は思いっきりスキー散歩とでも酒落ようかとのんびり出かける。途中和田小屋の住人が2人、スキーで降りて来た。小屋にては、誰も居なくなっているが、昼飯のパンを焼いて食おうじゃないかと、チョイト失敗、黙って上り込む。そのうち住人ももどり、お茶をごちそうになり、テレビの修理を頼まれたもの、俺達ではアイニク、だめに決まっている。昨日と同じコースで、上の芝の



雪の上に、用意して来たシートを敷き昼寝をする。下りは、沢筋へ出て見たら、兎ちゃんが逃げて行く。

26日

今回のスキーも無事終了。夏道をスキーを付けて、ヨロヨロしながら下る。この道も、ブルトナーが出て雪をのけていた。ここの春ももう近い。

## 鳥海山スキー

3月31日～4月4日 深沢、草場、高橋

山形県（羽越線）遊佐駅まで急行、実によく混む、座るところの騒ぎではなく鶴岡まで座席には腰をおろすことは出来ず、荷物の上で居ねむりをするものの、再び目をさました時の自分の体の姿勢好たるやすさまじく、ヨガそこのけの程である。どこの駅あたりから夜が明けはじめたのであろうか、遊佐ではのんびり構えていたら降りぬうち動き出して各人おおあわて、10分程待つて次の吹浦まで鈍行なり。吹浦は大胡程の町だとかF氏白く。

ここで少々足りないものを買出し、小野曾とか言う部落までバスで、その後歩きであるが大した距離ではないのにスキーのおまけが付いてバテル。

2時間程して陣屋なる所からチョイ先の橋の袂に幕営、よく晴れていたのに夕刻から風向がおかしい。午前中に着いたが今日はそこまでとする。同じバスでの単独、軽装の人が登って行く鳥海山500mあたりまで雪はない。日本海まで滑りおりたかったのに。

4月1日

5:00夜明けと共にテントを発って駒止、大平小屋を経て薦石坂と言われる急登を登り御浜神社の見える所まで登る。ここは風当りも強せいか雪はほんの少々で氷が張っている。

秋田横手高10名程のパーティが上に泊っており本日撤収とか。上の方からガスって頂上は見えず、帰り道でガスられてはと、ここより滑降を開始する。K氏は夏の海水浴用の麦わら帽子のツバを、はばたかせて滑る、時々そのツバが目の前へおおいかぶさり先が見えなくなるとか、何とも珍妙なり。

予想通り可成滑り出があり、大平小屋背面の壁（薦石坂）その下の林間がとりわけ面白く、又先の御浜よりこの薦石坂までのやや平坦な斜面もクラストしているせいか快適に飛ばせて、気分がいいところであった。

キャリア不足のT氏が林間ににて多少もたついたものの、それを過ぎるとがぜん早く、そろって午前中T.Sに帰り着いてしまった。午後はゆっくりT.S付近にて昼寝と酒落る。

4月2日

昨日書いた天気図からしてみれば、本日午後あたりから回復と見えたので、朝方あまり上天気



ではなかったが出かける。

大平小屋から上はガスでどうしようもない。5名のパーティーがこの大平小屋に入った。少し待っていれば晴れるかと思い小屋にてしばらく待っていたものの、晴れるどころか雪が降り出す始末で諦めて下山とした。

又又午前中に T. S 着、下の方は午後多少時間も見えたが山は終日晴れなかったらしい。

4月3日

昨日と同様な天気であまりぱっとしないが、それでもとにかく行ってみようと T. S をはい出す。

駒止を過ぎた頃から次第に晴れあがる。

時々ガスが出てくるのを気にしながら、大平の壁を登る。御浜神社の見える地点まで来た時はもう完全な快晴、鳥海本峰の新山が見える。まるで氷の城の様、風が冷い。

昨日大平小屋に泊ったパーティ頂上まで行くと見え神社にスキーがデポしてある。

社殿はそっくり雪の下だが、一ヶ所堀ってあって中へ入れて可成広い。

頂上へは見たところピッケルとアイゼンの領域らしい。装備もないし、時間も食料も心細いので神社の次のピークまでで満足する。

頂上直下の沢をスキーをかついで登る人独り、雪崩は大丈夫なのか、帰りは日本海を見下しながらの大滑降、大いに御満悦、天気図の読みが1日ばかり早かったらしい。



T. S へ無事、快晴の空のもと快調に下り、少々休憩の後即テント撤収し吹浦まで全部歩きでこの日本海岸の砂浜へ T. S を設け、調子に乗って海で泳ぐ者約2名、砂浜に残った約1名はカメラ

片手に記念写真を取り、打ち上げられた木片を集めて焚火をして、三、四ヶ月も気の早い海水浴の方々を出向える。

沖へ行く程浅くなる変な浜辺で、さすがに寒い寒いとガタガタして世話ないや。夕飯は町で買って来た豆腐を海水湯豆腐にして……。

4月4日

好天も昨日1日で今日はもう頂上は見えず、吹浦発8:04、以後遠延12時間余り、ドン行列車を乗り継いで帰る。

羽越線は部分的に復線化されたものの未電化なつかしい丘蒸気がまかり通る。この音と感触はやはりいい。



# 至 仏 山 ス キ ー

4月2日～4日 吉野，滝野，五十嵐

2 日 桐生 (7:33)~~~~(9:10) 沼田 (9:30)——(11:15) 鳩待入口(11:25)——(16:20) 津奈木沢□

3 日 □(5:45)——(6:50) 鳩待峠 (6:55)——(9:55)至仏山頂 (10:45)——(13:00) 鳩待峠——(13:40) □

4 日 □(10:05)——(13:05)鳩待入口(13:20)——(14:30) 沼田(14:33)~~~~桐生

2 日 ①

晴 天気は上々，只風が冷く寒い。鳩待入口下車。どこかの高校のW，Vと会う。雪は20～100cm位。腐っている。途中からワカンを付ける。暫く行くと雪がしまっている所以ワカンをはずす。しかしすぐに弛んだ雪になった。ワカンをはずした事を後悔する。時々，足がズボッと入ってしまつてとても歩きにくい。やっと津奈木沢まで着いた。

3 日 ①

朝3時10分に目を覚す。空を仰ぐとうす曇り，寒くて起きるのが嫌だったのが20分後に起床。ゆっくりと飯を作る。硬い雪の上を軽い荷物をしょって元気に出発。昨日と全く違う硬い雪。昨日と同じく，晴天に恵まれ，とてもすがすがしい。鳩待峠で帰り支座をしている5，6人のパーティーに会う。空は真青だが，まわりの山々にレンズ曇らしきものが表われ不安になる。しかし真白な至仏山は真青な空を突き上げている。鳩待山荘に人は居なかった。案内板が雪に埋れ，頭だけしている。風が少々に吹いて来たが快く頬を撫でる。赤ペンキや赤リボンを目印に進む。雪は2～3m位だろう。小至仏にスキを置いて至仏ピストン。山頂の風は冷たい。風の来ない日向でささやかな食事を取る。尾瀬ヶ原，燧岳のすばらしい眺め。原は真白で，その中に蛇のように，くしゃくしゃまがって流れる黒い川，又川に沿って長々と続く疎林。何とも言えないすばらしさだ。遠くの山，近くの山，全て青い空間の中に白い塊としてはっきり見えた。全く信じられない程良い天気だ。帰りは小至仏を一寸降りた所でスキーをはいた。始めのうちはスキーが自由にならず，よく転んだ。急な斜面を斜，キックターンでかなりスムーズに降りて来た。雪は朝と全く違いベタベタだ。スキーはとても重い。それでも樹間を縫って，3時間かけて登ったところを1時間15分位で鳩待峠まで降りて来た。ここからは斜面がなだらかなので一寸も滑らない。スキーを取れば，ズボズボ入ってしまうのでどうしようもない。ここで一番疲れた。しかしともかくすばらしい日であった。

4 日 ①

天気が悪くなりそうなので下山する事になる。帰りはスキーが使えるのでかなり楽だ。それで



も石が出ていたりするので3時間かかってしまった。鳩待入口でバスを待っていたら、車が停って乗せてくれた。

## 尾瀬（至仏、笠）スキーツアー

4月10日～12日 高橋、斉藤、草場輝

10日 足利~~~~桐生~~~~沼田~~~~鳩待口(11:20)——昼食(11:30～11:50)——津奈木(14:30)□

11日 □(6:20)——鳩待峠(7:15)——(9:45)小至仏山(10:00)——SKI——(10:30)——至仏山(11:20)SKI——(11:45)鳩待峠直下(山の鼻側)(12:15)——(12:45)山の鼻(13:50)——鳩待峠(15:20)——(15:30)□

12日 □(5:35)——鳩待峠(6:23)——20489(7:50)——(9:05)笠ヶ岳(9:10)——(9:20)昼食(10:00)——(10:30)20489(10:50)——鳩待峠(11:05)——(11:20)津奈木□(13:30)——鳩(15:30)鳩待口(15:40)——戸倉(15:55)——足利

10日

鳩待口では木影にチラホラ残雪があるだけであるが、次第次第に高度が上ると、やはり雪はまだ多い。でも時期が遅いせいかな昨年よりは、全々楽勝に津奈木橋 T.S に到着した。4月といえども、山はまだまだ冷える。外に物を出しておく、カチンカチンに凍るのである。

11日 ○

例年のように、電柱に沿って、T.S を出る。夏は、ここは背丈程の竹が密生していた筈である。鳩待峠からは、小至仏がけて進む。動物の足跡を除いて、人の足跡は見当らぬ。雪面からの照り返えりがまぶしい。昨年はこの道を登り、滑り降りたのである、今回は至仏山頂より鳩待峠と山の鼻の中間あたり目がけて滑降する。我々のスキー技術の未熟さが嘆かれる。すばらしい斜面である。

12日 ○

快晴続きで、昨晚から、今期にかけて非常に寒かった。昨日と同じ道を、今日は笠ヶ岳へと目差す。早朝は非常に寒い、歩いているうちに暖かくなり、又、雪に足がはまることもなく歩きよい。2048p から見る至仏の斜面、尾瀬ヶ原、燧岳、アヤマ平方面が雄大に連なる。真白に輝く奥利根源流の山に、平ヶ岳から始まり丹後、越後沢山、越後三山と言った例のおなじみの山々が大パノラマを見せてくれている。笠ヶ岳へは、2048p より滑り、登りで、笠山頂からは、日本海も見えんばかりである。上州武尊が以外に近く見えた。下りは、もと来たコースを滑降、T.S 11:20 着で、のんびりと家へ帰れる。そう言えば、これで山でのスキーも又来年までおあずけかと思うと、少々さびしかった。



## 浅間山スキー——登山

3月23日 ① 深沢、小島、草場

中軽井沢(3:10)——(3:30) 峰の茶屋 (3:50)——引返し点 (5:50)——(5:30) 茶屋(7:15)——肩——(11:15)山頂——(14:00)茶屋(15:18)——(16:00)軽井沢

中軽井沢よりタクシーで峰の茶屋まで。ここからランプをつけて歩き出す。五合目位まで行った所で、非常に風が強く行動できず、峰の茶屋に引き返す。茶屋で後の行動をあれこれ考えていたら、風がいくらか弱まって来たので、再度出発する。しかし、五合目以上はやはり風が強く、立ってられない。雪の上にへばりつきながら、なんとか肩の所まで行くが、体が起こせない。ピッケル、アイゼンの小島が、ピッケルにしがみつきながら、なんとか一人山頂を踏む。下りは、雪が硬いので、短いスキーではとばされやすい。しっかりした靴が必要。強引に滑れば、なんとか茶屋まで滑って下りられる。

## 志賀高原スキー

1月2日～6日

内田、深沢、横尾、小沢、斉藤、草場、上山、  
松田、堀江、高橋、斉藤、草場、須田

2 日 桐生~~~~長野~~~~湯田中——熊ノ湯□

6 日 □——湯田中~~~~長野~~~~桐生

2 日 ①——⊗

湯田中からは、タクシーで熊ノ湯まで行く。10分位登った所、スキー場の右手に入ってテントサイトとする。荷物を背負っているため、スキーをはいていても50cmくらい沈む。最初スキーで固め、次に靴で踏んでテントを張る。水は近くのハウスで貰って来る。テントは3張。滑らずにすぐ寝る。

3 日 ⊗

朝起きると、50cm位の所まで出口が埋まっている。午前中、K、F、T、M等は、頂上付近までリフトを使い、頂をまいて渋峠に出る。そこで2、3時間滑り、頂上からT、Sまで滑り下りる。午後はゲレンデスキー。

4 日 ⊗

横手山の頂上まで行く。リフトに乗っているだけなので非常に冷たいが、頂上には、大きな建物があって暖をとれる。頂上から一気に滑り下りると良い。草場、深沢、高橋、内田4氏は池ノ



拾山まで行き、滋峠に引き返し、だまし平に行き、又引き返す。トレースが無いので苦戦した。

5 日 ⊗

内田さん、小沢さん、斉藤さん、横尾さんら帰る。テントの中は、真中が地盤沈下し、天井はどんどん高くなり、雪も毎日降り続くので、さながら雪穴の様である。皆ゲレンデスキーを楽しんでいる。正月もこの日辺りになると人も少なくなっている。

6 日 ⊗——①

3つのうち1つのテントは、かなり弛みを生じ、凍りつき、中が狭くなっている。ラジウスをつけると水がポタポタとたれる程である。そのパーティーで朝食（雑煮）を作る時、水と石油を間違えて大騒動。今後も、呉々れも石油は間違えないよう注意せねばなるまい。帰りはバスを使用、中野駅のホームで、昼食のため残りの餅を焼き、喉をいやすため残りのみかんを全て平げる。昨年の野沢温泉に比し、あまり良いスキーコンディションではないとの声が多かった。



## 部 員 住 所 録

現住所 帰省先 1969年12月現在

|    |         |                  |                        |
|----|---------|------------------|------------------------|
| 4W | 加 藤 芳 彦 | 桐生市宮本町1505 坂口方   | 静岡県賀茂郡下田町 1—4—18       |
| 4W | 広 田 雅 司 | 桐生市宮本町1660 松村方   | 栃木県宇都宮市崔田町3346—3       |
| 4S | 岡 部 宣 男 | 足利市板倉町800        | "                      |
| 4S | 中 島 好 司 | 勢多郡粕川村月田1146—1   | "                      |
| 4K | 上 山 悟   | 桐生市東 2—4—42      | 埼玉県児玉郡美里村北十条84         |
| 4M | 埋 橋 文 人 | 桐生市宮本町1505 坂口方   | "                      |
| 4M | 小 堀 正 治 | 新田郡新田町花香塚836     | "                      |
| 4M | 斉 藤 勝 男 | 桐生市宮本町           | 千葉県東金市菱沼111            |
| 4M | 南 雲 利 夫 | 桐生市本町 3—299 堀江方  | 新潟県南原沼郡六日町八幡15—2       |
| 4M | 根 岸 秀 幸 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 東京都国立市北 3—3—2—2        |
| 4M | 山 田 定 男 | 足利市通り 3—3513     | "                      |
| 4E | 須 藤 誠   | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 安中市嶺623                |
| 4E | 中 島 恒 弥 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 京都市右京区嵯峨二尊院前往生院<br>町 6 |
| 4L | 堀 江 英 雄 | 足利市月谷町392        | "                      |
| 4L | 松 田 衛 次 | 太田市内ヶ島1574       | "                      |
| 3W | 五十嵐和男   | 埼玉県本庄市文字山王堂212—2 | "                      |
| 3W | 宮 川 英 夫 | 桐生市宮本町1464 坂口方   | 茨城県下館市金井町甲873          |
| 3W | 大 橋 進   | 桐生市本町 3—299 堀江方  | 埼玉県浦和市別所 2—14—9        |
| 3P | 高 橋 徹 夫 | 足利市助戸新山町1559     | "                      |
| 3P | 吉 野 栄 二 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 埼玉県熊谷市久下530            |
| 3P | 河 野 政 美 | 桐生市宮本町1445 斉藤方   | 徳島県麻植郡鴨島郡知恵島境815       |
| 3P | 鳥 居 寿 一 | 桐生市宮本町1445 斉藤方   | 横浜市戸塚区阿久和町3662         |
| 3P | 大 沼 善 行 | 足利市助戸大橋町1686—5   | "                      |
| 3P | 滝 野 哲 司 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 群馬郡箕輪町生原1745—1         |
| 3C | 根 本 隆 一 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 北埼玉道函館市柏木町97           |
| 3L | 荻 野 良 一 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 埼玉県深谷市上敷免965           |
| 3L | 浅 見 武 義 | 桐生市天神町 3—452 啓真寮 | 藤岡市戸塚497               |
| 3E | 須 田 好 明 | 桐生市相生町 5—111 吉田方 | 千葉県館山市竹原715            |
| 3K | 川 野 行 由 | 桐生市天神町 啓真寮       | 兵庫県尼崎市常光寺西ノ町 1—34      |



|     |       |                    |                |
|-----|-------|--------------------|----------------|
| 3K  | 加藤健一郎 | 桐生市西久方町1-759 克子利一方 | 三重県三重郡菰野町1452  |
| 3M  | 渡辺 等  | 桐生市菱町黒川2141 米山方    | 姫路市広畑区京見社宅14号  |
| 3M  | 関田卓夫  | 桐生市本町2-150         | "              |
| 3M  | 斉藤 功  | 桐生市天神町3-452 啓真寮    | 埼玉県藤岡市         |
| 3M  | 北詰茂広  | 足利市旭町788           | "              |
| 院2C | 木村隆男  | 桐生市宮本町1505 坂口方     | 神奈川県平塚市南原243   |
| 院2E | 草場 彰  | 足利市今福町1            | "              |
| 2M  | 山口昌男  | 太田市矢場2961          | "              |
| 2M  | 鎌田篤夫  | 栃木県佐野市出流原町991      | "              |
| 2P  | 山口 修  | 桐生市天神町3-452 啓真寮    | 栃木県佐野市出流原町898  |
| 2E  | 海老原孝司 | 桐生市東1-10-8         | 東京都墨田区本所2-13-9 |
| 2E  | 長谷健二  | 桐生市東1-10-8         | 東京都板橋区蓮沼町24    |
| 2L  | 太田 博  | 桐生市仲町3-27          | "              |

## O B 住 所 録

|       |                   |                     |
|-------|-------------------|---------------------|
| 石坂辰己  | 三菱化成              | 福岡県北九州市八幡区 南王子寮     |
| 久保田昇  | 新日本窒素KK           | 熊本県水俣市陣内窒素 向山寮内     |
| 宇多川紘  | 高崎市東町110          |                     |
| 長谷川章  | 興国化学山辺工場研究開発部     | 太田市由良883            |
| 河野通利  | 三菱油化              | 三重県四日市市小古曾町1700 追分寮 |
| 奥原 功  | 群栄化学工業            | 安中市下秋間甲1524         |
| 岩下佳司  | 日清紡績富山工場          | 富山県富山市堀15           |
| 新井靖衛  | 東洋パルプ             | 広島県呉市広町北古新田100 向陽寮  |
| 大島隆夫  | 山洋パルプ             | 島根県江津市郷田南寮          |
| 浅海瑛二  | 昭和化学工業            | 太田市鳥山1523           |
| 鳥居寛治郎 | 千野製作所生産技術課        | 藤岡市                 |
| 見供滋忠  | 三菱油化              | 三重県四日市市小古曾町1000 内部寮 |
| 関口岳男  | 群馬大学工学部機械工学科松居研究室 | 埼玉県小玉郡上里村勅使河原1158   |
| 熊谷好司  | 三菱電機              | 広島県福山市野上町2-20-2 野上寮 |
| 鳩原恵二  | 東芝電気器具加茂工場        | 新潟県加茂市上条352 新町寮     |
| 秋草洋二  | 平岡染織草加工場          | 埼玉県草加市松江町703 同工場内   |
| 藤村孝道  | モーリン化学            | 栃木県足利市駒場町           |



|           |                    |                     |               |
|-----------|--------------------|---------------------|---------------|
| 内 田 邦 夫   | 神戸精鋼               | 神戸市灘区符原字牛小家山1014    | 六甲台神鋼寮        |
| 朝 倉 正 博   | 日本電気玉川事業所整流器事業部技術部 | 川崎市野川3139           | 日電野川寮         |
| 大 塚 光 守   | 東芝電気器具前橋工場第2技術部    | 前橋市古市町180           |               |
| 鹿 山 公     | 精工化学               | 東京都北区昭和町3-8-4       | 武蔵織蔵方         |
| 小 林 弘 一   | 明成商会東京営業所          | 東京都太田区田園調布3-46-3    | 明成寮           |
| 高 橋 浩     | 群馬日産総合サービスセンター     | 前橋市文京町1-53-10       |               |
| 川 田 祐 一   | 堀田産業               | 足利市元学町823           |               |
| 小 柳 健 次   | (不明)               |                     |               |
| 黒 田 宏     | 埼玉澱化学工業            | 埼玉県浦和市              |               |
| 木 村 隆 男   | 群馬大学工学工学部大学院       | 桐生市宮本町1505          | 坂口市太郎方        |
| 小 島 昭     | 群馬工業高等専門学校         | 桐生市本町4-338          |               |
| 横 尾 国 夫   | 三豊製作所宇都宮工場         | 栃木県宇都宮市下乗町2200      |               |
| 草 場 彰     | 群馬大学工学部大学院         | 栃木県足利市今福町1          |               |
| 金 子 岩 男   | 日東製粉               | 埼玉県草加市栄町松原団地B46-7   |               |
| 五十嵐 信之    | 東洋インキ製造KK          | 埼玉県浦和市南浦和公園住宅42-501 |               |
| 久 保 田 耕 司 | 東芝電興               | 埼玉県浦和市              |               |
| 藤 井 幸 吉   | 東京工業大学大学院          | 東京都品川区豊町6-26-2      |               |
| 小 沢 達 樹   | 桐生繊維試験所            | 群馬郡群馬町棟高1928-99     |               |
| 横 山 崇 雄   | 桐生市相生町1-126        |                     |               |
| 江 黒 茂     | 東武                 | 埼玉県熊谷市石原1907        |               |
| 原 文 男     | 日本酸素清和寮            | 山口県都農郡南陽町大字富田1650-1 |               |
| 斉 藤 譲     | 大日本印刷若林寮           | 埼玉県入間郡福岡町上野台1500    |               |
| 顧問 大 浦 勝  | 桐生市西久方町1-759       | 克子利一方               | 島根県松江市朝酌町1098 |



## 編 集 後 記

ここに皇海第6号をお届けします。発行が予定より非常に遅れたことを深くおわびいたしますと同時に、私達編集者の至らなから、提出された報告書を充分生かしきる様な編集のできなかったことを深く反省しております。

賢明なる後輩諸君は来年こそは我々のような失敗をしないように、記録については十分な配慮をしてもらいたい。またこの部誌が少しでも次の一年間の部活動を有意義にする参考となれば、と思います。

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 発行日 | 昭和45年7月1日             |
| 発行者 | 群馬大学工学部<br>ワンダーフォーゲル部 |



# 正 訓 表

| ページ | 行  | 正                    | 正                                 |
|-----|----|----------------------|-----------------------------------|
| 1   | 10 | 跡査して(る)のも            | 跡査してみ(る)のも                        |
|     | 14 | 撞れ                   | 撞れ                                |
|     | 14 | 愛情                   | 愛着                                |
| 1   | 21 | 林道終点(6:28)           | 林道終点(6:38)                        |
|     | 25 | 坂主山                  | 坊主山                               |
|     |    | 六林班(9:30)            | 六林班(9:30)                         |
| 2   | 4  | 天望                   | 展望                                |
|     | 7  | ヤセ屋根                 | ヤセ屋根                              |
|     | 24 | 庚申山〇— —オロ山           | 庚申山荘—庚申山—オロ山                      |
| 3   | 19 | ●                    | ●                                 |
|     | 20 | (7,10 楠木7,40)        | (7,15 楠木7,40)                     |
| 4   | 5  | 起床 5,30              | 起床 3,30                           |
|     |    | 三本 10,30 7"ナ峠 10,40  | 10,30 五本 7"ナ峠 10,40               |
|     | 12 | 三本 7"ナ峠              | 三本 7"ナ峠                           |
|     | 33 | 3,00 □ —             | 3,00 □ 5,20                       |
| 5   | 1  | 1447mh               | 1447mh                            |
|     | 14 | 1447mh 左の            | 1447mh の                          |
| 6   | 6  | コバイケンソウ              | コバイケンソウ                           |
|     | 29 | 坪入山頂 5,52 1212mh ヒーク | 5,55 坪入山頂 6,10 — 8:35, 1712m のヒーク |
| 7   | 1  | 最初の                  | 6,45 最初の                          |
|     | 22 | 1617mh 10:15 のヒーク    | 10:15 1617m のヒーク                  |
|     | 23 | — 1723mh 14:15 の鞍部   | — 14,15 1723mh の鞍部 14,25 —        |
|     | 24 | — 167mh の            | — 16,50 1697mh の                  |
|     | 25 | 今日は雪がない              | 今日は、水がない                          |
| 8   | 19 | 丸山岳 10,45 との鞍部       | 10,45 丸山岳 との鞍部                    |
|     | 26 | 方向が定めた。              | 方向を定めた                            |
| 9   | 9  | □ 5,00               | □ 5,10                            |
|     |    | 林道 — 14,30           | 林道 14,30 —                        |
|     | 10 | 中島(恒)                | 中島恒                               |
| 11  | 1  | 7月27日                | 7月29日                             |
| 12  | 3  | 屋根                   | 屋根                                |
|     | 11 | 中島さん                 | 中島さん                              |
|     | 12 | 石楠花                  | 石楠花                               |
| 13  | 12 | 声と併に                 | 声と併に                              |
| 15  | 12 | ● 時々 ●               | ◎ 時々 ●                            |



| 行  | 行  | 課                | 正                    |
|----|----|------------------|----------------------|
| 18 | 7  | 清水峠              | 清水峠                  |
| 20 | 28 | いくさでも            | いくさかでも               |
| 23 | 3  | 石黒屋根             | 西黒尾根                 |
| 25 | 31 | あろうことに           | こともあろうに              |
| 27 | 21 | 目通しが             | 見通しが                 |
|    | 25 | 心配に              | 心配に                  |
| 30 | 16 | 12日              | 11日                  |
|    | 20 | 18日              | 13日                  |
|    | 29 | 12日              | 12日〇                 |
| 31 | 10 | 13日              | 13日〇                 |
|    | 20 | —(15:50)金精岳      | —(15:00)金精岳          |
|    |    | 金精岳              | 金精峠                  |
| 32 | 15 | —田代山下鞍部          | (14:35)田代山下鞍部        |
|    | 21 | (13:00)—鬼怒沼山手前鞍部 | (13:00)鬼怒沼山手前鞍部      |
| 33 | 4  | オドリ              | オドリ                  |
|    | 5  | 〃                | 〃                    |
|    | 8  | 倉気               | 倒木                   |
|    | 26 | である15分           | である15分               |
| 35 | 11 | 日光温泉             | 日光温泉                 |
|    | 13 | —11:55—          | —                    |
| 37 | 18 | 13日              | 12日                  |
| 38 | 5  | ながのの下            | ながのの下を下り             |
|    | 7  | 休憩               | 休憩                   |
|    | 16 | 10~13 日寺本        | 10~13日               |
|    | 19 | (13:52)          | (13:25)              |
| 39 | 17 | 登中               | 登りの途中                |
| 40 | 1  | (17:40)木上        | (17:40)—木上           |
|    | 25 | シシ               | イシシ                  |
|    |    | ユマ               | ノコマ                  |
| 41 | 8  | ウィーク             | ウィーク                 |
| 42 | 16 | あつた              | あつと                  |
| 43 | 12 | (5:30)—(7:00)    | (5:30)(7:00)—        |
| 44 | 24 | —ノ越(11:10)       | —ノ越(11:30)           |
|    |    | 浄土山(14:35)       | 浄土山(12:30)           |
|    |    | 獅子ヶ岳             | (14:35)獅子ヶ岳(15:15)   |
|    |    | ガラ峠              | ガラ峠(16:25)           |
|    | 25 | 五色原(17:25)       | 五色原(17:25)           |
| 48 | 12 | 横川岳—(12:20)      | 横川岳(12:20)—          |
|    | 17 | (8:45)—三峰山       | (8:45)—西濃鳥岳(9:20)—間岳 |
|    |    |                  | (10:45)(12:06)—三峰山   |
|    | 22 | ◎                | ◎                    |
|    | 31 | 日横達沢             | 横達沢                  |
|    |    | 7:20 静岡          | (7:20)—静岡            |
| 49 | 1  | (5:55)—息岳—(5:55) | —息岳(5:55)—           |



| 誤  |     | 正                         |
|----|-----|---------------------------|
| 49 | 1~2 | P48 Q29 中盛丸山(4:45)の後いれる。  |
| 52 | 25  | 三峰口                       |
| 57 | 9   | 長岡(22:50)                 |
| 61 | 16  | 石花越                       |
| 63 | 4   | 妙見山頂                      |
| 68 | 30  | 香深                        |
| 71 | 25  | 鉢山(9:40) — (9:50)ニ也       |
| 73 | 18  | 南峰                        |
| 74 | 14  | 判定できない                    |
|    | 26  | 神戸(6:33) <del>福井</del> 勝山 |
| 75 | 19  | そこには昨日雪の中で                |
| 77 | 18  | 3.4日まで                    |
| 78 | 10  | (8:25) 野沢温泉 — スキー場△       |
|    | 12  | スキー△                      |
|    | 23  | 眺望                        |
|    | 25  | 11日                       |
|    | 28  | 上ノ平 — 毛無山                 |
| 79 | 25  | 大島部落 — 入口テントサレ            |
| 80 | 32  | 失敬                        |
| 82 | 5   | 多少晴向                      |
| 84 | 10  | 2048P                     |
|    | 11  | 〃                         |
|    | 13  | 10日 ①                     |
|    | 24  | 今朝                        |
| 85 | 4   | ——(11:00)肩——              |
| 86 | 1   | 三峠                        |
|    | 9   | 異々も水と石油は                  |